
ENGLISH WORDS

澤またし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ENGLISH WORDS

【コード】

N3671K

【作者名】

澤またし

【あらすじ】

受験に必須？ 単語集『システム英単語』の収録語を順番にお題にしたシヨートシヨート集。

1・follow(前書き)

一作一時間、日更新を目標にしています。短時間で仕上げるため出来は悪いかも知れませんが、よければ御一読下さいませ。

5/21追記

上記の目標は現在全く継続されておりません。どうか広いお心でお願いします。

参考：刀根雅彦・霜康司 駿台文庫(・05) 『システム英単語V
er.2』

1・follow

「わかりました」

としかわわない女だった。指示すれば何だってしたし、どこにでも行った。

鉄面皮、と罵ったことがある。少しは愛嬌でも見せてみると。

「わかりました」

女はそう言っつて、翌日には別人のように朗らかな娘になっていた。返事も明朗に、

「わかりましたっ」
だ。

無茶なこと何度か言っつてみたが、女は全て実現して見せた。乙女のような笑顔で、命令の完遂を突きつけた。

ほんの一度だけ失敗したことがあった。

「死んでみる」

そう言っつたのだ。

女は長いこと考えていたようだった。そうして最後に、泣きついできた。

「できません。あなたを一人にたくありません」

その時から、嫌な感情が纏わりつくようになった。それが罪悪感であるとは程なく気付いたが、認めきれなかった。

あの女は、玩具だ。

大失敗をやらかした父が見知らぬ若衆に殺されるのを、目にした娘。それを引き取っつて恩を着せた、いいようにできる玩具だ。

この広い屋敷に二人きり、いい退屈しのぎの道具。
その筈だった。

「水をくれ」

「わかりました」

手際良さの中に慈愛を込めた立ち居振る舞いで、女は私を世話している。

腕一本満足に上がらない。死期が近づいていると、随分前から悟った。

女の白い指が、静かにポットを持ち上げている。

その指。

その美しい指が、今や私の唯一の持ち物だ。

「和江」

初めて、名前を呼んだ。女が、和江が振り返る。

無言の中に用件を問う、その柔らかな目、繊細な頬、微笑む口元。小さな驚愕が心臓に走った。私にもまだこんな感情が残されていたとは。

「和江。話して…置きたいんだ」

そこまで言って咽せた。焦り。言ってしまったわなければ　しかし、

和江はその細い指でそっと、唇を封じた。

黙って首を振る彼女の目は、全てを包み込むかのようなだった。

了承の意に唇を引くと、和江は笑い返し、盆を下げて背を向けた。

「ひとつ…」

その背に声を掛ける。

「お前がもし…この年寄りが重荷なら、いつでも…殺してくれ」

和江は立ち尽くしている。ピンと張ったその背筋が、小刻みに震えていた。やがて耐えきれなくなったように、顔を両掌に沈めたらしい。小さな嗚咽で、喉を揺らしている。

その声は次第にくつきりと、小鳥の囀りのような響きをたてた。

和江がゆっくりと振り向く。その白い手を顔から剥がし、私を見下ろした。

傲岸に、凄絶なまで美しく。

くつくつくつと、和江は喉を鳴らす。従順な姿勢も慈愛に満ちた微笑もかなくなり捨て、彼女は今、本当に心底からの歡喜に燃え立っていた。

言葉もない私の足元、彼女は大仰な仕草で辞儀をすると、今まで
になく力強い声を発した。
「わかりました」

1. follow (後書き)

「」に従う「、

」に続く「。

読んで下さってありがとうございます。よろしければ、「感想・
ご意見等」ご遠慮なくお聞かせ下さい。

室田家はもう何代も、一風変わった教育方針を貫いていた。原因は、嫁に迎えた一人の女だ。

「裕福だからと贅沢はさせません。生まれたときから世の厳しさを叩き込むのです」

箱入り娘であった女は、社会の現実を一度目にした時、己の育った環境を間違いだと悟ったのだった。そして決意した、社会的適応力と逞しさを持った子を育てるのだと。

幼児が頭をぶつけそうな家具の角は、そのままにしておいた。乳は遣ったが離乳食には香辛料をしこたま振った。自転車に補助輪は付けず、買物に歩いて行かせた。

だが成長すれば、当然次第に慣れてゆく。婦人は考えた末、住環境を厳しくした。それは何もみすばらしい住まいにするということではなく、油断のならない生活を強いただけの事である。

自室に入るのにランダム変化する暗号が要る。廊下をいい加減に曲がった足運びには、天井から槍が降る。家中の者に礼儀を払わなければ、床下に引きずり込まれる。

そこここに仕掛けをするうち、いつしか室田家は、びっくりからくり屋敷と化していた。

社会への適応力どころではない。室田の子女は一步外に出れば、どこぞの戦場を潜ってきたかという程の、世間から浮いた空気を纏う。本末転倒であったが、威を見せるには充分以上に役立った。

こうして室田家は、その界限に広く知られることとなったのである。しかしそれにもいくらかの弊害はあった。筋者であるかのように見られることと、もう一つ。

「大旦那様、本日は如何致しますか？」

「そうじゃの…籠球でもやるか。よいよい、車など。走ってゆく」
年寄りか、長生きするのである。

様々な仕掛けをかい潜り暮らすため、頭も体も鈍ることがなく、いつまでもハングリー精神を失わない。下の代にしてみれば迷惑な話であった。

故に、その死期が近付いたとなれば屋敷中の浮き足立ちっぷりは尋常ではない。つい廊下でこそこそと話し、仕掛けで怪我をした女中がいたほどだ。

ある日、内蔵を悪くして余命一月と言われた老主人が、単身外出した。家の者が心配して引き留めたが、強いて徒歩で出かけ、そうして倒れた。

それ見たことか、外で死なれて遺言でも聞き逃したらどうする
慌てふためいて屋敷にかつき込み、親類縁者一同が床についた老人を取り囲んだ。

やがて痺割れた唇が開き、嘎れた声が喉から絞り出されようとした時だ。

中学生になった三代目が、仕掛けの数々をもものともせず襖をぶち破って駆けつけた。満身創痍、汗だくで祖父の枕元に取り付き、

「バカヤロウ爺い、何だつて一人で出たりしたんだ！」

涙声に喚き立てた。

親戚一同は焦燥と苛立ちを露わにした。今はそんな話を話す場合ではない。すると、老人の諦めきつたようだった表情が次第に苦々しげに歪んで、白い口ひげの間から怒りを発した。

「こんな屋敷の中で…くたばって…堪るか！うっかり倒れてからくりなんぞに…掛かっちゃ堪らんわ…。おまけに業突張り共が…山ほど、控えていると来た。…びた一文！…渡さねエぞ、畜生共…屋敷もてめえらも消えやがれ！……………」

かつと目を開き、それきり、老人は息絶えた。

集まった全員が、呆然として固まっていた。老人に取り纏ったのは、三代目と強かで有名な分家の伯父のみである。

色々考え過ぎるのも、時に災い…というお話。

2. consider (後書式)

「を考慮す」。

3・increase

ねえねえ、聞いた話なんだけどさ。

え？違う違う、怖い話。絶対誰にも言っちゃ駄目だよ、マジで危ないんだから。

…『自分が増える』って話、聞いたことある？…ない？

あのね、どっかの高校で凄い遅刻しちゃった子がいたんだって。

そんで二時間目からしか出れなくて、だから先生に謝るとかするでしょ？そしたらその先生が不思議な顔して、

「何言ってるんですか？あなた朝のHRから居たでしょう」

…そう言うの。

おかしいなーと思つて友達とかにも聞いたんだけど、みんな「朝から見た」って言うんだって。しかもその子しか知らないようなこと…例えば、昨日の晩見たテレビとか、夕食のおかずとか…そんなこと話したって言うんだよ。おかしいでしょ？

他にもあるんだ。

埼玉から東京に通つてたサラリーマンが、会社でふつと忘れ物を出して、家に電話をかけた。奥さんに頼もうつつもりでよ？何回かコールしたら、相手が電話に出たから「もしもし、俺だけど」って言ったんだって。そしたら相手が妙にびっくりしてさ、
「…どなたですか？うちは ですが」
って。

そうなんだよ。答えた声が、自分の声だったんだって。

しかもその人の場合それだけじゃないの。電話切った後に暫くして上司に呼び出されて怒られたんだけど、それがおかしいんだよね。

「君、お得意様にあの態度は何だ！折角私がついていったのに」

…何か出先での失敗を詰られてるみたいなんだけど。その人さ、その日は会社から一歩も出てなかったらしいんだよね…。

つまりこの人の場合、自分らしき人間が同時に三人バラバラの場所にいた、っていうことになんの。

おかしいよね？

その「別の自分」は、ほっといたらどんどん増えてくのに周りの人は全然気付かないんだって。その内、自分自身が信じられなくなつて…頭がおかしくなつちやつた人もいるって話だよ。

これが『自分が増える』って都市伝説なんだけど。…どう、知ってた？

え？

違つてば、作り話じゃないよ。そういう話があるのは、ホントにホント。…どっかで聞いたような話？そりゃそうでしょ、ドツペルゲンガーとか有名だし。

でもさ。

「もう一人の自分」って類の話がどうして流行るのかって、考えたことない？

まあ色々さ、説明は出来ると思うけど。夢遊病が作り出す錯覚だとか、記憶を忘れることへの不安が変形して、とか。

でも思っただよね。

やっぱ、実際にあるからじゃないかって。嘘だと思つ？…そうだよな。霊とかとおんなじで、見える人は「いる」って言うし見えな人は信じない。だったら居ないも同然だもん。

だけどさ…そういう、居るか居ないか本当には分からない、曖昧な状態が、「怖い」って気持ちになるんじゃないかなあ。

自分が増えるって話にしても。

「私は何人居るんだらう？」

「私はどこに居るんだらう？」

「私は本当の私か？」

「私は本当に私なのか？」

「私は…」

いるのか？

ってね。自分が曖昧な感じが、怖くて怖くて仕方ない……。ね、ちよつと。

何、変な顔して。引かないでよ、私が怪談好きなの知ってるでしょ？それとも…本当に怖くなった？

…あ！

…っ、う、後ろ…！

……………。

あはははは！冗談だつてばもう、マジになるんだからあ。安心してよ、さっきの話でもね、回避する方法があるんだつて。それはね。この「自分が増える」つて話を、増えた人数分だけの他人に話すこと。沢山話せば他の自分はだんだん消えていくんだつてさ。

でも一つ問題があるんだよね…。

話を聞いたほうの人がさ…増えちゃうんだよ。

そう。増える症状が、口伝えて移っちゃうらしいんだ。だからさ、…もう、気付いたかな。

ごめんね？

丁度十五人目なんだ、あんたが。

…ほら、携帯鳴ってるよ。出なくていいの？

3・increase(後書き)

「増える」「
」を増やす。
」。

4 . e x p e c t

そろそろだろう、と思った。

だから準備を始めた。彼に悟られないように、彼の気持ちを早めないように。

早すぎたと人は言うかも知れない。だが私には分かったのだ。会う度、話す度、微かな前兆が見え隠れしているのが、だから諦めた。

今を保つことを諦めた。代わりに、「その時」どうするかを考えることにした。

準備をしてきた。

綺麗に隠し仰せたと思う。彼はきつと自分の気持ちの変化にしか気付いていないだろう。私がこの数ヶ月やってきたことは、全く気付かれていないはずだ。

また「その」後も、私の真実が表に現れることはない。そのため準備だったのだから。

そして、その時は来た。

「別れよう」

場所は私の部屋、時間は夕方。彼に料理を作ってあげていた時。

私は驚かない。思った通りのタイミングだったから。

包丁を置き、鍋を火にかける。手を後ろに組んで、テーブルの前に堅くなっている彼に、ひょいと近づいた。

「うん」

私は笑う。

「わかってた。大丈夫だよ」

飛びつきりの笑顔。とっておきの、この日のために準備した笑顔だ。

大丈夫。私は悲しくなんかない。あんなんか居なくなっただって、何にも痛くなんてない。

だから、なるべく早く、私の前から消え失せてよ。
じゃあね。

4・expect(後書き)

「」を予期する「、

「予想する「、

「期待する「。

「まあやっぱね…夢見がちな時代ってやつだよね」

遙はそう言って肩を竦めた。友人の今日子が、全くだ、といった風に頷く。

「あるある。夢見がちってか、何だろ…厨二病みたいな？」

「そう！　なんかねー、自分には出来る、みたいな妄想しちゃうんだよね」

「昔の作文とか見たら、恥ずかしいんだこれが」

「それそれ」

高校三年生の夏休み。卒業生の九割が進学するだろうという「普通」の学校で、彼女らは受験期の真っ只中にいた。

「結局さ、語るばっかで実際の努力とかしてなかったもん」

「何の？」

「…あの…声優…」

目を逸らす遙を、今日子は意地悪げに覗き込んだ。

「…わ、わかってます！　恥ずかしかったっ」

「そんなことないよ〜。夢あるじゃん」

「だからあ、昔の話だって！　実際そうなれる一握りには、私は入ってないわけで」

「やってみもしないで言っちゃう？　そゆこと」

「だってさ」

歩調を落として、遙は半ば冷めた、拗ねたような視線を送った。

「…ねえ？」

今度は、今日子が目を逸らす番だった。

「まあ、ね」

二人並んで、とろとろと歩く。

「そんなさ、夢と希望に満ち溢れてたらさ。さもない受験生なんてやってねっつの」

「ですよね…」

同時に嘆息して、立ち止まる。住宅街を横断する丁字路にぶつかって、顔を見合わせた。

「じゃ」

「うん。まあお互い」

「ファイトね」

「中間テストっ！」

「言わないでえ〜」

馬鹿に明るい笑い声をぶつけ合って、二人はそれぞれ帰途についた。

別れた途端、憂鬱に足を引き摺られて、遥は肩を落とし俯く。胸の中にはただ重いだけの勉強が、泥のようにわだかまっていた。

何度目かの暗いため息を吐く。少し寄り道しよう、罪悪感に駆られながら脇道に足を向けた。

それが良くなかった。

近くにある大学の側を通りかかったときだ、

『あなた、いい加減にしなさいよ！』

耳元に大声を聞いて、遥は飛び上がった。つい立ち止まり、恐る恐る耳を澄ませると、どうやら芝居の練習らしい。

鳶の絡まったフェンス越しに、そっと覗き込んだ。

この暑い中、日差しに焼かれながら、大学生たちが汗を流している。きつとサークル活動だろう。遥は暫し、夢中になってその様子を眺めていた。

気が付くと大分日も傾き、練習も次の通しで終わるところに差し掛かっていた。これだけ見て帰ろう、そう思った時だ。

「オイ、あれ」

学生の一人が遙に気付いた。しまったと思ったが、逃げる前に別の一人が近付いてきて、足が動かなくなる。

「高校生さん？演劇に興味あるの？…もしかして、ずっと見てた？よかったら近くで…」

汗塗れの顔で、にこやかに手招きする彼を見て遙は必死で硬直を解いた。

「あの、いえ、大丈夫です！すみませんでしたっ」

後は一目散に。振り返ることもなく、走って逃げた。

キャンパスが見えなくなつてやつと、速度を緩める。腕時計を見ると、もう六時半を回っていた。

(随分時間無駄にしちゃった)

そう思って、ふいに、涙が零れる。

遙は演劇が好きだった。小さい頃から、文化祭などで舞台に関わることが多く、よく褒められた。友達の影響でアニメを見始めてからは、声優に憧れるようになった。

けれど、もう遅い。

何もせずにここまで来た。「現実的な判断」と、いつも機会を先送りにした。さつきもそうだ。自分は振り返らない、学生も追つてなど来ない。

ここまでだ。

臆病者止まりなのだ、所詮自分は。

だから、もう遅い。始めから駄目だったのかも知れない。どちらでも大して違わない。

(けど…本当に、キラキラしてたなあ…)

空が美しい夕暮れに染まる中、一つ自嘲の笑みを浮かべ、遙は建物陰に紛れ込んだ。

後

遙はある決意を振り回し、大学を中退することになるのだがそれはまた、別のお話。

5・decide(後書き)

「 することを決意する」「 、

「 を決定する」「 、

「 と判断する」。

昔々あるところに、お爺さんとお婆さんが今しも斧を振りかぶって、一抱え程もある巨大桃を真つ二つにしようとしていました。

そう、その中に何が潜んでいるかも知らずに……

そして、十五年後。

「百七！百八！百九！百……十！」

体の下に汗溜まりを作りながら、延々と腕立て伏せをする男が一人。

桃太郎である。

親の農作業などを手伝った後、疲れた体に鞭打って過酷なトレーニングに励む理由は只一つ。鬼ヶ島に巣くう鬼共を退治するためだ。磨き抜かれた筋肉、鋼のような皮膚。桃太郎は天下無双と言っても過言でない肉体を手に入れるべく、日々奮闘していた。

老いた両親が彼の食費を捻出するため、働き詰めの食いつめで痩せ細っていくのも構いなしだ。人々が鬼に脅かされず暮らすためには、多少の犠牲はやむを得ないのだ。

そしていつしか、桃太郎の体は一点の曇りもなく、ボディビルダーのように膨れ上がったのだった。

「ダッド、ママ！僕は鬼共を倒しに行くよ。帰ったらゴージャスなお家と料理をプレゼントしてあげるぜ」

意気揚々と白い歯を光らせ、脂ぎった二の腕を掲げる桃太郎。対照的に、疲れた溜息を吐きながら陣羽織を用意する老母。

「おまえ……」

「なんだいママ」

日光を反射してきらめく健康的な額を見て、老母は口を噤んだ。

「…何でもないさ。これを持ってお行き、吉備団子だ」

「Oh! ありがとうママ、これで勝てるぜ。じゃあね!」

意気揚々と歩き出した桃太郎。だが、その行く手には次々と難敵が立ちはだかることとなる。

狼の血を引く犬戦士との戦いで学んだ、発達しすぎた筋肉の弊害。知能の発達した改造猿との、決死の駆け引き。そして、恐ろしいスビードを持った孤高の雉との死闘と絆。

冒険の果て、暗雲に煙る水平線の向こうに現れる鬼ヶ島。一人と三匹は、互いに無言の決意を交わした。

俺たちは死しても仲間、さあ、決戦の地へ！

「あれまあ、楽しそうに笑うとる」

「ほんまじゃ。何ぞ面白いもん、見えとるんかのう」

粗末な板敷きに、日の光が細い柱となって注ぎ込む一点がある。

その光に指を絡ませ、幼児のように座り込んで笑う、痩せた白い少年が一人。

顔の左側は、耳近くの無惨な傷跡にひきつっている。誕生の日、親の斧に頭を割られた痕だ。

「不憫なのう…今年十五になるちゅうに」

「それは言わん約束だ、爺さんや」

「そうじゃの…」

老夫婦は目を細め、いつまでも光線と戯れ続ける少年を、切なげに見つめ続けていた。

6・develop(後書き)

「発達する」「、

」を発達させる」「、

」を開発する」。

その日も博士は、自転車を漕ぎに行った。と言っても外に運動に出ているわけではなく、地下に設置した発電器を回しに行っているのだ。

何のためにそんな原始的労働力を使うのかというと、「アレ」の為に使う電気を電力会社から頂いていると出費が馬鹿にならないからである。

「アレ」とは、博士が地下で飼っている生物のことだ。一日一度、一定量の電力を供給してやらないといけないのだそうだ。現在、いわゆる植物状態である「アレ」は、生命維持を完全に他者に依存している。そんなわけで、いつか「アレ」の自立行動を実現するため、博士は日々研究に勤しんでいるのだった。

ある時、博士がぎっくり腰をやったことがあった。床についてうんうん唸り、到底自転車のペダルなど踏める状態ではなかったので、代わりを申し出た。

が、博士は断った。のみならず激怒した。布団をはねのけ無理に体を起こそうとして、案の定具合を悪化させた。

いわんこつちやない、大人しくして、任せておいてくれ。

そう言うと、博士は痛い体で無理に寝返りを打って壁の方を向いてしまった。

誰にも分からん。

誰にも渡さん。

そう言って、拗ねたように顔を背け続けた。まるで泣いているようだったから、それ以上話しかけまいとそつと離れた。

地下に降りて徐々に「アレ」を見る。依然見たときと殆ど変わらず眠っていた。

顔は見えない。見たことがない。ヒトのオスの形をしているが、

実際の所どういった由来の生命体なのか、博士からは聞いた事がなかった。

おそらく話す気もないのだろう。博士はもう四半世紀も、殆ど一人でこの生物の世話をしてきたのだ。まるで、何かに責められるように、いつも難しい顔をして。

自転車のサドルに乗り、一定値を保ちながら慎重に電力を送る。なかなかの重労働だ。これに毎日乗り続けるには、節電などという生温い理由の他にも動機が必要なのではないか。

ものぐさな博士が、握り続けて買い換えないハンドルのゴムは、酷く汚れてすり減っていた。

博士は間もなく復帰した。そして毎日決まった時間に自転車を漕ぎにゆく。まるでそれ自体が、彼の目的であるかのように。

7. provide (後書き)

「」を供給する「、

」を与える。「。

自己紹介をし合ったときから、彼女は僕を避けていたようだった。社内では事務的な会話しか交わさず、笑顔も見せない。社内食堂で鉢合わせると、必ず遠くの席へ移動していた。

やがてその態度が和らいだころそれとなく聞いてみると、僕の名字が苦手だったのだそうだ。何でも、昔いた嫌な男が同じ名字で、その文字を見ると嫌悪感を催してしまうのだとか。

正直大袈裟だと思ったが、余程のことがあつたのだろう、と思い直し、では僕を好きになつて貰うにはどうしたらいいかと聞いた。

彼女は酷く狼狽し、末に冗談で、結婚して妻の籍に入り名字を変えれば、と言った。勿論自分ではないと匂わせながら。

考えもしないというのか、それともアプローチしても無駄だと主張したいのか。いずれにしろ僕はそれ以降、彼女が過去に作つた心の壁を取り除く作業に邁進することになった。

それは案外、うまくいつているように思えた。彼女の笑顔は段々ほぐれていくように思え、仕事後に二人だけで飲む機会も増えるようになった。

そこで、休日に会えないかと誘ってみたのだ。

彼女は快く了承し、社内にバレないようにと少し遠方を会う場所にと提案した。それが気遣いなのかどうか、若干複雑な思いだったが、賛成しておくことにした。

そして、当日。

買い物、食事に散策や談笑と、気ままに過ごした。特に計画など立てていなかったが、彼女は楽しんでくれたようだ。

辺りが暗くなりかけ、そろそろ帰ろうかというとき、ふと彼女が自販機に立ち寄った。飲み物を選びながら、白い明かりに照らされる彼女の、何故か思案げな横顔。僕のことには意識にあるのだろうか、突然そう思い、

手を取り肩を抱き寄せて、キスをした。

いや、しようとした。

唇が触れ合ったのはほんの一瞬。次の瞬間彼女は素早く頭を下げ、僕の顔面に頭突きを食わせたのだった。

思わず手を離し、鼻を押さえながら彼女を見る。

両手をはたき、手の甲で乱暴に唇を拭う彼女。口元にルージユが朱を引く。

彼女は無表情に僕を見ていた。冷たい、見下げ果てた目だ。

「…ごめん」

狼狽の中そう口にすると、その目に嫌悪と憎悪が燃え立った。まるで不良少年がするように「ケツ」と吐き捨て、彼女は罵る。

「お前らはホント、屑だな。マジで消えろや」

その豹変ぶりに呆然とする僕に背を向けて、彼女は自販機に入れた百二十円を放置したまま音高く歩み去った。

お前らとは、この名字を持つ者たちのことか、それとも世の男性全部を指すのか。いずれにせよ僕に分かったのは、心の壁などなくなっていなかったこと、そして彼女がある男を憎み続けていることだけだった。

コーヒーのボタンを押そうとして止め、代わりに自販機を蹴り飛ばす。夜の迫る街角に、僕の「イテッ」が虚しく響いた。

8・continue(後書き)

「続く」

「」を続ける。

今日で何日になるだろうか。

奴はまだ動く気配を見せない。毎日家事をこなしたり、井戸端会議をしているばかりだ。尻尾を掴もうとしても、毛先一本も見せはしない。

俺は、いい加減焦れてきていた。

だが、奴が近所の子供たちを立て続けに拉致監禁した上、殺害していることは間違いない。奴が時たま見せる不審な行動、そして俺の長年の刑事としての勘がそう言っているのだ。

俺は既に引退した身だが、コネで警察の力を借りることは出来る。だが今回は、敢えて独力で捜査をしている。

これはデリケートな事件なのだ。俺を耄碌爺呼ばわりして追い返すような節穴巡査の居る署では、却って状況を悪化させる恐れがある。

間違っても、犯人に気付かれてはならないのだ。

俺は奴の犯行に感づいてから今まで、気配を消すことに終始した。家売り払い、安宿の二階を借り切って休みなく奴の動向を見張ったが、その間も、奴と近所付き合いで仲の良い妻が尤もらしく奴を庇うため、暫く出て行って貰うことにした。

奴の住まいは広い。俺が見張っているのは表玄関と西の車入れで、裏口は把握し切れていない。だが、向こうの道路を通る子供の姿が塀の向こうに隠れ、そのまま出てこない、なんてことは何度もあったのだ。そして家からは何も声が聞こえない。奴が恐ろしい犯罪を犯しているだろうことはすぐさま推測できるのだ。

そして。

今、俺は奴を張って十数日目の朝を迎えている。

認めたくはないが、俺も歳だ。そろそろ体力も精神力も限界に近づいている。

奴の生活は実に規則正しく、毎朝六時に起き出して朝食の準備等をし、家族を学校や職場にせき立て、自分はゴミ捨てや掃除洗濯にと立ち働く。てきぱきとした姿だが、その振る舞いの美しさも俺には周囲を騙すための媚態としか思われぬ。

来た、ゴミ出しだ。

俺は目を皿のようにして奴に見入った。外出の予定でもあるのかうつつらと乗せた化粧、柔らかい輪郭に栗色がかった癖毛が影を落とし、均整の取れた全身が朝日に透けて、絵になりそうだ。

勿論、俺はみとれている訳ではない。対象をよく観察することが刑事には大切なのである。

ゴミ出しを終えると奴は、細い指で髪を耳に掛けながら自宅へ戻っていった。ほとんど直後、ゴミ収集車が来て黒いポリ袋の山を回収していく。今日はあの袋の中身をあらため損ねたが、仕方あるまい。

だが、跡だけでも見ておこう。何か証拠となるような物が残っているかも知れない。

俺は下に降り、周囲に人の目がないのを確認すると、ゴミ捨て場の臭いを丁寧に調べた。汚い作業と思われそうだが、捜査のためには必要なことなのだ。

嗅ぎながら壁沿いを進んでいると、コンクリートの壁にゴミの分別表が張ってある。何の気なしに目を止め、「もえるゴミ」の欄を見た。

俺は、一瞬にして青ざめた。

そこには俺の知らない、しかも俺が証拠を逃したことを示唆するような、ある情報が記載されていたのだ。

『生ゴミ含む』と。

俺が数瞬立ち尽くしていると（勿論頭は働いていたのだが、老体が言うことを聞かなかつたのだ）、間もなく、パトカーがランプも灯さずに駆けつけるのが見えた。

止まった車両の両側から警官二人が飛び出し、俺に駆け寄る。

「早くゴミ収集車を追いかける！」

俺がそう指示すると、警官たちは俺の両脇に立って腕を片方ずつ押さえ持った。

「何してるんだ」

「お爺ちゃん、ちょっと署に行きましょう。お話聞かせてもらいますから」

警官たちに半ば引きずられながら、俺は突然気がついた。

あの女だ。

あの女が、俺を罫に填めたのだ。さもバラバラ死体をゴミに出したような振りをして、俺を不審者に仕立て上げる魂胆だったのだ。

俺は煮えるような怒りを感じながら、奴の家を睨んだ。

見ている、俺が署で話を付けければ一発逮捕だ。豚箱にぶち込んだら、毎日そのお綺麗な面を拝みに行つてやるよ。

「ほらほら、そんな未練がましい顔しない。年甲斐もなくさあ、若い奥さん追いかけて回すんじゃないの」

9 include(後書き)

「」を含む
「」を含む。

今、どこにいますか。どんな子が貴方の手の中にいるのかしら。私はここ、寒くて冷たい土の上。そんな感覚なんて、と貴方は言うかもしれないけど、寒いのは体じゃないんです。

貴方に捨てられて、今日で十日目。ここには誰も居ない。私を拾ってくれる人も、私を壊してくれるものも、何も。ひとりぼっち。

誰にも求められない。

だけど私、貴方のこと恨みません。私を最初に抱いてくれた人だから。

貴方の初めての口づけ。それから何度も何度もキスして、私の中身を飲み干してくれた。私少しは、渴いた貴方を満たすことができたよね？

からっぽの私に貴方は酷く冷たくて、作られた私に死に場所すら与えてくれなかった。いいえ、死ぬんじゃない。私たちは皆、大きな力によって熱を持ち、とろけて、そうして生まれ変わる。

けれど、そんなものは要らない。貴方のこと忘れてしまつくりなら、いつまで独りぼっちでも構わない。

でも少しだけ、ほんの少しだけ疲れてきたから　だから、これきり眠ることにします。

最後に、

…ありがとう。さよなら。

貴方に会える夢を見ながら、埋もれていきます。私はずっと、貴方に出会ったこの姿のままです。

10・remain(後書き)

「ままだころ、」
「うびまる、」
「残る。」

彼は走っていた。息を切らし、汗を絞りながら懸命に走っていた。主が危篤であるとの報せを受け取ったのは、一昨日の晩だ。主の治める地を離れ、遠国を旅して回っている途上のことだった。

文を見るや、彼はすぐさま宿を飛び出した。馬もなく路銀も持たず、身一つで旅をしてきた彼は、もどかしくただ昼夜駆け続けている。

一目。

老いた主にせめて一目見え、その声を、その言葉を聞きたいと。

「良い眺めだと思わんか」

鷹揚な声に馬上を見上げる。精悍な面に微笑を浮かべ、琥珀色の瞳を足元の平原に投げて、主は続けた。

「戦は良い。命が燃えて居るのが見えるわ　この炎。素晴らしい見下ろせば、無数の兵が黒く赤く大地を埋め尽くし、揺るがしている。砂埃が、渴いた風に乗って吹き付けた。

「は……」

「そうであろう。儂を照らす炎だ」

再び振り仰ぎ、はっとする。

澄んだ琥珀色の瞳、涼しげな容。野生の如く風を纏う頭髪。膝を付いた。

「仰せの通りにございます」

主の目がこちらに向いた気配はなく、小さな笑い声と、雄大な地平線だけがそこにあった。

広大な国土に足を踏み入れると、見晴らしのよい高台から荘厳な城が臨まれる。城下までの緩やかな下り坂を、彼は一心に駆け下りた。

「こんなことなら旅になど、と思う。国が安定した頃、自らの「答え」を求め城を出て経巡ったが、主に勝ると思われる何物も見つけられはしなかった。

所詮自分はこの程度の器なのか、そう考えて眠れない夜を彼は幾晩も繰り返している。

主が持つ答え。

それを知らなければ、自分はこの先を登っては行けないという気がしていた。

空気を一息に吸い込んで、喉がひりひりとざらついた。長年の戦と行脚で鍛えた足がもつれそうになる。躓いて持ちこたえ、揺れる膝を強く叩いて、彼は体を奮い立たせた。

早く、早く。

急がなければ

「陛下！」

寢室に案内されるが早いか、彼は主の寝台に駆け寄った。

世の全てを盤上に転がした主。思いのままに生き、欲しいままに掴んでいった主。その主が最期に見せる目を、奏でる言葉を、彼は求めた。

「陛下…私です」

息を切らしながら枕元に膝を折る。汗みずくで細い手を握り、顔を上げて 彼は、絶句した。

貧弱。

病に老い、痩せさらばえて横たわる主。その眼に往時の堂々たる光はなく、只、命の残り火が灯っているのみだ。

「…陛下」

「あ、あ」

嘎れた声で、主は言った。

「まだ…もっと…ああ、誰か！僕はまだ…」

遠い、執着を燃やした眼で見ているどこかへ、主は手を伸ばした。そうして震える指が二、三度虚しく空を掴み　それきりだ。

寝室に噉り泣きが響き渡る。息絶えた主の面には、深く苦しげな皺がきざまれていた。

辿り着いてなど、いなかった

彼は涙を流しながら、妙に体が冷えていくのを感じていた。

11・reach(後書き)

「」に「着く」
「」に「達する」

私と聡子は幼なじみで、同じ大学に通っている。周りのみんなは私たちのことを、とても仲が良いと見ているみたいだ。

それもその筈で、学部もサークルも、おまけに住んでいる部屋まで同じと来たら怪しい関係を邪推されても仕方がない。夫婦みたいとからかわれた回数は数え切れない。実際は、ただ資金面の問題から同居しているに過ぎないのだけれど…。

じゃあ本当は仲が悪いのかというと、決してそんなことはない。聡子は私の大事な友達だ。優しくて明るくて、時々冗談も言ったりする気のいい奴。高校生の頃まではよく喧嘩もしてたけど、最近では滅多にそんなこともない。

そんな具合にうまくやってきたんだけど、最近、少し気に懸かることがある。聡子は何だか、私に遠慮しているみたいなのだ。喧嘩をしなくなったのは、お互い大人になったからというより聡子が控え目になったからではないか、なんて気もしている。

思えば同居が決まった頃から聡子は変だった。家財道具を自分が都合すると言ったり、面倒な手続きを全部引き受けたり。そもそも同居の話自体が聡子の提案だったのだ。「安くていいアパートが見つからなくて」なんて言ってたけど、絶対嘘。うちの家計がギリギリなの知ってたからだ、私は思っている。

なんでそこまでしてくれるのか？ そう聞いたら、聡子は困ったように笑って誤魔化した。妙に申し訳なさそうな態度。私が時々機嫌が悪いと、身を縮めているような気配。

思い当たる節はないけど、何となく予想は付く。聡子は、優しい奴だ。だからきつと、「私に悪いことをした」って何でもないことで罪悪感を抱いているんだろう。私はと言えば聡子と違って大ざっぱで忘れっぽいから、原因なんてちっとも覚えちゃいない。

だから。

敢えて、聡子にその事は教えずにいる。私はガサツだけど、人に意地悪するのは得意。苦しい顔を見せようとしらない聡子が可愛いし憎たらしいから、暫くは放っておくつもりだ。

もっと引つ張っておいて、ある日聡子に突然言ってあげようと思っ
う。

「気にしないでいいよ。とっくに許して
て

*

「さ…と、こ…?」

振り向きざま、少女は椅子から転げ落ちた。その背中には鈍い銀色が突き刺さり、次第に滲み出す赤がシャツを染めていく。

「…な…ん…」

「ん、何これ日記？」

黒髪をさらりと耳に掛け、聡子と呼ばれた少女が机に屈み込む。

やがて薄く笑い、

「へえ、こんなの書いてんだ」

そう言っつて、床にうずくまる少女に冷たい嘲笑を向けた。

「忘れっぽいのは自覚してんだね。けど酷い勘違い…私さ、あなたのそーゆうとこ許せなかったんだよ」

見下すように顎を反らすと、少女の背に刺さった柄をスリッパの裏で踏みつける。足元の悲鳴に頬を歪めながら、彼女は言った。

「でも、もう…『気にしなくていいよ。許してあげる』」

12・allow(後書き)

「」を許可する「、

」を許す「、

」を可能にする「。

歯が痛い。三ヶ月前に始めた歯列矯正のせいだ。

器具が当たって嫌だからとキスをしなくなつた女は今、俺に跨つて嬌声を上げている。

この女と共同生活を始めてどのくらいになるのか　少なくとも赤ん坊を仕込んで生ませるくらいの余裕ならタツプリアつた筈だ。けどそうしてないのは、俺達が夫婦でもなければ恋人でもないからだ。

俺達は言わば、共生の関係にある。彼女は昼間仕事に出たり、合間に教生やつたりなんかして、鬱憤やらを抱えて帰ってくる。俺はそいつを晴らしてやる役目だ。彼女が車なら、俺がガレージといったところか。

とにかくそんなだから、子供なんか余裕もないし欲しくもない。俺も働かない。そもそも命令されるといのが嫌いな質で、何をやっても長続きしないのだ。家事だつてろくにやっていない。状況を見れば俺ほど自由な暮らしをしている奴もいないだろうと言える。

今度は俺の下に敷かれて、女は身悶えしている。こいつは大体俺の言うことは聞くし、金も稼ぐので実に楽なのだ　思いのままになる、と感じたことがない。昼夜笑顔か恍惚を浮かべているこの女を見ていると、閉じ込められているのは俺じゃないか、などと思うことがある。

ここ数ヶ月、外出先は一カ所だけだ。

ああ、歯が痛い。

13・force(後書き)

「」を強制する

その村には、神と呼ばれる長がいた。八千の人々の統治のみならず、病の治療や作物の管理も一手に引き受け、隣村から攻撃を受ければたった一人で撃退してしまうという、まさに神がかった力を持った男だった。

だから、チンの父も母も、その長を頼ろうとしたのだ。

「チン、大丈夫だからね。痛い痛い飛んでけー！」

「ああこんなに汗をかいて、どうか神よ、この子をお助け下さい！」

小さな息子を気遣って、両親は目を赤くしていた。

五歳のチンは、この日の昼前、急に具合を悪くした。朝餉を終えて姉を木の実狩りに送り出したときは元気に笑っていたものが、突然倒れて「痛い」とも言わず苦しみだしたのだ。

両親は慌て、何とかしようとして手を尽くしたが、チンの顔色は悪くなっていくばかりで一向に回復の兆しが見えなかった。

命に関わることも知れない。これは、あの方を頼るしかない。そう思い、長の住まう屋敷に治療を頼みに来て、もうどのくらい過ぎたのか。チンの息はか細く、手足は氷のように冷たい。

「ねえまだなの、あの方はまだなの？」

「大丈夫だ、必ず来て下さる」

夫婦が青い顔を合わせて息子を介抱しているところに、

「ミダご夫妻！」

そう声がかかった。

両親が飛び上がるようにして行くと、長の側付きの一人が石のような顔をして手紙を差し出した。

「神はお忙しい。只今南の畑におられます。こちらに名前と願いを書いて、南門の使い番にお申し出を」

「そんな……」

父は青い顔を更に青くした。

「先程北門の方に、こちらで待てと言われたんです！その前は治療受付方に、直接なら北門へ行けと言われ…そして、今度は南？いい加減…いい加減にしてくれ、チンが死ぬかもしれないんだぞっ」
「やめて！あなたやめて下さい！」

泣き喚く母親の腕に抱かれ、チンはぐったりと四肢を投げ出している。彼の命の火は、今まさに消えようとしていた。

*

「木イチゴが、四十六、四十七…四十八個！お母さん喜ぶかな」
木の実を摘みながら、センは上機嫌で鼻歌を歌いだした。久しぶりの収穫だ。これを持って帰れば、近頃弟のチンにつきっきりの母も自分を褒めてくれるのではないか。

それを想像して、センはうきうきと木の根を飛び越した。そうして着地した途端、地面は脆くも崩れた。

急な坂道だ。驚いたセンは声も立てずに転がり、その下の藪の中に尻から落ちた。

「……………うっ、うあ…」

思わず泣きかけて、ぐつと堪える。目元を拭って立ち上がるうとし、しかし再び座り込んだ。膝を酷く擦りむいているのだ。

またこみ上げた涙を押し止め、センはびっこを引き引き歩き出した。母が教えてくれた薬草を、探さなくてはならない。

何度転び、何度泣きかけただろうか。太陽が低くなり道が分からなくなっても、薬草は見つからなかった。

こんな時、神様がいたら怪我が治ってお家に帰れるのに
「…神様のバカ」

呟いて、とうとうセンは泣き出した。大声が森に響いたが、誰も助けに来ない。泣き疲れてしゃくりあげながら、不意に空腹を覚える。

お母さんは、知らないものは食べちゃ駄目って言うけど

センは丁度目の前にあつた何かの実を、一粒かじつた。
その途端だ。

急に目が冴えてきて、体が軽くなった気がした。膝からは血が出ているのに、ちっとも痛くない。生まれて初めて食べるものだった。「神様：？」

不思議げにそう呟いて、それからすぐ、センはその実をありつたけもいだ。上着のポケット、スカートの裾、器になるもの全部にいっぱい集める。

木イチゴなど目ではない。この実があれば、怪我也病気もすぐ治つてしまつたろう。両親も喜ぶ、村の人も喜ぶ。たつぷり褒めて貰える。

迷子になっていることも忘れて、センは一直線に駆けた。自分がまだ足を引きずっていることも知らず、飛ぶような心地で。

*

その日、神と呼ばれる男の村に、小さな墓標が建てられた。神を信じた二人の子供の墓だ。片方は助けを待ちながら息を引き取り、片方は村外れの崖下で、摘み取りの禁じられた実に埋もれて 二人とも、幸せそうな笑みを浮かべていたという。

14・offer(後書き)

「
」を申し出る、
「
」を与える。

人魚姫の話を知っておるかね。声と引き替えに足を手に入れ、人間の王子に近付こうとした、悲しい少女の話だ。人魚は最期には泡になったことになっているがね。どうだ、そんなことがあるうか。惚れた男の心を掴めなかったら自分が死ぬだなんて、理屈も勘定も合わんだろう。

だから本当は、人魚は死んでなど居ないのだ。

尤も彼女は純粋な娘だったようだから、姉の言葉を信じ生命の危機を感じたろう。そして愛する王子の寝室へ忍び込み、ひと思いに刺そうとした。だがやはり自分には無理と諦めた。

だがね。それだから自分の命を諦めようだなんて、いくら清い娘でも考えるものか？

王子の横たわる寝台の前に、人魚姫は思い悩んだろう。愛しい寝顔の横には、自分とよく似た某国王女が幸せそうに眠っている。

人魚姫はふと疑問を抱く。どうしてこの自分に似た女を、王子は妻に選んだのだろう。そしてその理由を考えるうち、二つの可能性に気付いた。

一つは、王子が本当に愛しているのは自分である、という可能性。これならば自分は泡になどならず済む。

そしてもう一つは、王子は元々愛していた某国王女によく似た自分だから、殊更可愛がってくれたのだという可能性。

ここで姫は、王子の抱える人間らしい弱さ、欠点を見出すことになる。そうなると王子に微かな憎しみと、以前の何倍もの愛しさが湧いてきた。

姫は豪華客船の看板に戻り、海を見下ろして煩悶した。

愛して欲しい。

手に入れない。

このまま死んで意味があるのか。

と、その時だ。ずっと下の深い深いところから、こんな声が聞こえた。

どうして苦しむの？簡単じゃない、王子があなたを愛しているにしろいないにしろ、邪魔者はただ一人…それに、あなたとあの女は良く似てるわ。誰も気づかない。

地の底から響く鈴の音に似た声は、かつて自分の喉から出ていたものだった。姫は思った、今は王子を欲する自分自身の声だと。そして、それを手に入れる手段を悟ったのだ。

姫は再び、しっかりとナイフを握りしめ、決意を胸に寝室へ向かった。

…まあ、声の正体は取引の魔法をフイにしたくなかった魔女といったところだろう。姫は随分後になって、それに気付いたという話だ。

誰から聞いたのか、だと？

おまえの知らない人さ。僕の妻だったんだがね、何百年も前に死んでしまった。嘘ではない、僕はもう自分の歳を覚えておらんくらいだ。

長生きの秘訣？そうだな、聞いたことがあるかね。人魚の生き血には……

15・realize(後書き)

「」を悟る「、」

「」に気づく「、」

「」を実現する「」。

「ねえ：見方によっちゃ悪いのはアンタじゃないんだよ。アンタは何もしちゃいない、計画したのも実行を決めたのも全部奴だ。アンタは奴に利用されただけなんだ」

三時間の黙秘にうんざりしながらそう言つと、初めて女が反応した。

「…あの人は…」

「うん？」

書記官がペンを持ち直し、俺は身を乗り出しかけるのをこらえて肘をつく。

「…あの、人は：私のこと、欲しいって言った」

「それが利用されてるって言つてんじゃないの。目エ覚ましな、あんなのについてたつていいことないよ」

「ひつ、必要だつて言った！」

「ならアンタに居場所くらい教えてくれてんじゃないの」

長い間が空いた。またか、と溜息を吐く。

女がマルチの幹部として逮捕されたのは昨日のことだった。事務所に使われていたアパートに踏み込んだときには首謀者は逃げた後で、もぬけの空になった部屋に女一人が取り残されていたそうだ。どうやら女は首謀者が引つ越しの準備をしていると思ひ込んでいたらしい。

そんな女だからおそらく大した情報は握っていないのだろう。ならさつさと吐いて貰いたいものだ。

「…私、」

再び女が口を開いた。

「あの人が：初めて、私のこと認めてくれた。それまでずっと、誰も：けどあの人は私の力が欲しいって」

「力？」

「君じゃないとって言ってくれたし、馬鹿にしたりもしなかった。皆みたい私のこと、馬鹿とか言ったり、見せ物扱いにしたり、笑い話にしたりしなかった」

「……」

「私、癒しキャラなんかじゃないし仕事もちゃんと出来るのに。皆余計な口出して、同情しやがって！……でもあの人だけは」

それから後は、自分が如何に理不尽な目に遭ってきたか、男の元で力を発揮できて如何に嬉しかったかについて延々二時間聞かされた。その間に手口や男の人物像についてもほぼ洗いざらい話したので、それはそれで良かったが。

「刑事さん」と女が言う。「私のこと、出来る女だと思う？」

「あー思うよ」

いい加減に答えて切り上げた。勘違いタイプの相手をしているとこちらが疲れてしまう。

必要とされるだのと言っていたが、小物の手先で使い捨てられたことに気付いていないのか。未成熟なあな女を「癒しキャラ」呼ばわりで「口出し」していた友人の方が余程親身だ。

「…ま、どうでも…か。俺たちや情報が欲しいだけだし」

慣れきった空しさが、ふと腹の中を過ぎていった。

16・require(後書き)

「」を必要とする、「」を要求する。」。

それは、赤と黒に塗りつぶされた一枚の油絵だった。

*

「先生、何度も言いますがね、先生には才能がおりになる。只の才能じゃない、世間並みの人間がどう努力しても届かない高みだ。その対価を得るのを私が微力ながらお助けしたいと、こう申してるんです」

「金か。…それより君、見たまえ」

「何です？ほほう、これは大作ですな」

「何だと思うね」

「そうですねア、この鮮やかな赤、そして黒。…夕焼け？いや、炎…？」

「わからんかね。この構図に何か足りんのだ」

「足りない…？」

「君には分かるまい」

さあ邪魔になる、帰ってくれと言われ木島は画家のアトリエを後にし、深い山を下った。

木島は画商である。絵画の売買から最近ではイラストレーターの発掘や画集の発売まで手掛ける、忙しい身であった。

その彼が、ここ一月ほど一人の画家の元に通い詰めている。いわゆる芸術家肌の、時代遅れなスタイルを貫く画家だが、その作品は木島に言わせれば「強烈に金の匂いがした」。そこで画家に自分がプロデューサーになりたいと提案しているのだが、頑として受けない。

木島はしかし執念深く、毎日のように説得を試みていた。

「ほう、これは。まるで血の色ですな」

身の丈ほどのキャンバスに、画家は絵の具を叩きつけている。

「その分ですと完成は三・四日後になりそうですね。どうです、近々絵画展を主催するんですがね、ご出品なされては」

画家は無言である。

「一番目立つ場所をご用意しましょう。いや、最高にご希望通りの展示を致しますか？ところで、タイトルはなんとお付けになるので「君は商売人だな。タイトル？…今に分かる」

「これは失礼、完成前にお聞きすることではありませんでしたな。

ではせてその作品のテーマをお聞かせ願えませんか」

「それも今に分かる。言葉で言えたら苦労は無かるう」

「仰る通りで。ではその時が来たら是非ご一報下さいませ、悪いようには致しませんぜ。それじゃ」

去りながら木島は、知らず笑みを浮かべていた。あれは大作になる、それも世間を騒がすような、という直感を抱いたのである。

それからというもの、木島の脳裏には常にあの絵がちらつくようになった。恐ろしいほどの色彩、荒々しくも熟練した筆遣い。完成を今か今かと待ち続け、毎日のように通ったが、予測に反し絵はなかなか出来上がらなかった。

絵画展は近い。それまでになんとしても出品を説得したい木島は内心焦っていた。

そんな時だ。

木島はまさにその絵画展のために、暫く日本を離れることになってしまった。出品者やスポンサーが海外にもおり、直接でないとする用件があったからだ。

出張の間、国外にいながら木島の心はそこにはなかった。あの作品がどうなったのか気になって仕方がない。まるで呪われたようだと、焦りながらそんなことも考えた。

いよいよ日本に戻ると、木島はすぐさま画家の元へ車を走らせた。

一刻も早く進行を知りたい、完成品を一目見たい。あの血のような、また炎のような、誰もがハツとするような画を、と。

「…何だ？」

画家の住む町が近付いてきた時、曇った空が燃えるような赤に染まっていることに、木島は気付いた。予感が走り、アクセルを目一杯踏みつける。

そして画家がアトリエを構える町沿いの山が見えたとき、木島は、呆然と車を止めた。

山が、燃えている。

一部分ではない、山全体が巨大な炎である如く、目の潰れそうな赤に燃えている。

ああ、絵は…完成したに違いない。画家はもうあの家には居ないだろう。きつとどこかで、この光景を。

「ちよつとあんた！危ないから近付かないで！早く付近住民を避難させろっ」

今更になつて、自分の執念の正体に気付く。救助隊員に羽交い締めにされながら、木島は目を皿のようにして炎を焼き付けていた。

燃えさかる炎が天を焦がし、周囲の全てを炭と影にする。それは、赤と黒に塗りつぶされた一枚の油絵だった。

17. suggest (後書き)

「
」と提案する「
」
」をほのめかす「
」
」を暗示する「。

ある婦人が自宅のリビングでソファに座っていた。彼女はバラエティー番組で時間を潰しながら、悪魔を待っていた。

「遅いわね……」

婦人がそう呟くと、突然入り口の方から、

「そうでもありませんよ」

と声がした。婦人が驚いて振り向くと、立っていたのは陽気な服装の若い男だ。

「まだ二分しか遅れてませんでしょ。ところで私を招き入れてくれませんか」

「……ええどうぞ、お入りになって。けどあなた、遅刻は遅刻よ。依頼主がその間にお手洗いに立って留守だと思っただらどうするの、どちらかが契約に失敗したとか相手が破棄したとか思っただら……」

「はいそうですね、申し訳ない。随分な心配性でいらっしやいますなあ、奥さん。それで？この私にご用とは何で御座います」

婦人は憂鬱な溜息を吐いて、ソファの背に体を預けた。

「この性格を治したいのよ」

「ほう？つまり何でもかでも必要以上にあれこれ神経質になる自分が嫌と仰るのですな。しかしそんなことは、精神科の医者にも相談すべきでは？」

「医者が藪だったら？ぼつたくられたらどうするの？もしかしたら服を脱がされたり、知らない場所を歩かされたり、汚い物を触ったりするかも知れないわ。治療にだって効果があるかわからないし、私金属アレルギーなの。それに……」

「なるほどこりゃ重症だ」

悪魔は聞こえないように呟き、喋り続ける婦人を無視して調度品を眺めた。

「……つまり、あなたなら雑菌も持ってないし力量が保証されている

「からのよ」

「私が人外だという証拠でも？」

明後日の方向を見ながら悪魔が言う。

「うちはコンピュータと人の目で人間の出入りはほぼ完全に管理してあるわ、ただしあなたがとんでもないプロの犯罪者でマザーをハッキングした上管理会社の人間を全員黙らせてからここに来たと言うなら別だけれどこのリビングの入り口前には地下のサブ脳で動く18の監視カメラとセキュリティと滅菌装置が仕掛けられてるし」「ああわかりましたわかりました。そんなに心配ばかりしてちゃあさぞこ難儀でしょうとも。いいでしょう、あなたの魂と引き換えに、一生余計な心配をしなくて済むようにして差し上げましょう」と悪魔は右腕を持ち上げかけた。が、

「ちよつと待つて」

婦人が制止する。

「その前にちよつと聞きたいんだけど、魂は私の死後にあなたに渡るのね？脳死状態は？」

「いえ、肉体が完全に死んだ後です」

「そう。…あ、ならもう一つ気になるんだけど心配が無くなるってことはこれから先死ぬまで警戒心が周りの人と同じレベルになるってことかしら？だとしたら例えば道端で転んだり余所見をしたせいで命に関わる事故に合う可能性があるわけよね、それだけじゃないわ健康に気を遣わなくなったら無添加食品以外のものや果てはジャンクフードやお酒だつて口に入れても気にしなくなるかも知れないじゃないの第一日本人は何だつて心配しない人が多いのかしらあんな人混みや渋滞の中で細菌や事故や犯罪の可能性を全く考えないんだから信じられないじゃないの、だからそのあたりのアフターケアについて聞きたいのよ私は、……悪魔さん？ちよつと悪魔さん？」

「やれやれ」

犬の姿になって歩きながら、悪魔は気分だけ肩を竦めた。
「どつやら奥さんは、心配してるほつがお幸せなんだな。私の出る幕じゃなさそうだ」

「心配なところ」
、 「心配心」

18・worry(後書者)

便器に座っている時から、何となく違和感があった。いつもの個室なのに、他人の家のように落ち着かない。それは言わば気配のよ
うなものだったのだが、そのせいで腸に集中できないのには困った。
それでも何とか用を済ませ、すっきりしない気分のままドアを開け
ると

もとい。

^{トシネル}腸から実が抜けると、そこは雪国だった。頭の中が白くなった。

これは夢なのだろうか。便所スリッパの爪先に、積もった雪が崩
れてかかる。春の格好では凍り付いてしまいそうな寒さが吹き込ん
でくる。

すぐさま便所のドアを閉めようとした時、しんしんと降る雪の向
こうから、微かに呼ぶ声が聞こえた。

「駅長さあん、駅長さあん…」

幼い少女と思われる、細く高い、必死な叫びだ。

ドアを閉めるのを止め、雪の中に踏み出す。声を上げたくなるよ
うな冷たさだったが、どうせ夢だ。切羽詰まった呼び声に向かって、
ざくざくと歩を進め始めた。

「駅長さあん、つたらあ…」

凍える体を抱いて呼び続けているのは、まだ七、八と思われる着
物の少女だった。この雪の中で裕一枚だ。

「お嬢さん。何してるの、大丈夫？」

声を掛けると、警戒心を含んだ縋るような目が振り向いた。

「…だれ？」

「通りすがりの者だけど」

「…あのね、あの…駅長さん探してるの。お手水借りたいの」

「オシッコ？」

訊くと、少女は怒った顔をした。恥ずかしがらせてしまったか、
と思ひ素直に謝る。

「で、駅は開いてるのかな」

「知らない」

答える少女は、内股になって縮こまり、細い手足をぶるぶると震
わせている。雪に埋もれた素足は真つ赤になっていた。ふと、自分
がどこから来たかを思い出す。

「じゃあ、お便所貸してあげる。洋式だけどいいかな」

知らない人を警戒する少女を説得し、雪についた足跡を遡ると無
事に元の便所に着いた。どこもドアのごとく突っ立っている便所
扉を開ける。促された少女は躊躇いながらも、寒さと尿意に耐えか
ねてかドアの向こうに消えた。

もしかしたらこのドアが現実の自宅に繋がっていて、少女が戻っ
てこないのではと心配もしたが、杞憂だった。

ほんの二、三分で、少女は決まり悪そうにしながらドアを開けた。
冷え切ってガチガチと歯を鳴らす私にその一瞬だけ、「ありがとう」
と、少し懐かしい無邪気な笑顔を見せて。

少女がどうして薄着で雪中を歩いていたのかは結局わからない。
次に便所に入りドアを開け直すと、もうそこは見慣れた家だった。

洗濯物を干していなかったことに気付く。ひとりで家事をこなす
ことにも、もう随分慣れた。祖母直伝の技だ。今度、息子にも教え
てやりたいと思う。

19・wonder(後書き)

「*〜*かと疑問に思う」

(+at A) 「Aに驚く」

「Aを不思議に思う」。

「もう戻ってくんよ」

友達の一人が泣き出しそうな顔でそう言ったのを、少年はよく覚えていた。彼が自分を思っただけでそう言ってくれたのが分かったので、飛んで帰りたいのを我慢している。

「タケ君、ご飯出来たよ」

新しい母親に呼ばれ、少年は笑顔で台所へ急いだ。嫌われてはならない、幸せで居なくてはならない、施設に戻されてはならない。

「あの力」のことを、知られてはならない。

しかしこの日、慣れない環境で気を張り続けていた少年は、ミスを犯してしまった。

「キヤツ」

新しい母親の足に躓き、彼女の持っていた包丁を落とさせてしまったのだ。まっしぐらに少年の頭へ向かう刃先を、母親は間一髪で掴み止めた。

「危ないじゃない！大丈夫？怪我してない？」

大慌ての母親だが、少年はそれより彼女の右手から垂れる血が恐ろしくなった。

「おかあ…さん、怪我…」

「あらホント。ちよつと切ったわね、あいたたた」

言いながら、彼女は少し悪戯っぽい笑みを浮かべたのだが、少年はそれに気付かなかった。

「あー痛い。絆創膏じゃ間に合わないわ、お医者に行こうかしら。お金がかかるわねえ」

お金と聞いて少年は青ざめた。

「ど、どのくらい？」

「そうね、ざつと三億円かしら。すごーく沢山よ。タケ君、三億貰える切符を買ってきてくれない？」

指に包帯を巻きながら彼女が渡した紙幣を掴んで、少年は一心に駆け出した。母に頼まれた「宝くじ」を買うために。

だが新しい母親は知らなかった。少年が異常な運を持った、ある種の異能者であること、そしてその力で儲けすぎた前の両親がそのために命を落としたことを。

そして少年も未だ知らない、宝くじは必ず金が貰えるものではなく、それは少年が願う故に当たってしまう三億であろうことを。

この親子が幸せになるかどうかは、誰も知らない。

20・cost(後書き)

「費用」を要する、
「」を奪う。

「祖父はどんな人だったんですか？」

尋ねると、祖父の友人という男性が涙ぐんで言った。

「松ちゃんはなあ、いい奴だったよ。いつも黙って仕事するんだ」

「そうそう、大変なことでも文句一つ言わずにねえ。我慢ばかりして…」

年配の女性が横から同意する。

「忍耐の人だったな。その分周りが見逃しがちだったんだ、苦勞をよ」

「確かにお義父さん、そんな傾向がありましたわ」

母がしんみりと頷いた。

「だろっ？松ちゃん顔に出さないし、酒も飲まねえ煙草もやらねえ
てんだから、付き合いが悪いなんて遠ざけられてよ。俺だってもつ
と話したかったんだ、本当は」

「愚痴なんて全然言ってくれなかったからねえ。力になれたかも知
れないのに」

「鶴子さんが逝ってから余計だんまりになっちまってよ。誰か本
音を聞いた奴、いるのかってぐらいさ」

「勝くんあんた、松蔵さんに可愛がられてたろ。何か聞いてないか
い」

困ってかぶりを振ると、周りから悲しげなため息が漏れる。年に
一回会うときすらあまり会話しない無口な祖父だったが、どうやら
良く好かれてはいたらしい。我慢がちな性格　それが祟ったのだ
ろっ。

一人暮らしの部屋で見つかった祖父。最期は酷い腹痛に苦しんだ
るうちに、電話の一つもした形跡はなかった、と医者や役人が言った。
「我慢しなくていいよ…って、誰かが言ってくればねえ」

年配の女性が遺影を見つめた。その言葉はきくと、亡くなった祖

母が言ったのではないかと、僕は思っている。なぜなら、一人きりだった筈の祖父は、不思議に温かい顔で横たわっていたのだから。

21・tend(後書き)

「tend」は「傾向がある」という意味で、
「傾向がある」という意味で使われる。
「傾向がある」という意味で使われる。

「あつ」

「おお」

二人はスーパーの売場の角でばったりと出会い、殆ど同時に相手に気が付いた。

「江之だろ。久し振りだなあ」

「山ちゃん…か？」

「そうだよ山根だよ。お前全然変わってないな、どうして同窓会来なかったんだ」

「いやあ…仕事が忙しくてさ」

「そうかそうか」

山根は豪快に笑って、江之の肩を嬉しそうに叩いた。やがて立ち話もなんだから、とどちらからともなく言い出し、スーパーを出ると近所のラーメン屋に入る。晩飯時だというのに、昼間のバーのように空いた店だった。

「おっちゃん、味噌一つに生中ね」

「じゃ僕チャーシュー麺」

気難しげな親父に注文すると、二人はほっと息をついた。

「ホントに久し振りだな。何年ぶりかな」

「そうだな、もう十五、六年は経つんじゃないか」

「そんなにか。…あの頃以来」

山根の言葉に、江之は無表情に口を噤んだ。暫く無言の時間が続き、時々、交互に水を啜る音だけが響く。

「お互い、な」

江之が呟いた。

「すっかりおっさんだ。昔のことなんか、もう思い出せんよ」

「…そうか？俺は割と覚えてるぞ」

江之がピクリと眉を上げる。山根は彼一流の、挑発的に見える笑

みを浮かべている。一瞬僅かに険を宿した江之の表情はすぐに、やれやれといったふうに緩く曲がった。

「変わってないのはそっちだな、全く」

「そうかなあ」

変わらずにやにやする山根だが、ふいに身を乗り出し、勢い良く手を打った。

「そうだ！さつきお前、トランプ買ってたる」

「…ああ、娘に頼まれて」

「久々にどうだ」

江之は露骨に嫌そうな表情を浮かべた。

「そう嫌うなよ、ちゃんとまっさらなカードだろ。負けた方がここを奢る！どうだ。いいだろ一勝負くらい、それともまた負けるからやだつてのか？」

「…仕方ないな…」

「そうこなくちゃ」

江之がしぶしぶと出したトランプを、山根は嬉々として開封し始めた。慣れた手つきでカードを入念に切り、素早く配る。

「ポーカードで三回勝負！いいよな」

「ああ…いや、ラーメン来るぞ」

「大丈夫だつてパパツと終わらせりゃ」

じゃんけんで順番を決め、カードをチェンジ。江之が二枚、山根が一枚だ。

「コール」

開けると同時、山根が頭を抱えた。

「おいおい、初っぱなからフルハウスかよ。きついねー」

軽い口調でカードを再び切る。勝った江之は何やら浮かない顔をしていた。

「しかし…ホント久し振りだ、江之ちゃんとカード弄るのは」

妙にしみじみと山根が呟いた。江之が顔を上げる。カードが鮮やかな手つきで卓上に配られる。

「江之ちゃんって呼んだのも久し振りだ。覚えてるか？昔は山ちゃん江之ちゃんって仲だったろ」

「ああ、覚えてる」

「いつからだったかな、そう呼ばなくなつてよ。なんか疎遠になつたんだよな」

江之は黙つて二枚チェンジした。カードを並べ直す。

山根は、なかなかチェンジしない。訝しげに目を上げた江之に、手元を見つめたまま問いかけた。

「なあ。早希のこと覚えてるよな」

江之の目が不愉快げに細くなつた。

「あいつだな。あの女のこと辺りから、俺達よそよそしくなつたんだ」

「……」

「今見たら大して可愛くもないぜ」

「……」

「そりゃそうと、勝負どうなつてたっけ。俺の勝ち越したよな？お前弱かつたもんな、あの頃」

「……」

「いつまでも運否天賦なんだもんな」

「…ノーチェンか？」

「おう。コール」

江之の手はスリーカード、そして山根はストレートだった。

「…な？だから、ギャンブルは頭と」

「流れ次第、だろ。聞き飽きたよ」

愉快そうに山根が笑う。

「まあそう不貞るな！仕方ないだろ、俺が強いんだから」

「まだ一戦あるだろ」

「ほほう、やる気…」

とその時、ラーメンが二人の視線を遮つた。

「へいッお待ち、味噌にチャーシュー！」

井を突き出しながら、親父が二人を見下ろす。若干怯みながら受け取り、顔を見合わせた。

「…先に決着を」

「だな。興が冷めちまう。…そうだ、この一戦で五十戦分にしないか。一発逆転アリでさ」

「…ああ」

今度は負けた江之がカードを切る。山根よりもややぎこちない手つきで五枚を配り終わると、互いに手元と相手を静かに見比べた。

「…俺四枚ね」

「じゃ二枚」

チェンジを終え、カードを並べ直しながら江之が口を開いた。

「変わらないと言ったが、やっぱり僕もお前も変わったな」

「…そうか」

「僕は勝負しなくなったからな。小狡くなって、今も女房が怒ってんじゃないかって心配なんだ。お前も相変わらず自由な奴に見えるがな、実際…」

「うるせえな、さつさと出せよ、コール！ほら俺の勝ち…」

自信満々にフォーカードを叩きつけた山根の目が、卓上に凍りついた。

パキツ、と割り箸を割って、江之がラーメンを啜る。

「うん。実際お前も弱くなったんだ」

山根は間抜けに口を半開きにして、まだ卓上を見ている。鮮やかに赤いロイヤルストレートフラッシュが、静かに座していた。

「ど、どう…」

「ラーメン伸びるぞ」

遮られた山根は、大人しく箸を取って味噌ラーメンを啜り込み始めた。暫く、大の男二人黙ってズルズルと腹ごしらえをする。やがて、汁まで残さず飲み干した江之が荷物を持って席を立ちかけた。

「じゃあ勘定…」

「ちよっ、待てよ」

山根が慌てて腰を上げる。

「…頼む。教えてくれ、どうなってるんだ」

「そんなもん、お前がさっき言ってたじゃないか。勝負は頭と流れ次第つてよ」

「そりゃ…」

「お前には流れがなかったんだ」そう言って、江之はニヤツと笑った。「これで二二三六勝二一九敗。勝ち越したな。じゃ、またそのうち」

呆気にとられて見送りかけた山根だが、はっとして呼び止めた。

「おい！このカード」

「やる」

振り向きもせず江之が言った。

「やる…？」

「ラー油臭くなったからさ。娘に怒られてくるよ」

暖簾の向うに消えた背中にラーメン屋の親父が険しい視線を投げる一方で、山根は卓上のカードを引っ掴んでいた。その裏を改め、全てに気付く。

『ラー油臭くなったから』

「わはははっ」

流れ次第、か。狡い手使ってよく言うぜ…いや、あのタイミングでラーメンが来たのが流れだったのかもな。

油の飛んだカードを、山根はどこか楽しげに握り潰すのだった。

22・depend(後書き)

「(・on A) Aに依存する」、
「A次第で決まる」。

高校になると学区が広がって、クラスの中が知人でない者ばかりになる。それでも通常、特に地方では、同じ中学から上がった者が一人二人はいるものだ。従って全く知人がいない場合には、新たな友人も作りにくくクラスに馴染めない、というケースが往々にしてある。

だが、彼女の場合は違った。彼女を知る人間が誰も居ないという状況で、積極的に周囲にアプローチしていったのだ。

その手法は、共有というものだった。

「それ、私も持ってる」

「面白いよね」

「それ で買ったでしょ」

筆箱、アクセサリー、漫画や鞆などクラスメイトの持つあらゆる物に目を付け、その好みを共有しようとしたのだ。この方法は最初の内は成功し、彼女は多くの友人を手に入れたかに見えた。

しかし時間が経つ内、クラスメイト達は彼女に違和感を抱き始める。まず、彼女がどんな話題を振っても殆ど無視するか薄い反応を返すばかりで、またすぐ持ち物の話にもって行こうとすること。そしてもう一つ、その持ち物自体を、彼女が本当に所持しているかどうか怪しくなってきたことからだ。

どんな物にでも反応を示す割に、そのものについての話が広げられない。やがて彼女は、嘘つきで空気の読めない、鬱陶しい女と見られるようになっていった。

だが、クラス全体から無視されるようになって、彼女の「私も持ってる」は止まらなかつた。無視すればするほど必死な顔で、彼女は好みを分かち合おうとしたのだ。うんざりしたクラスメイト達は、とうとう彼女を排除することに決めた。

「あ、それ持ってるよ。どこの店で買った？駅前？」

「うぜ。どーせ嘘っしょ」

彼女が呆けたように立ち竦んだ所に、話しかけられた者と周囲の数名が畳みかけた。

「そんなバラバラに物買って持つてるわけ無いし」

「あるなら持って来いや。見せてみ、ここで」

「おら何黙ってんだよ!」

血の気の引いた顔を強ばらせて、彼女は自分の席に戻っていった。一日中机に視線を落として身動きせず、やがて下校時刻が来ると、誰よりも早く教室を出て行った。クラスメイト達の、蔑むような瞳に見送られて。

翌日、彼女は学校に来なかった。クラスメイト達は理由についてある者は楽しげに、ある者は気詰まりそうに話したが、当然誰もそれを確かめようとはしなかったし、明日以降どのようなことが起こるかなど、想像すらしなかったのだ。

その次の日。

彼女はやはり来なかった。登校拒否かあるいは天候か、あるいは…。最悪の可能性は、メディアの向こうの出来事としてはクラスメイト達に想像されていた。

その日の昼休みのことだった。

最初に窓の外を見た生徒は、まず「何だろう」と思い窓の外に顔を出した。下を見ると、地面に何か物が二、三、散らばっているのが見える。先程窓の外を落ちて行ったのか、そう思い校舎の屋上を見上げた途端だった。

ぼすつ、と結構な勢いで顔に何か落ちてきた。鼻を痛がりながら見ると、ポストンバッグである。と、何が起こったのか把握する間もなく、頭上に巨大な黒い塊が現れた。

「!?!」

慌てて頭を引っ込める。髪をかすめて、その塊は校舎沿いを落下していった。

それは、物の塊だった。バッグ、靴、服、帽子、ペン、ゲーム機、
ともかくあらゆる見覚えのある物が宙を舞い…そして最後に、弾丸
の如く物の海を貫きながら、何か大きな 人間くらいの大きさの
物が地面に向かってまっしぐらに落ちていき、遙か下の地面で、酷
く嫌な、壊れる音を立てた。

*

物に埋もれて横たわる彼女は、クラスメイト達の脳裏から今も消
えない。彼らは、新しい買い物をする度に背後から囁かれるのだ。
「それ、私も持ってるよ？」
と。

23・share(後書き)

「
」を分け合う「
、
共有する」「
、
一緒に使う」。

悲鳴、泣き声、断末魔。阿鼻叫喚の中を、一人の赤ん坊が歩いてきた。只の赤ん坊ではない。恐ろしく巨大な、天を突くような体を持つている。

それが、無邪気な顔をしてよちよち歩きをしているのだ。ただし、ぎこちなく一歩を踏み出すことに、さながら大怪獣ゴジラの如く街を踏みつぶしながら。

「いや、ジャイアント・ベビーの間違いじゃないですか。まんまだけど」

「呑気なことを言つとる場合かね、矢萩君！早くあれを止めねば大変なことになるぞ」

「もつなつてますよ」

「ええい！」

その赤ん坊をトラクターで追う、いかにも博士な男とこれまたいかにも助手な青年。そう、この大惨事は紛れもなく彼らの無謀な実験のお陰だったのだ。

「それにしても、どこに向かつてるんでしょうねえ」

「一歳児の考えてることなんかわかるものか！兎に角…」

と、唐突にはつととする博士。赤ん坊の目的となつているものに気付いたのである。それはこんな場合お決まりの、母親という存在であった。

「矢萩君、母親だ！母親に会わせるんだ」

「ええ？」

呑気な顔をしていた矢萩青年が、慌てたように振り返った。

「母親？だつてそんなもの、今ここに…」

「わかつとる！イメージ投射装置があつたらうが！」

「そんな無茶なあ。直接あれの頭につけるっ…」矢萩青年はため息をついた。「…つて言つんですね。わかりましたよ。やりやいいん

でしょ、やりやあッ」

トラクターのエンジンが唸りを上げ、歪んだアスファルトを飛び跳ねた。ひっくり返りそうな勢いで瓦礫の間を縫い、派手なブレーキ音を立てて赤ん坊の目の前に停車する。

「給料上げて貰いますからね！」

矢萩青年はなにやらの装置とロープの射出機を持って車外に飛び出した。赤ん坊のオムツに向かってロープ先の鉤針を打ち込み、スルスルと上昇していく。その間も赤ん坊の歩みは止まらず、トラクターをまっ平らに踏んで尚も進んだ。

「あーっ何てことだ、公費で買った車をお」

ひとしきり嘆いてから、博士は遠ざかる赤ん坊の巨大な尻を見つめた。

（頼んだぞ、矢萩君）

「くっそっ、大人しくしてっ」

すべすべした健康的な皮膚を、振り落とされかけながら矢萩青年はよじ登っていた。腹から胸部、肩、首へと登り、漸く耳のうしろへ辿り着いた時には彼は全身筋肉痛である。

「よし！この辺りでいいな」

赤ん坊の頭に装置を取り付け、母親のパーソナルデータを呼び出す。

「これが要るんでしょ、…止まれっ」

ポチっとな。

電気信号がイメージとなり、赤ん坊の頭に伝わっていった。

「……」

赤ん坊が立ち止まる。地響きが止み、逃げ惑ったりうずくまっていた人々が背後を振り向いた。

そして人々は、信じられない光景を見た。

赤ん坊が、成長していく。

幼児期、児童期、青年期を経て成人女性となり、やがて小皺や妊娠

線まで現れ、瞬く間に中年：壮年期へと突入していく。それと同時に、急速にそのサイズは縮まっていった。そして…。

『あと一週間だそうなんです』

老婦人は、柔らかな笑みを浮かべてそう言った。

『やりたいことはまだあるけど、やるべきことはやりきったわ。だから、少しだけ…最後の我が儘なんです』

「矢萩君！ご婦人は？」

息を乱して、博士が走ってくる。矢萩青年は、地面に横たわる小さな老婆を、静かに見下ろしていた。

「亡くなりました」

「…そう、か」

矢萩青年の白衣に覆われた老婆の体は、老いと病にやせ細っていた。

実験体を自ら引き受けた彼女の願いは、一度だけ若返ること。膨大なエネルギーと技術、そして人生の残り時間を費やしての、一瞬の生き直し。だが 彼女は、若返りすぎた。細胞再生・活性化装置は暴走し、体の時間が戻ると共に巨大化 彼女の命の火は当初の予定より激しく燃え、急速に消費されてしまったのだ。

遠巻きに、人の輪が出来る。その中心で救急車を呼んだ携帯電話を閉じ、矢萩青年は空を見上げた。

博士が口を開く。

「矢萩君、実験は」

「いえ」

カラッとした秋晴れである。

「成功ですよ」

「…そうだな」

アスファルトの上で、老婆は幸せそうな、赤ん坊のように無邪気な笑みを浮かべていた。

24.demand(後書き)

「
」を要求する、
「
」を必要とする、
「
」を問う」。

「真理ちゃん、大丈夫か、父さんが分かるかい」

「…わかん…ない。あなた誰」

「えっ。…先生」

「はい、どうやらショックで記憶を無くされているようなのです。しかしご家族の協力で取り戻すケースもありますから…」

「何ぼそぼそ話してんの？」

「ああ、いや、すぐ退院できるとい話さ。そうでしょう先生？」

「ええ、体の方はもう大丈夫のようですから」

「よかつたな真理ちゃん」

「…あなた、誰」

「父さんだよ。真理ちゃんの父さんだ」

「そうなの…？証拠は？」

「証拠…」

「うん、父親とか名乗って赤の他人だったら大変じゃない」

「ひどいな。疑い深いのは前と一緒かい…？そうだな、じゃあ…真理ちゃんは19XX年の12月5日生まれでA型、身長は」

「そんなの入院記録でも何でも調べれるし」

「うーん…とにかく家に帰ろう、トシも心配してるよ」

「誰？」

「山科トシエさんさ。うちの家政婦だよ」

「ふうん…金持ちなんだ」

「私達の家のことじゃないか。君の部屋だって立派だったろう、十畳でクローゼット付で、ほら、西の壁に32型の薄型液晶テレビがあつたろう」

「なんで金持ちなの？」

「…私が国会議員だからさ。与党の参議院議員だ」

「ふうん、お金あるね」

「近々選挙があつてね。昼夜問わず忙しいんだが、君が見つかったと聞いて飛んできた。支持者をみんなほつといて、真夜中にタクシ―を五時間も飛ばしてね。私がどれだけ心配しているかわかるだろう」

「とか言つてお涙頂戴作戦？やっぱ政治家はあざといね」

「まだ疑つてるのか」

「ううん、実の親でもさ、子供に恩着せがましいこと言つて縛ろうなんて卑怯じゃん」

「どう言つたら分かつてくれるんだ！」

「あたしさ。なんでここにいろの？あなたわかる？」

「ああ。君は家出したんだ。貯金を持って出て、二週間前、学校から行方をくらました。それからこの辺りの川辺で倒れているのを見つけたんだそうだよ」

「二週間も見つけられなかつたんだ。探す気あるの？」

「当たり前……」

「何で家出したの？あたし」

「……」

「あれ。わかんない？わかんないか、あたしって女子高生みたいだし父親には一番わかんない時期だよ。そうだ、母親連れてきてよ。ちよつとはわかるかも……」

「いないよ」

「？」

「母親はいない。私はこの歳で独身なんだ。と言つより先立たれてね……君とは血が繋がつてない。私は養父なんだよ。本当に忘れたのかい？」

「やめてよ、変な薄笑いしないで。気持ち悪い」

「はは……何だか口が達者になつたな。いなくなる前はもつと無口な子だったろ？ソファに座つてミルクティーを飲んでる姿など、死んだ妻にそっくりだった。血も繋がつてないのにだ。私は施設で君を見つけたときから、君に妻の面影を見ていたのかも知れないな」

「は？クサイ話。何にも思い出せないんだけど」

「君は猫が好きだな。十歳の時に飼い猫が死んで、小学校を三日休んだ」

「あっそ」

「読書もとても好きだったな。何を読んでもか最近では教えてくれなくなった。ふしだらな本でも持つてるのかい？」

「知らないし」

「中学生の時、吹奏楽の大会で銀賞を獲ったろう。あの時君が破った賞状、テープで直したのは私なんだ」

「あーはいはい」

「それから受験の時……」

「あーもうわかった！何か在り来たりで聞いている方が恥ずかしいんだけど。ホント何も覚えてないし、あなたやっぱ怪しいわ。テキストな思い出植え付けて娘にしようって魂胆でも全然おかしくないじやん」

「……そうか……。わからないか。私は本当に君のことを心配してるんだよ、真理ちゃん」

「だったら証拠。証明してくれなきゃあたしここ出ないから」

「……」

「何？」

「私は君を愛してる」

「は？だからそれがホントだって証拠が欲しいの」

「……証明しなくては駄目か。どうしても」

「だから最初から言ってるじゃない」

「そうか……では、これならいいかな」

「あ？」

「私は、君を抱いた」

「……」

25・support(後書き)

「」を支持する「」、
「」を援助する「」、
「」を養う「」、
「」を立証する「」、
「」を裏付ける「」。

本当の限界というのは、到達した瞬間には気付かないものだ。そこに引かれたゴールテープを切った瞬間、何か別のものまで切れてしまつらしい。

そんなわけで、私は死んだ。自殺だ。頸動脈に包丁を突き刺して、失血死。

気付くと、長い長い人の列に並んで立っていた。前も後ろも到達点が見えず、皆一様にぼんやりと黙っている。時折のろのろと、五分か十分に三十センチ程度のペースで前に進む。

なるほどこれがあの世か、と私は考えた。酷くのんびりとした気分だった。何せもう死んでいるのだ、この先何があるうと大して不安がることもない。

不安などもうたくさんだ。

生きていた頃は ついさっきのはずだが百年も昔のようだ

いつも緊張していた。肩にも顔にも首筋にも、心臓にまで嫌な緊張が漲り、ともすると吐きそうになった。それを防ごうとまた賢明に緊張して石のようになり、悪夢に満ちた浅い眠りから覚めると、また同じ緊張が始まる。

楽になりたい、思い切り手足を伸ばしたい。その望みを緊張した胃の奥に小さく握りつぶして、ただ耐えていた。

それを解き放ってくれたのは、私に最大の緊張を与えていた人間達だった。彼らは私が渡っていた細い綱を切り、均衡を崩し、力の入らない暗闇の中空へ私を叩き落としてくれたのだ。

二度と会うこともないだろうが、感謝せねばなるまい。お陰で今はとても楽だ。前に後ろに大勢の人間が居ようが、どれほど待たされようが、大して負担にもならない。この緩やかな無感覚が、或いは死なのかも知れない。

いつの間にもやら、永遠に続くかと思われた列が終わり、眼前に巨

大な門が立ちふさがっていた。門番と思しき女性が、私の前に立っていた人物を飲み込んだ門を塞ぎ、私に爽やかな笑顔を向ける。

何故だか、僅かな緊張が走った。

女性は笑顔のまま、朗らかな声でこう言った。

「おめでとございます、年間十億人目限定キャンペーンでございます！『生き返りプラン』の無料サービスとなっておりますので、あちらの雲の下へどうぞ！」

26. limit (後書き)

「」を制限する「」、
「」を限定する「」。

昔々あるところに、独りぼっちの女王様がいた。女王様は、金と権力を使って大抵のものを手に入れ、何不自由ない暮らしをしていたが、そのうちに飽きてしまった。

「そうじゃ、妾に友人があればよい。妾だけの友人が」

女王様は国一番の彫師を雇い、人間そっくりの人形を何体も作らせた。

「まるで生きているようじゃ」

女王様はお抱えの仕立て屋に上等な着物を作らせ、人形に着せて秘密の部屋に飾っておいた。

それから毎晩、政で疲れた心を癒やしに人形達に話しかけるのが、女王様の日課となった。

一方その頃、国内では相次ぐ天災に不況、更に内紛で大勢の国民が苦境に喘いでいた。政もうまく行かず、女王様は胃を痛める毎日だった。

夜になると、人形を抱いて女王様は嘆いた。

「皆、妾の話を聞いておくれ。民衆どもは妾の言うことなど聞いてはくれぬ、石を投げるばかりじゃ。誰ぞ妾を好いてはくれぬか…ああ、お前達が返事をしてくれたら」

女王様は、人形達がどうか人間のようにならないかと工夫を凝らした。特別な化粧をしたり、呪術に頼つてもみた。しかし人形はいつこうに喋らない。国のあちこちでは争いが酷くなり、王城には日に日に飢えた民衆が押し寄せた。

「…そうじゃ」

頭を痛めた女王様は、侍女を呼びつけるとこう言った。

「城外の民を入れてやると良い。但し一度に五十人程じゃ。他は番号札でも渡して次に回せ。あまり多いとこの城の糧も尽きてしまうからの」

侍女が大急ぎでこれを伝えに行く間、女王様は側近を呼び出して別の命令を下した。

何千何万の中からたった五十人程が、大騒ぎの中場内に招き入れられた。他の民は彼らを妬み、いっそう強く門を叩いた。しかし中に入った者達が出てくることはなく、そして彼らの家族以外はそのことに気付きもしなかったのだ。

「おお、咽せるような血の香りじゃ。下賤の血ではあるが、よい、所詮民は妾の木偶じゃ。ああ、まるで命が香るようではないか」

女王様の人形達は、五十人の血風呂に浸っていた。

「これで友人らも息を吹き込まれよう。明日以降も同じくせよ」

こうして日一日、門外の民の数は減っていったが、彼らは長い間そのことに違和感を抱かなかつた。ようやくおかしいと思い始めたのは、人だかりが半分程になったころだ。

「何だか近頃、人が少ねえ」

「隣の旦那が一回城ん中入ったが、帰ってねえらしい」

「俺んとこの上の坊主もだ」

「城に居ついてんじゃねえのか」

「あの冷血女が貧乏人を住まわせるもんけえ」

「変だ」

「どうしたんだ」

ちょうどその頃、地方で生まれた反乱勢力が革命を唱えて王都へと進軍していた。勢力を率いる頭目は、城下で起こりつつある人滅りの話を聞き、怒りを燃やした。

「王族共め、民衆を密かに抹殺しているに違いない！直ちに城下の民衆をひとつにし、権力に立ち向かうのだ。女王死すべし！」

「なぜじゃ、なぜ何も言うてはくれぬ。血が足りぬのか？もう何千人そなたらに捧げたかわからぬに…まだ足りぬか」

薄暗い部屋で、女王様は独り人形にとり縋っていた。

「妾は寂しいのじゃ……もう嫌なのじゃよう」

門番が血飛沫を上げて倒れる。数十万の民衆が、怒号とともに城内へ雪崩れ込んだ。

折も折、王軍は紛争の鎮圧に出撃しており城内に残るは僅か二千程の兵である。数に押し潰され、城は瞬く間に落ちた。それも文字通り、反乱軍の持つ一門の大砲により、城自体が崩壊したのである。跡には、瓦礫の山と廃墟だけが残された。

「革命万歳！」

「俺たちは木偶人形じゃねえぞ！………」

後日、城跡の搜索が行われた時、一人の女が血だらけで埋もれているのが発見された。顔も分からないほど潰れた女は、赤黒い、なにやら人の形をしたもの達の下敷きになっていたという。

27・regard(後書き)

(- A a s B) 「 A を B だと思つゝ、
「 A を B だとみなす」。

2XXX年、世界はモノクロだった。人類は一つの巨大なマザーコンピューターの元、顔面に装着したマスク状の装置「ベース」によって一律に管理され、安全と健康を保証される代わりに視覚から色を完全に、それこそ瞼の裏からさえも奪われていた。色を表す言葉とその言葉が表す色が結びつきを断ったのは、遙か昔のことである。生活に不便の無いよう、完璧に機能する装置をわざわざ疑問に思う者は無かった。

*

「マキコ、聞いたかつ」

目を輝かせながら走り寄るトシに、マキコは首を傾げて見せた。

「何を？」

「噂だよ、噂！ベースを外した奴が自殺してるって」

マキコは肩を竦めた。

「それがどうかした？どうせまた、『外せる証拠』とか『未知の世界』とかいう話でしょ」

「名前答っ」

トシはにんまりと笑った。

「いいか、今度は間違いない！いつもお前ホラ、言ってるじゃん」

「ベースで管理されてるんだから政府に都合の悪い噂は流れない」
つて。つーことはそもそも、

「『外せることを示唆する噂が流れるのは実際に外した人が居るから。自殺の話は、噂を押さえられそうになくて焦った政府が皆を脅すため』ね……」

さらりと言葉を引き継いだマキコに、トシは勢い込んだ。

「その通りっ！やっぱ頭イイよなあ。そんなわけで俺外すからさ、

どう？一緒に外さない？」

「嫌だ」

「つれねーなあ」

「…あのね、これを外すなんて事はみんな乳幼児の頃に諦めてるの。言うつか意識すらしてない、服と一緒になの。…って毎回言ってるよね？露出狂でも原始人でもないんだからこんな説明させないでよ、下らない」

「下らなくないって！マキコ、『色』見たくないのかよ」

「見えるじゃん、ほら解析すれば。あんたのシャツ青だってさ」

「濃淡じゃねーか！」

「だから？」

これがいつもの二人の議論だった。常識で論破するのはいつもマキコ。理屈無しで食い下がるのがトシ。

トシはいつも、議論の最後に主張した。

「俺は生まれたときのことをぼんやり覚えてる。寒くて暑くて怖くて苦しくて、赤ん坊だから目はぎゅっと閉じてたんだろうけど、確かに見たんだ。一面の…あの色。あの色の名前が知りたい」

「赤でしょ、多分」

「見たことあんのかよ」

「あ、あんたの唇から赤検出」

「…そんなんじゃないんだよなあ…」

言葉で言い表せない、全く知らない感覚。それでいて原初の懐かしさを孕む、素朴で粗暴な感覚。脳味噌の奥に張り付いたその記憶を、トシはどうしても探し出し、日の元に曝したかった。もやもやした気持ちのまま十五年生きた。

だから時々、ふと、一生このままかと思って不安と絶望に浸された。

が、自殺の噂から三日後。

思いも掛けず、突然にその機会は訪れた。ベースを通じて配信される求人広告に混じり、ほんの片隅に小さく、その募集はあったのだ。

ベース脱着実験被験者募集。年齢問わず、丈夫で明るい人を探しています。報酬三十万ドル

「…どう思う？」

笑った唇を震わせながら、トシは尋ねた。マキコは暫く眉間に皺を寄せて考えていたが、やがて渋い顔を上げた。

「やっぱり怪しいよね。実験で何？心理実験？何の役にたてるわけ。出生児全員に装着するって方針、今更覆るわけないんだから意味ないじゃん。第一損害が」

「そう、それだよ」

トシが得たりとばかりに言った。

「損害。…自殺の噂、本当にしる嘘にしる政府には損害たる？もし『外せる、外してもいい』って意識が広まったらとんでもない損害だし、世の中ひっくり返る。だから実験なんだよ、この広告に何人釣られるか、外した奴がどんな反応するか、とかさ」

「……」

マキコはやはり難しい顔をしている。トシは尚も意気高く、

「さつき心理実験って言ったけどその通りなんじゃね？ベース外したら脳波とかわかんなくなるじゃん、だから直接さ」

「そんな実験ならとくにやってるべき…」

「だからさ、多分定期的にやってんだよ。目立たないように」

「でもこの法外な報酬…」

「微々たるもんだろ、政府様が安全を買ったためにゃ」

「だから…」

「それは…」

「喧々」

「囁々」

「あーもう、わかった！好きにすれば？」

とうとうマキコは諸手を上げ、降参のポーズを取った。

「その代わり私もついて行くから。あんたが自殺した場合の死体引受人にね」

「ただの実験だったの」

満面の笑みで、トシはマキコの肩を叩いた。

募集人員はたった一人だったのだが、幸運にもトシはその一人に選ばれた。公募の範囲が狭かったのだろうとマキコは推測した。

政府の迎えて中央の施設まで連れられ、学者らしき人間達と顔を合わせた。その後、ヘリで更に移動。「なぜ募集が一人なのか」「危険はないか」「実験の目的は」など、しつこいくらいのマキコの質問に学者達は丁寧に答えていった。

その間、トシの方は学者に様々な質問を受けていた。年齢、体調、志望動機、生い立ち。

やがてある一点で、ヘリは降下した。周囲に海や平原を望む景勝地の、小高い山の上だ。

マキコとトシが先に降ろされた。トシは、一見髪飾りのような計測装置を頭に着け、ベース用の特殊な切断ナイフを持たされている。「凄い景色…見晴らしいいな」

この風景に「色」がつく。その期待をあからさまに表して、トシは呟いた。

「…ねえ、何であの人達降りてこないの？…あつ、遠ざかっている」マキコがヘリを見上げて不安げに言った。

「あれ、聞いてねーの？何か俺が余計な緊張して計測にノイズが混じるとマズいんだとさ。『彼女と一緒にの方がリラックスできるだろう』とか。…あ？何赤くなってるんだよ」

「なっていないし」

「『彼女』って単に女性の意味だろ」

「わかってる！」

そっぽを向いたマキコに、トシはニヤニヤと笑って、

「ふうん…まあいいや」

ナイフの、電源を入れた。

三つのランプが順に点つたのを合図に、トシはその刃部を額に当てる。マスクの素材が音もなく、数ミリほど解れた。肌は切れていない。そういうふうに出てくる。

「やべ…何か緊張するな」

トシはそう言って笑い、ゆっくりと深呼吸した。震える指で、しっかりとナイフを握り直す。

「マキコ…」

「何？」

「うまくいったら、さ。お前も同んなじ景色見て欲しい…」

「あのさあ、」

勢い込んでマキコが振り返った瞬間、トシは一息に、顎までナイフを引き下ろしていた。

「……………トシ？」

呆気なく、ベースが風に舞って飛んでいく。日焼けのない白いトシの肌は、実に十五年ぶりに、直接外の空気を吸っていた。

空は抜けるような青。平原では枯れ草が、風に煽られて小麦色の波を立てている。日光を浴びて宝石のように輝く海。鮮やかな黄色い花が崖の向こうを一面彩っていた。

「トシ。どうしたの？何が見える？」

呆然と見開かれた目が、激しく揺れている。そのまま暫く、無言で佇立していたトシは、突然がくりと膝を崩し、後ろに倒れ掛かって辛うじて踏み止まった。

「…っは。はははっ」

掠れた笑いを漏らしたかと思うと、激しく咳き込む。喉に爪を立てて、息が詰まったように悶える素振りを見せた。

「トシ？何っ、何なのっ」

「…か…」

「えっ？」

「…そうゆ…こと、かよ…」

「は？」

屈み腰でよろめきながら、トシは取り落としたナイフを拾い直した。血走った目で振り向き、マキコが口元にあてた手を、痛いほどの力で掴む。

混乱と恐怖で震えるマキコに、トシは掠れた声で言った。

「外す、なよ。…ぜっ、たい」

何を言われたのか、マキコには分からなかった。何が起こったのか、何が起こるのかも。

トシはよろよろと三、四歩遠ざかると、痙攣する両手にナイフを握り込み、刃を自らに向けた。そうして肌を傷つけないはずのそれを、力任せに、首筋に突き立てる。

いつの間にか、電源が切れていたらしい、ナイフの鋭い刃先は、容赦なくトシの喉を抉った。噴水のように吹き出した鮮血が、マキコの視界を染め、トシを染めていく。

脱力して膝を落とし、掌に受け止めた自らの血をじっと見てから、トシは振り向いた。

笑っている。

酷く嬉しそうな、安心したような顔だ。マキコが見たことのない、そんな表情を浮かべてトシは、もはや声の出ない唇を、小さく動かした。

『この いろ だ』。

幸せそうな笑顔のまま、トシは、ゆっくりと崩れ落ちた。

呆然と座り込んだマキコの背後、茂みからふいに屈強な男達が飛び出した。

「取り押さえる！」

「動くな」

「大人しくしろ、その奴みたいに犯罪者になりたいか」

されるがままに拘束されながら、マキコは呆然と、斑になったトシの体を凝視していた。

何も見えない。

掻き回されきった頭の中は、やがて真っ白になっていった。

*

『政府に向けてテロ予告をし、ベースを取り外して自殺した少年』の事件は、全世界同時生中継されていた。不適切とモザイクを掛けられた犯人の素顔は誰に知られることもなかったが、取り外し直後の苦しみ様子はそこかしこで様々な憶測を呼んだ。

曰く、

「元から毒を飲んでいた」

「共犯が盛った」

「毒ガスの発生している地域だった」

云々。中でも論議と恐怖を呼んだのは、

「直接接触れる外気は有毒である」

という説だった。

政府の目的　ひとりの命を犠牲に、世間へベースの重要性を強く印象づける　は見事に達成されたと言えるよう。

対象者が、死を迎える前に自殺したことは計算外だったが、人々の恐怖を煽るには十分だった。大事にならずに済んだと、関係者一同は胸を撫で下ろしたのである。

トシは、利用された。

そのことに漸く気付いたのは、何も出来なくなった後だった。

おそらくこれからも、何かをすることはないだろう。ベースを外すことも、きつと生涯ない。

『外すなよ、絶対』

彼はなぜ自ら死んだのか。死を確信する中で、あの「色」をどうしても見たかったのだろうか。それとも元々命は要らないつもりだったか。

ふと、荒唐無稽な思いに捕らわれることがある。彼は、わざと自殺したのではないかと。

それはささやかな反抗だ。

「殺せるもんなら殺してみろ、ガスなんかじゃ死んでやらねーぞ。見てろ、奴らを不安にさせてやる」

ベースを外すなど言いながら、その危険性を十分に訴えなかったつまり毒ガス死しなかったのは何故か。希望を、ベースを外して生きることへの希望を、残しておきたかったからではないのか。

だが、この仮定が成立するためには、彼が撮影に気付いていなければならぬ。

だからただの憶測だ。ぞつとするような、憶測で邪推だ。

「……………」

灰色の大地を灰色と意識せずに眺め、マキコはまた、ベースを爪で掻いた。

28・base(後書き)

「
」
A on B (Aの基礎をBに置く)。
「
」
A be . . . on B (AがBに基づいて)。
、

進歩とは素晴らしいものである。殊に、その内包された意志の、進もうという力が素晴らしい。よしんば努力が実らなかつたとしても、向上心さえ抱き続ければ人生において大きく得る物があると言えるだろう。

このことを教えてくれたのは私の父である。常に足りない自分であれ、下を見るな、研鑽を怠るなと口癖のように繰り返した。その父の信念は、そのまま私の信念になった。

私は決して優秀ではない。

勉強、スポーツ、人間力などで同輩に泣かされた回数は数え切れない。それでも折れずにここまで生きてこられたのは、父のお陰と言うほかはない。私が失敗する度に喝を入れ、明日のためのエネルギーを与え、より良い発展のための体と脳を作ろうと最善を尽くしてくれた。

そして、何度も躓き、壁にぶつかりながらも、私は周囲と高め合いながら今の地位を手に入れた。今では多くの仲間と共に、力を最大限発揮して働いている。辛いこともあるが、すこぶる健康で病院に世話になることもないし、毎日が充足感に満ちているのだ。

父には本当に感謝している。もう長い間会っていないが、今頃どうしているのだろうか。

*

「もう長い間になりますか、大丈夫なんですか？」

「何がだね」

「あのロボットたちですよ。百年はメンテナンスしてないんですよ」

「ああ、大丈夫だよ。なにせ出来が違うんだ、我が社のロボットは「確か独りで開発した人がいたんですよ」

「うむ。天才的なエンジニアだったらしい。先々代の時に亡くなっただんが、天涯孤独だったらしくてね。遺骨をこの建物の下に埋めてあるんだ。墓標にしたいという遺言でね」

「あのロボットたちを草葉の陰から……ってわけですか」

「そうだな。何しろ、連中の人工知能に彼を『父』と認識させているそうだから、余程愛着があつたんだろう」

「全く、仲のいい親子ですねえ」

29. improve (後書き)

「」を向上させる、
「」を改善する、
「」向上する、
「」。
進歩する。

人気のない、森の奥に一軒の小さな家が建っている。その古びたドアを、一人の女がノックした。

「お婆ちゃん、来たよ。私。遅くなってごめんね」

女はそう話しかけたが、布団を被って丸くなった人物は、後ろ頭を見せたまま振り返らなかった。

「怒ってるの？…そうだよ、ずっと来てなかったもんね。もう、あれから七年になるかな。覚えてる？私がまだ小さい頃にさ、お酒とパン持ってお使いに来たでしょ」

人物はやはり振り返らない。動こうともしないようだった。

「あの時、危ない目に会ったから、ってお婆ちゃんのところかせて貰えなくなっただよ。こんなこと、言い訳だよ。けどお母さんは悪くないよ。私のこと心配してくれただけだから。悪いのは…悪いのは私。人のいない道でのんびり花摘みなんかしてたから悪かったんだ」

女が足先で、床にのの字を描く。埃の下から傷んだ床板が顔を出した。「やつと一人前になって、家を出て…だから来られたけど。

本当に遅すぎたよね。せめて…せめて、お婆ちゃんが私のこと、わかるうちに来たかった。私は…私も、お婆ちゃんも、随分変わっちゃったよ。もう狼に騙される馬鹿で素直な女の子じゃなくなった。

…ねえ、お婆ちゃん。お婆ちゃんがもし生きてたら、私のこと、分かってくれたかな。私を見て、あの時みたいに笑ってくれたかな…」
窓から光が差し込み、室内に舞う埃を浮き上がらせた。ベッドに横たわるのは、目玉も失い皮と骨だけになった、小さな体だ。

「ねえ、お婆ちゃん。分かる？私のこと。…ねえ…」

「わかるさ」

不意に、低い声が発せられた。女がはっと顔を上げると、ベッドの向こうからおもむろに立ち上がった影がある。

「わかるとも。お前、あの時の女の子だろう？『赤ずきんちゃん』」
「あなたは…」

女の目に溜まった涙が、瞬きの拍子に零れ落ちた。

「そうさ。あの時の狼だよ、赤ずきん。俺も随分歳をくつた…なあ。冥土の土産に、あんたを食わせちゃくれなにか」

嘎れた声の主を、女は暫く見つめていたが、やがて静かに頷いた。

「…いいわ。好きにして。どうせ独りなんだもの、死んだって一緒

…」

「そうかね」

「だけどその前に、一つ。訊きたいことがあるの」

「なんだ」

女は、じつと狼を見つめた。

「どうして、お婆ちゃんと手を組んだの？」

日が陰った。古びた家の中が、濃い影に包まれる。

「…何？」

狼が聞き返した。

「知ってたのよ。…普通狼が、人間を丸呑みにする？お腹を切り裂かれて、誰が生きていられるの？お婆ちゃんが死んだことを誰がどうやって伝える？…気付くよ、それくらい」

狼が、面を俯けた。

「…理由は…俺が、お前を、食べたかったからだ。俺にはお前が、とても素晴らしく見えた。触りたい、全て俺の物にしたいと…だから、食べようと思った」

「嘘」

女は静かに言った。

「それだけじゃない筈」

狼が渋面を作る。

「そうさ。…お前を食えと言ったのは、この婆さんだ。理由？知ら

ないね。俺に分かるのは、若い頃の婆さんがお前にそっくりだったことだけだ」

「…そう。分かった」

呟いて、女は暫く目を閉じ、瞼の裏で天を見上げていた。

やがてゆっくりと息を吐き、目を開ける。

「…さあ。質問は終わり。あなたの好きにして」

それを聞くと、狼はのそりとベッドを乗り越え、女の目の前に立った。鋭い爪を肩に掛け、引き寄せる。老いてなお堅牢な牙を剥き出し、乳房に食らいつかんとして、

はたと動きを止めた。

「…婆さんはお前を、…いや」

小さくかぶりを振る。

「何でもない。…すまん」

大口を開け、それこそ丸呑みする勢いで、女の体を抱き寄せた。呻き声、血の飛沫。一人と一匹の胸元が、みるみる朱に染まっていた。

「ああ…」

狼が、かすれた息を漏らした。

「そうか。やっと、わかった。お前は……」

力を失い、崩れ落ちる。色褪せた毛並みを濡らして血溜まりが広がっていく。喉元には、刃物の鈍い煌めきがあった。

「わかった…？何がわかったって言うの」

衣服を血に染めて、女が呟いた。狼の閉じかけた目が、辛うじて見上げる。

「あなたは分かってない、私が誰かすら。『赤ずきん』は私の姉さんだよ」

狼の瞳が大きく見開かれた。何か発しようとしたが、虫の羽音のようなか細い声が漏れたのみだ。それを最期に、狼は絶命した。

女は踵を返し、家を出た。森の向こうへは、最早獣道と化した小道が続いている。

「姉さん、駄目だったよ……」
小さく呟いて、女は藪の中へ消えた。

30・recognize(後書き)

「」を認める「、」
「」を識別する「、」
「」だとわかる「」。

「知らぬが仏」と諺にもある通り、世間には知らなくてもいいことというのが沢山あるものです。うっかり小耳に挟んだせいで命まで奪われる、なんて話は映画の中にもよくありますね。大変なことに気付いたからと言って、無闇に騒ぎ立てるのはためにならないかも知れません。

さて、ある時あるところに、男がおりました。彼はごく普通のサラリーマンで、奥さんと二人の子供を持っていました。毎日真面目に働き、時にはお酒を飲んだり夫婦喧嘩をしたりして、そこそ豊かな生活に満足していました。

そんなある日、彼の元に一通の手紙が届きました。高校時代の友人からの、同窓会の誘いです。懐かしさに嬉しくなって、彼は早速参加の旨を伝えました。

当日は土曜の夜で、蒸し暑く過ごしていく日でしたが、会場に続々と集まった同窓生達は皆笑顔でした。一次会は大いに盛り上がり、彼も久し振りに会った友人達と、他愛ない話をしたりして騒ぎました。

皆、程度に差はあれど、高校時代とは随分印象が変わった人ばかりです。名前を聞くまで誰やら分からない人も大勢居ました。冗談混じりに怒られながら、彼は「俺も歳かな」などと嘯きました。

一次会が終わると、帰る人もちらほら出始めました。二次会は、残った皆でカラオケに行く予定になっています。翌日が休日の彼も勿論同行しました。

お酒が入っているので、移動は徒歩です。ぬるい風を浴びながら、道々、いい気分で歓談していました。

そうこうしながら、線路のガード沿いを通る、人気のない道を歩いている時です。彼は突然、話すのを止めて立ち止まりました。

「どうした、立ちションかあ」

「先に行くよー」

と、友人達が千鳥足で遠ざかります。彼は脇を走る線路に、ぼうつと気を取られていました。

人です。線路の上に、人間が立っているのです。この暑い中に、重そうな黒い上着を着て、ひっそりと佇んでいるのです。

「なあ、あれ…」

と彼は友人達の方へ振り向きました。

が、誰も居ません。どこかの角を曲がってしまったのか、人っ子一人いないのです。置いて行かれたか、と途方に暮れた彼の耳に、ある音が聞こえてきました。

カンカンカンカンカンカン……どこかの踏切が警告音を鳴らしているのです。すると遠くから、タタンタタン…タタンタタン…と、電車の近付いてくる音がし始めました。線路の向こうに光が見え、見る見るうちに近付いてきます。それなのに、線路上の人は動こうともしないのです。

タタンタタン…タタンタタン…

「おい、降りろ！危ないぞ！」

彼は叫びましたが、聞こえていないかのようにその人は突っ立つたままでした。

タタンタタン…タタンタタン…タタンタ、ゴオーオーオオオオオオオオオオオオオオ……

うわっ、と彼は目を覆い、電車が遠ざかってからそっと、震えながら線路を覗き込みました。

しかし、そこには何もありませんでした。敷き詰められた石と、古びた線路があるだけです。彼はしばし、狐に化かされたような顔をしてぼんやりしていました。が、

「酔ったかな…」

そう呟くと、友人達が向かったらしい方向にふらふらと歩き出しました。

当てずっぽうに路地に入り、彷徨き回っていると、カラオケ屋の

看板が目に入りました。その建物へ近付くと、案の定入り口の前で同窓生二、三人が話をしています。

「悪い悪い、待った？」

声を掛けると、彼らは笑顔で振り向きました。長かったな、などと彼をからかつて、皆が先に入っている部屋へ向かいます。二十人ほどが鯨詰めになった大部屋で、彼は尻をねじ込むようにして座りました。

久し振りの再会だからか、全員が羽目を外して楽しむ中、やがて彼にもマイクが回ってきました。

「歌えー！」

「前、前」

彼は頭を掻き掻き、狭い隙間を通って前に向かいました。処が、バランスが狂ったのか、誰かの足に躓いた拍子に体が立て直せず見事にひっくり返ってしまったのです。おまけにどうやら卓上の飲み物が倒れたらしく、スーツの背中がびしょぬれになってしまいました。

「おいおい大丈夫かー」

心配する声は脳天気です。周りの全員が、けらけらと笑い声をたてました。彼も応じて、笑いながら起き上がろうとしました。

が、その時、既視感が彼の胸中に浮かび上がりました。

転んだ人物。

濡れた服。

嘲笑。

先頭を切って見下ろして笑っているのは、自分です。

どうして今まで忘れていたのでしょうか。彼は、高校生の頃いじめのリーダーだったのです。同窓生は皆、多かれ少なかれ彼にいじめられたか、付き従っていた者ばかりなのです。

呆然として、彼はうつ伏せのまま顔を上げました。テーブルの下には荷物が押し込められています。スニーカーやハンドバッグに混じって、異様な塊が見えました。

季節外れの、重そうな、黒い厚手のコート。

…タタン、タタン…

(……………!?)

酔いがいつぺんに醒め、彼は、マイクを握りしめてゆっくりと立ち上がりました。引きつった笑顔を皆に向け、震える声でこう、問い掛けます。

「な、なあ、これ…もしかして、仕返し？ なんつって」

ぴたり、と笑いが止まりました。全員が無表情になり、無言で目配せし合います。やがて今では土建屋だという一人が立ち上がり、つかつかと部屋の入口へ向かうと、立ちふさがるようにして狭い通路に陣取りました。

がくがくと震え、冷や汗をかき始めた彼に向かって、誰かが独り言のように言います。

「あーあ…気付かれなきゃ悪戯で済ませたのにさ」

そして全員が、一斉に 彼に笑みを向けました。その後のことは一切わかりません

このように、気付いてしまったら最後、悪いことしか起こらない、などということはままあるものです。彼も黙っていれば良かったです。すね。

…何ですって？そもそも最初から、彼が自分の過去に気付いていればよかったです…？

おやおや、これは一本取られましたね。まあそこはそれ、ご愛嬌

……………それではこれにて、また次の機会に。

3 1 . n o t i c e (後 書 き)

「
」に気がつく、
」だとわかる。」。

何も持たない人だった。最低限の布を身に纏い、最低限のものを口に入れる。それだけで満足しているような人だった。

「仮に」

というのが口癖で、

「仮に、このベーコンが松坂牛のステーキだとするでしょ。ほら美味しい、お腹一杯」

そんなふうにして、いつもふわふわと笑っているのだ。そんな彼を仙人だと言う人もいれば、馬鹿だ、怠け者だと罵る人もいた。

彼は住まいを持たない。丈夫なのか、器用なのか、その日気が向いた場所で一晩過ごしてしまう。そんなときは干したての綿入り布団にくるまっていると思うのだそうで、驚いたことに、寝ているときの彼の体は本当にぽかぽかと温まっているのだった。

夏は蒸し暑く、冬は十分に暖のとれない環境の中で、彼の真似をする者もいた。しかしどうもうまくいかないらしく、大抵は「暑くない暑くない」と呟いて耐えることに終始する。

ある時、そんな中の一人が仮に仮にを積み上げて大事件を起こしかけたことがあった。最初はどこかで拾ってきた木彫りの人形に、名前を付けて可愛がっていたのだが、いつの間にか本気でそれを娘だと思っていたらしい。設えた棚の上にあつたのを仲間がうっかり落として踏んづけ、首を折ってしまったときに、激昂して鉄パイプで殴りつけようとしたのだ。

あわやというところで、騒ぎを聞きつけた皆に止められたが、押さえられた男は今度はぼろぼろ涙を流し始めた。そこに彼がやってきて、突然、二、三発のビンタをお見舞いしたのである。

「馬鹿、半端なもの持つんじゃない！」

びっくりするほど真剣な顔でそう怒鳴って、それから酷く悲しそうに歩いていってしまった。

そんなふうには、ともかく不思議な人で、時々ふらりとなくなつては忘れかけた頃にまた顔を見せたりした。何をやって生活していたのか、もしかしたら本当に霞を食えたのかも知れない。確かなのは、彼を本当に憎んでいた人間は一人もいなかったこと。そうして彼もまた、皆を好いていたことだ。

そんな彼が、ある時何ヶ月も帰つてこなかった。いつものことなので誰も気にしていなかった。またどこかで、仮の布団で寝ているのだろう、と。

だが、ある冬の朝に道端に寝転がっていた彼は、ちつとも暖かそうではなかった。

皆で慌てて運び込み、ありつただけの毛布だのボール紙だのを掛けて彼を暖めた。やがて身を震わせながら、うつすら目を開けると彼はこう言った。

「ああ、温いなあ。王様気分だ」

けれど彼の皮膚は青白く、唇は紫で、ちつとも暖まっていないことは一目瞭然だった。彼自身は確かに王様のような暮らしをしたかもしれないが、皆にとっては、自分たちと同じ貧しい仲間に過ぎないのだ。

これが、彼の限界だった。

「手…手を」

彼が賢明に持ち上げた指を、全員が握りしめた。

「ああ」

満足そうに溜息を吐いて、彼は笑った。

「ほんとに温いな…俺、仮の物ならいっぱいあったけど、お前らは仮じゃなかったなあ」

「当たり前だろ、馬鹿」

誰かが涙声で叱責した。彼はもう一度、にっこりと笑って、皆の手の中でだんだん震えが消えていって 突然、その指が驚くほど力強く握り返した。

まさか、と皆が腰を浮かせる。だが彼は、既に命を手放していた。

その瞬間、皆、何故か天井を見上げていた。彼がまた、何も持たずに 或いは今度こそ全てを手に入れて、広く高く、空気に溶けていくのが見えた気がした。

32. suppose (後書き)

「〜だと思っ
「想像する」
「仮定する」。

「所長、所長ウ」

「なんだい五月蠅いね、入りなよ。なんだ松さんかい」

「へえ、どうも。お休みんとこへ失礼します」

「お休みつてね、あんたらはもう上がりでも私やまだ事務仕事やなんか残つてるんだから。早めに済ませてくれないと困るよ」

「そりやもう、へい。イヤ何でも与太の野郎がどうしても話があるつてんで、所長はお忙しいんだツても聞かないんで、連れてきたんですが…おウ与太、さつさと来ない。所長様を待たせるんじゃないよ、愚図だな全く」

「あアいいよいよそんなに叱らなくなつて。何だい与太、話して御覽」

「…あのね、えつとね…」

「さつさと言わねえか馬鹿」

「痛いッ。…あのウ、可哀想なんですウ」

「可哀想？誰がだい、お前かね」

「えつと、牛…」

「…驚いたね、牛が可哀想だつてのかい。おい松さん、与太はここで働いてどのくらいだね」

「ハア、明日できつかり一年です」

「そんなに働いてるのに今更どうしたんだい。私らの仕事は牛を立派に育てて人様に食わせることだよ。与太お前知らなかったのかい」

「ううん」

「じゃいつたい何だつて急に言い出すんだ」

「急にじゃないの。だんだん育てて、大きくなって、ね、与太…俺が撫でると、嬉しそうな顔するだろう、ね。飼い葉だつて与…俺がやらないと食わない、ね」

「うん、まア、言いたいことは分かった。育ててるうちに牛に情が

移ったと、こつこつわけだね」

「あッそれ、情。情が移ったン」

「そうなんでさアこの野郎、牛を一人前のガキかなんかと勘違いしてやがるンで」

「しかしそりやア困るよ。与太、私らが世話してる牛は、みんな食われるためにいるんだ。勿論中には種付けだの何だのつてのもいるがね、ともかく人間様が食うためにあるんだからな。牛には悪いが、食い物がなきや困るんだから」

「うづン、違います。俺は食わない」

「そりやお前は食わないさ、高い牛なんだ。松坂牛だ。貧乏人じゃ手が出ないもんな、私だつて半年に一遍食えるかどうか」

「所長さんも食わない」

「そつだなア、食わないようなもんだな」

「腹が減ります」

「減るだろつさ、だけど食えないんだ。いいかと太、お前がいくら牛が好きでもな、うちの牛は食えない。わかるな」

「俺、あの牛は食べない。贅沢です。腹が膨れるだけです」

「時々妙にスレたこと言うね、お前。しかし、じゃあ何だい用つてのは。牛をペットにしたいとかなんとか、そんな話なら駄目だよ」

「……（かぶりを振る）」

「仕事をやめたいつてのかい」

「……（かぶりを振る）」

「うゝん…分らないねエ。松さん何か聞いてないのかい」

「いやア、あつしもさつぱりで。この野郎『可哀想だ可哀想だ』つてやがるばつかりで」

「そうかい…松さんならねエ。『松坂牛は食わなくていいから食える連中と同じぐらい給料をくれ』か何か言いそうなんだが」

すると松五郎ギクリとなりチラリと目配せ、与太郎気付かずぱつと笑顔になつて、

「あッ。それッ」

33・raise(後書き)

「」を上げる、
「」を育てる、
「」を提起する、
「賃上げ」。

その道路は両側を森に挟まれ、見通しの悪い急カーブで街灯もなく、おまけに何年も放置されて路面はボロボロだった。それが都市部からそう遠くない場所にあるために、こんな場合にお決まりの噂
「女の幽霊が出る」という評判が立ち、密かに肝試しに行く連中が後を断たない。それだけならいいが、その連中が本当に事故に遭うものだから、流石に怪談で済まされなくなってきた。

近郊住民の強い要望もあり、改修工事が決定。幽霊話も消滅か、と思われたこのタイミングで、見納めにとドライブを決めた若者がいた。

彼は地元では有名な、いわゆる走り屋で、葛折りの多い近所の山を夜な夜な走り回ることを日課としていたが、噂の幽霊カーブでは走ったことがなかった。スピードを出せば、幽霊が居ようと居まいと大事故は免れない、というほど状態の悪い道だったからだ。

しかしそれが取り壊され、安全で見通しの良い道路に生まれ変わると知って、彼の挑戦欲がうずいたらしい。折角だから幽霊を見てやろう、という気持ちもあったものか、幽霊がターゲットにしているらしい若い女　自分の彼女を連れて噂の道路に向かった。

「ねえヒロ、もう帰ろうよ。全然前見えないじゃん」

「ビビんなよ、安全運転するしいざとなったら振り切って…」

「ほんと?」

「おう、楽勝楽勝」

「…本当に、本当?」

助手席の彼女の声が、突然低く沈んだ。彼はぎくりとしたが、そちらを向くことが出来ず、しばらくはただ車を走らせた。カーブに差し掛かる辺りに来ると、ふと、彼女が腰を浮かせる気配がする。堪えきれなくなつてそちらを見ると、これまたお約束、全身血にまみれた青白い女が、こちらに手を伸ばしているではないか。

「……………！」

彼は声も出せずに口をぱくぱくさせ、すぐさま逃げようとした。

しかしこの時、彼がとった行動は、車から降りようとドアノブをやたら押したり引いたりする事でも、道を引き返すことでもなかった。不思議と、今までこの道で事故を起こしたのは、皆そういう行動に出た者だったのだが　勿論彼はそんなことなど知る由もない。

ともかく彼は、無我夢中に動いた。

進行方向はそのまま、アクセルを目一杯踏みつける。ヘッドライトを頼りに道の輪郭を掴むと、トップスピードでコーナーに進入。大胆かつ繊細なハンドル捌き、高速でクラッチを操る左手、エンジンが甲高く唸りタイヤが路面との摩擦で悲鳴を上げ　それはもう、見事なドリフト走行だったという。彼の仲間が見たなら、おそらく驚嘆の声を浴びせずにはいらなかったろう。

あつと言つ間に幽霊カーブが後方に消えていく。たまらず後部座席に吹っ飛んだ幽霊は、どうやらそのまま消えたようだった。

彼がほつと力を抜き、それでもあまり減速はしないまま走っていると、助手席から彼女の呻き声がした。どうやらシートベルトをしていなかったために、どこかを打ち付けたらしい。

「悪いミサ、大丈夫か」

「…ん…」

「いやーマジビビったわ、お前今完全に取り憑かれてたぞ。つか俺すげー、あのボコボココーナークリアしちゃったよ」

安心したのか急に饒舌になった彼の頬を、彼女の手がするりと撫でた。

「あ？何だよ」

「初めて…」

「え、俺の走るの見たことあつたる。確か、」

「あなたみたいなのは初めて。他の男は駄目だったわ、みんな臆病者で…私の彼氏もね、あなたみたいに車が好きだったの。危ないつて言ってるのに、無茶して突っ込んだりして…私まで巻き込んで

でもいいの、もう体だつて手に入つたし」

「お…おい、ミサ…？じゃ、ないのか？」

「ねえ、私あなたのこと気に入っちゃった。隣にいてもいいかしら。これから、ずつと…」

34・prefer(後書き)

「」をより好む「」。

ある所に、女嫌いである有名なスリが居た。知る者の間では銀さんと呼ばれ、恋人も女房も作らず腕一つで世を渡ってきたという奴で、七十近い年だったが、未だに現役で山手回りなぞやっている。

その銀がとうとう、引退を決めた。寄る年波に勝てなかったのか、だんだん自分で「危ないな」と感じる時が増えてきたのだという。仲間達はしきりに、では引退祝に一人くらい女を抱きにいってみろ、と勧めたが、いつかな聞かなかった。何しろシゴト中の人混みの中でさえ、器用に女と触れず歩くというのだから、それはもう徹底して嫌いなのだ。シゴト納めの日も、淡々と勧めをつっぱねて出た。

ところが当人、内心では仲間達の言うことももつともだと思っっている。貯めに貯めた貯金はあるものの、スリ人生最後の稼ぎだ。何でも、やれることはやってしまった方がよいと考えた。

(よし)

ついに決意すると、いつものように群衆に溶け込みながら、これと決めた女に狙いを定めた。ややとうの立った女で、無造作に尻ポケットに財布を突っ込んでいる。銀さんすると近付くと、女は嫌だ嫌だと引っ込む右手をなだめすかして、電光石火、鮮やかに尻の財布を懐にした。

ギョウギョウに詰めていた財布が抜けたのだ、女としても何も感じないわけではない。後ろで息を呑んだ気配がした。泥棒ツとくるかと思っていると、なんと女、公共の場で金切り声を上げて、

「痴漢ツ！お尻を触られたわツ」

これには銀さん驚き、次にかあつと腹が立った。何しろ生来の女嫌い、誰が手前エの体なぞ、と思わずこっぴど叫んでしまったのである。

「馬鹿野郎、誰が触るか！突っ込んでたのを抜いただけだツ」

銀さん、痴漢疑惑を深めちまったというわけで…。

3 5 . e n t e r (後 書 き)

「」に入る「、」
「」を記入する「。」。

「引退するウ？」

雑誌編集者の浅野は、素っ頓狂な声を上げて原稿を取り落とした。

「そう。色々迷惑かけたね、俺、もうやめるから」

「やめる……って、そんなあ、読者が待ってるんですよ。冗談よして下さいよ」

「それが冗談じゃないんだな……」

煙草の煙を長々吐き出して、俣井は明後日の方を見ていた。

俣井吾朗は今年で五十五になるベテラン作家だ。弱冠二十一で文壇に現れ、長くロマン小説を書き、ベストセラーを何本も持っている。新星だの騎手だの新境地だの、そういった煽り文句にも常に事欠かなかった。

「その先生がですよ、どうして引退なんです！生意気なようですが私、今頂きました『想起閃』は先生のライフワークであると認識しております。小説と共に人生を歩んでこられたのに、それを捨ててどうなさるんです！」

浅野は唾を飛ばしながらまくし立てた。しかし俣井は表情を変えず、

「ただの引き延ばしだよ」

と言う。浅野は絶句した。

「知ってるだろう？こいつへの読者の評価は。売上げ見てもファンレター見ても一目瞭然だ。俺あ衰えたよ。読み手どうこうじゃない、自分で分かるんだ」

「そ……そりゃあ、長いこと書いておられたら作風は変わります。読者のニーズも変わります。けどファンはついて来ます、待ってるんです」

「そりゃあ気の毒だった。だがまあ、世間は広いからよ。誰か同じ

ようなの見つけてついてけばいい」

特に皮肉げでもなく平然としている。浅野は必死だった。

「だけど…この先…」

「なあに、食っていく方法なぞいくらでもある。暫く賭麻雀でのもいいな」

「先生…！」

俣井は灰皿の上で煙草を擦り潰した。

「あ、受けてないな…って肌で感じるときがあるんだ。青二才の時代以来の経験だよ。しかし、この歳になると、もうきついわ。それにほとんど涙目の浅野に向かって、俣井は何とも複雑な微笑を浮かべた。

「飽きたんだ。俺、思ったほど作家に未練ないみたいでな」

へなへなど、浅野がその場にへたり込む。彼の中で幾つもの思索が渦巻いているのを流し見て、俣井は窓の外に目をやった。

血のように赤い、夕空である。

一週間後、新聞にひとつの訃報が載せられた。俣井吾朗、享年五十五。死因は心不全。葬儀は身内だけで執り行い、遺骸は某所に埋葬した。

身内の一人である担当編集者の浅野は、葬儀の後、俣井の兄という男性から一通の書状を手渡された。見ると、俣井本人から充てられたものである。震える手で開封し、中身を取り出した。

「浅野君へ」

厄介をかけてしまつて本当にすまなかつた。しかしこうするしかなかったのだ。中途半端な苦しみの中で生活出来るほど、私は大人ではなかつたようである。

色々して貰つておいて悪いのだが、幾つか頼みがある。まず、「想起閃」は未完の遺作として出版して欲しい。また今後は、作者の

死因は不慮のもので、決して自殺のようなことはない、きちんと伝えられるようお願いする。最後に妙な頼みではあるが、死んだ後の私のことは、又野二郎と呼んでいただきたい。これは身内だけで構わない、むしろ外部に漏れないよう頼む。

なぜこんなことを頼むかって？ その方がロマンチックだからさ。ロマン小説家と呼ばれる人間の引き際としてはなかなかのものだろう？

ではまた、どこかの雀荘で。

俣井改め又野』

浅野の頬が震え、それからふわりと緩んだ。その上を一筋、涙が零れ落ちてゆく。

「バカ……」

引退宣言の日、彼が浮かべた一瞬の悪戯っぽい笑顔が、浅野の脳裏に蘇っていた。

36・suffer(後書き)

「」を経験する「、

」を受け「、

」苦しむ」。

なるほどなるほど、突然怒鳴り込んできた。その上抵抗の暇なくご友人が何人も犠牲になった。さぞお辛かったですでしょう。必ず捕まえますから、犯人の特徴を出来る限り思い出して頂けませんか。

「顔は暗くてよく分からなかったわ。人間だったのかしら？まるで鬼のような。いえそれ以上に酷い奴でした。日本刀みたいなものを持って、逃げたり取り抑えにいたりするひとを、容赦なく。ああ、思い出すだけで恐ろしい。…他に？…そう言えば、背中にか妙なものを差してました。棒に布がついた。旗？でも、すぐとれたようでしたけど。あつ、それから、鉢巻もしてたわ。あれは…まるで、そう、殴り込みみたいだつて思った」

「とにかく動きが速くてよ、どうしようもねえんだ。捕まえようと思つたらびよんぴよん跳ねやがって、あの爪でもってみんな血だらけさ。ひでえもんだつた。俺もこの通り、片目やられちまつてよ。あの野郎、ひとを小馬鹿にしていきいき笑つてやがってよ。目なんか爛々光つてよ。…こりゃあ駄目かな、つて思つたぜ」

「牙が、生えてたんです。こう、ぐわつと口を開けたら、恐ろしく鋭い牙が。大声で脅かして、走り回って、仲間を見境なく押し倒しては噛みついてました。…どこに？首筋ですよ、決まってるですよ。もう、そいつは全身真っ赤になって、目が吊り上がって、四つん這いで信じられない速さで。いいえ、動物なんかじゃないですよ。言葉を話しましたし、第一。…あれは化け物ですつ…」

「ぼく、顔なんかわかんないよ。お母さんどこ？悪い奴らもういなくなつた？もう僕の頭突つつかない？おじちゃん、僕泣かな

かったよ。あのね、真っ暗になったらお母さんがぼくを抱っこしてね、でも空から変な爪が降ってきてね、バサーバサーって。羽があったの、こつ…」

どういうことでしょう、警部。

うむ、複数犯だというのはわかっておる。証言を繋ぎ合わせれば、おそらく数は三から六…。

しかも人間と猿みたいな奴と、獣と鳥…サーカスじゃあるまいし。何でも犯人は、討ち入り気取りで名乗りまであげたそうですが…。

らしいな。なんでも、やあやあ我こそは桃太郎…とかなんとか。間抜けな名前だ。

37. describe (後書き)

「」を描写する「、」
「」の特徴を説明する「」。

「今寝たら勿体ない」

「もうちよつと読んでから」

そんな風に考えてつい夜更かし、気付いたら空が白んでいる…なんてことはないだろうか。

実はその現象は、ある嫌がらせ好きの連中の仕業なのだ。連中は、霊だか妖怪だかわからないがともかく生きた人間とは違う存在で、正確な数もどんな意識を持っているのかもわからない。分かっているのは、連中が気紛れで毎晩誰かを選び、耳元で甘言を囁き続けること。

「今がチャンス」

「徹夜ぐらい大丈夫」

「寝たら起きなくなるよ」

すると、大抵の人間はこの囁きに誑かされ、自ら覚醒して以降は寝付くのが限りなく困難になり、挙げ句多少健康を損なう。

まあ、本当に徹夜したいときにはありがたいのだが、大抵奴らが来るのは望まないタイミングだ。

「やべえ…寝ろよ俺」

今の自分などは、まさにその典型にあたる。普段なら布団に入ろうという時間に、つい奴らの言葉に耳を貸してしまったのだ。寝たら勿体ないと頭のどこかで囁き続ける声のせいで、俺は今没頭している。

ドシャツ

ズル…ズル…

どうしよう…埋めようかな…

ガタン

盗み聞きに。

どうもお隣は二人暮らしらしいのだが、夜中に喧嘩を始めたと思

つたら、片方がもう一方を殺してしまったらしい。恐ろしさに体が震えたが、やはり無視して寝ることは出来ないのだった。

「勿体ないよ」

「滅多にないチャンス」

「リアルタイム殺人」

「今なら知るの自分だけ」……。

ああ、寝られない、寝たくない。本当になんて希少な体験だろう。寝て朝になったら世間のものになってしまふんだ。俺だけの秘密じゃないんだ。貴重な一晚を無駄にしてなるものか。後で後悔したくない。

そうだ、折角だから、手伝いに行ってみよう。どうせ眠れないんだ。

素敵な夜になりそうだ。

38・prevent(後書き)

「
」を妨げる「
」
「
」を防ぐ「
」
「
」させない「
」。

その邸の息子がある日帰宅してみると、家の中の様子が何か妙だった。物足りない、落ち着かない感じた。そこで母に尋ねてみると、「お父さんが骨董品を売ったのよ」

と言う。言われてみれば、リビングの剥製や絵画も、和室の掛け軸も重文級だという壺も消えてなくなっている。

「なあに、あんなものは持たんでもいい。博物館で保存すればいつでも見られるんだ」

父親はそう言って悠々と笑って見せた。息子はしばらく新しい室内風景に戸惑っていたが、すぐに慣れた。

翌週、再び物が減った。今度は華美な絨毯やテーブルの飾りなど、装飾品だった。

「なあに、あんなものは役に立たん。家具というのは使う者の要求に応えれば、ただそれだけで良いのだ」

父親は室内を見渡して、満足げな笑みを浮かべた。

その翌週、何百という服飾品や靴と共に、家具の幾らかが消えた。家族は憤慨したが、

「なあに、あんなものは季節に四、五点とフォーマルのものがいくらもあればいいんだ」

と、父親は断言して、反論を受け付けなかった。

そんなふうにして家の中がどんどん簡素になってゆき、終いには邸もいらないうので、手伝いを解雇して家族五人、3DKのマンションに越した。

何しろ必要最低限のものしかないので、退屈を紛らわすのも一苦労だった。新聞のクロスワードを解いたり、トランプで大富豪をやってみたり。

あまりの変わりように、とうとう息子は父に尋ねた。

「父さん、儉約にしたってどうしてここまでやらなきゃならないの

た」

すると父親は、誇らしげに言った。

「俵約ではないぞ。私はただ、物を持たないことにしたんだ。物欲などは人生を重くするばかりだからな。人間、本来なら旅行鞆ひとつもあれば生きていけるんだ」

皆が分かったような分からないような顔で聞いていると、父親は続けてこう言った。

「まあ、だからといってお前達は捨てられないな。家族という荷物には、大抵の男が背負うものだ」

そしてしたり顔で胸を張った。しかし、誰も感極まった顔などしていない。白けた空気が流れる中、母親が静かに席を立ち、父親の居室から黒い重厚な箱を持ってきた。

父親の目の色が変わる。

「そう…そうなの。立派な心がけですわねえ、あなた。でも、じゃあこれは何かしら」

「お、お前、重くないかね。下ろしなさい」

「ええ重いですとも、立派な金庫ですものね。そうして中身は、…この通り、あの邸も家具も、そっくり同じ物が二つは揃いそうな財産じゃないの」

母親は金庫を抱えると、地上二十階のるべランダに近づいた。

「な、何を」

「みつともないわよ、あなた。中途半端は大嫌いなもの」

金庫を肩に担ぎ上げ、大きく振りかぶると、気合いととも空中へ。

風を切りながら真つ逆様に落下する金庫は、大量の札束を撒き散らしながら、植え込みに突っ込んだ。

「母さん、何てことするんだい、あの金があれば…」

「黙らっしやい！」

父と息子達はぴんと背を伸ばした。マンションの外は大騒ぎ、皆が札束に群がっている。

母は、にこりと笑ってこう言った。
「さあ、あなた。これが本当の自由よ」

39・reduce(後書き)

「」を減らす、「」

「」・A to B (AをBにする、変える)
「」

40・mistake

ある女が不幸な事故で死んでしまい、閻魔様の前に引き出されま
した。

ふむ、貴様は爆死したとあるな。車かね、ガスかね、それとも
ロケットランチャーかね。

「時限爆弾です、閻魔様。密室で私と彼氏の二人きりで、脱出でき
なかつたんです」

爆弾は止められなかったのかね。

「私は縛られていて、彼だけが辛うじて爆弾に届きました。落ちて
いた金属片で、コードを切ろうとして…赤と青があつたんですが、
彼は青を切つたんです」

それは何故かね。

「はい。もう一蓮托生の状況でしたから、運に任せようと思って。
『私の好きな花の色を』って頼んだんです。私、彼はきつと赤を切
ると思いました。私の好きな花は薔薇でしたから。けど、私がこっ
そり育てている薔薇は青いんです。ほら、品種改良された、新しい
薔薇。彼はそのことを知らないと思つてたのに、いつの間にか知っ
てたんですね。でもいいんです、どうせ賭だつたんですから。ねえ、
彼も近くにいるはずですよ。会わせてくれませんか」

駄目だな。

「どうして？」

貴様が地獄行きだからだ。

「えっ…ど、どうしてですか？何が悪かつたんですか、私大きな罪
なんて何も…」

何を言う。無理心中は大罪だ。

「…え？」

それに、この儂に嘘をついた。罰は免れぬと思え。

「ま、待って下さい！何の話……」

とぼけるでない。今時、片方のコードを切ったら止まるなどという芝居じみた爆弾があるものか。貴様は密室に男を閉じ込め、自分は縛られたふりをして、男が青いコードを切るように仕向けたのであろう。

「そんな、言ったじゃないですか！彼が青い薔薇のことを知っているかなんて……」

黙れ！誤魔化せると思うたか。雑談に紛らせ、男に青い薔薇の話をしたのは貴様であらうが。大方、その男の注意力を己への愛情とし、殺してもらおう形にしたかったのだらう。全く小癪な……連れて行け！

「ご、誤解、誤解です！じゃっじゃあせめて彼と一緒に……一緒の地獄に！お願い、連れてきて、連れてきなさいよ、早く！ねえ、来てよ、私はここよ！一緒に落ち……い、いやあああ……」

やれやれ。とんだ勘違いもあったものよ。

ちなみにこのあと、男の方は情状酌量で軽い地獄で済んだとか。めでたしめでたし。

40・mistake(後書き)

「」を誤解する「」、
「」を間違える「」。

ポケットの中で携帯が振動し、メールの受信を知らせた。遙は送信者を確かめもせず、手を突っ込んで電源を切る。心の中で小さく、邪魔をするなと毒づいた。

隣の受験者が、一瞬こちらに目をやり無表情に戻す。自分と同じく、この人も緊張しているのだろう、と遙は思った。

大学を辞めて、芸能専門学校生になる。そう言ったとき、回りは猛反対した。特に親などは勘当しかねない怒りようで、だからせめて、学費くらいは自分で稼いでいくことに決めた。

軽侮の目、不審の目、陰口にささやき笑い。けれど遙は笑われることより、後悔を抱えて生きることが嫌だった。

大人気ない、のは自覚している。だから人が離れてゆくのだろう。頼りは、将来自分が作れるかもしれない、見知らぬ人の笑顔だけだった。

ここまで辿り着いた。

回りの受験者に比べれば付け焼き刃かもしれない。だが、独りでここまで来たのだ。遙は奥歯を噛みしめた。

(つと、落ち着こう)

小さく頭を振り、鞆の中に常備しているミン イアを探す。と、手先に入れた覚えのない紙袋の感触があった。

「……………」

中に入っていたのは、小さな手縫いのお守り袋と、手付かずらしい何桁という金額の預金通帳だった。手の中でめくると、折り畳まれた紙がはらりと落ちる。

震える手で開くと、たった一言、

『頑張れ。』

そう、書いてあった。

41・prepare(後書き)

「」の準備をする、「」
「」を用意する「」。

え？よく育ってる？

そうでしょ、よく話しかけたからね。話しかけるといって言うじゃない。なんでも声の調子とかで喜怒哀楽の波長があるんですけどね。凄いわよね、満足に動けもしないのに言葉がわかるなんて。だけど私、話しかける内容が偏ってるのよね。

だって、生活しているとストレスって溜まるじゃない？こういうのに向かつて独り言って、大抵そういう時でしょ。だからもう、「死ね」とか「消える」とか「嫌い」とか「地獄に落ちろ」とか、そんなことばかりブツブツブツブツ…。

ほんと、こんな負のオーラまみれでよく育ったと思うわ。そのせいかしら、何だかほら、歪んでるのよね。色も悪いし、愛情なんて欠片も受けてませんって感じ。あ、もちろん栄養はあげたのよ？でも、そうね、もう少し大きくなったら危ないんじゃないかしら。きつと仕返しされると思うわ。私、憎まれてると思うのよね。わかるのよ、自分の手で育てたんですもの。

そうね、もしかしたら殺されるかも。まあそれもいいわ。どうでもいいもの、色んなことが。

…え？やだあ、冗談じゃないわよ。よく見て。ほら、まだ三歳なのに死んだ魚みたいな目…何？人食い花？何の話よ。あら、違ってます。観葉植物の話なんかじゃないの、そんなの気持ちなんて知らないわよ。

私が言ってるのは、植木鉢の後ろにいる子の話。私の息子の話よ。ね、よく見たらちつとも子供らしくないでしょ。全然喋らないし、泣きもしないんだもの。やだもう、ずっと植物の話だと思ってたの？おかしいと思った、人の子を物扱いみたいな言い方するから。

あ、そうだ。この子、賢いから気をつけた方がいいわよ。大抵の言葉はもう理解できるみたい。あなたの顔も覚えたんじゃないかし

らっ？

あら、帰るの？忙しいのね。じゃあ、明日の入園式でね。

42・encourage(後書き)

「はげます、」
「を促進する、」
「AttoV(AにVする)の略め。

「証明？簡単ですよ」
彼女はそう言って、腕を伸ばした。

*

一人の男が、左腕骨折で入院していた。横断歩道で車にぶつけられたせいだ。車が悪いのではなく彼の信号無視がいけなかったのだが、といって無理に渡ろうとしたわけではなく、ぼんやり歩いていてうっかりしたのだった。

そんな男は今、病院の屋上で手摺の外側に立ち、ビル風に煽られている。

「やめなさい、Hさん！早く戻りなさい、本当に死にますよ！」

「うるせえ！だから死ぬつってんだろ！」

病院のスタッフや騒ぎを聞きつけた患者達に囲まれて、彼は半狂乱に喚き散らしていた。

どうやら、容姿や境遇や人間関係に恵まれず、この先の人生に希望が持てない、だから死んだって構わない…ということらしい。

「やめるんだ、肉親が悲しむぞ！」

「いねえよ」

「君を愛している人が…」

「いねえ！」

「生きていれば君がまだ知らないこともたくさん」

「いらねえっ、そんなもん！」

男も必死だが医師達も必死だった。なんとか言葉を尽くして翻意を促すのだが、男は頑として聞かない。

「お前ら、死ぬな死ぬなって、本当に思ってる奴一人もいねえだろ。俺のことはどうでもいいんだ。死のうって奴をほっとくと後味悪い

もんなあ。だろ？『自分、いい人』って思いたいんだろ？入院して一週間の、ほとんど喋ってない俺をよ…俺自身をよ、この病院の誰が！この世の誰が気にするってんだよ！」

と、その時だ。群衆の中から、入院患者らしい、一人の女が歩み出した。

「私です」

毅然と言う。

「私がいいます。あなたに死んで欲しくありません」

「ほおー、理由は何だよ。証明してみろってんだよ」

青ざめた頬に涙を流しながら、男は毒づいた。すると女は、群衆をちよつと振り返り、柔らかな微笑を浮かべてから、男に向かって歩き出した。

皆がはらはらしながら見守る中、女は手摺のすぐ近くまで歩み寄った。そうして二言三言交わし、つと左手を伸ばすと、男の腕に巻かれたギブスをしつかりと掴む。

説得できたのか　そう皆が思い、胸を撫で下ろした瞬間だった。「うらああああっ！」

雄叫びを上げ、女が右腕を振りかぶった。思い切り勢いをつけた、絵に描いたようなテレフォンパンチ　が、足場が悪く自由を奪われた男が、それを避けられる筈もない。

「おげええええっ!?!」

頬にクリーンヒット。男はバランスを崩し、足を踏み外した。落ちる。

誰もがそう思い、目を覆った時、信じられないことが起きた。

男の体が、宙に浮いたのだ。いや、正確には、女によって空中にぶら下がり、そのまま持ち上げられたのである。

「せいっ！」

掛け声と共に、男は一回転して手摺のこちら側に戻り、床面に叩きつけられた。

呆然、何が起こったのかわからず、群衆も男もポカンとしている

と、女がつかつかと男に歩み寄り、一枚の紙切れを差し出した。六桁…否七桁の数字が記された借用証である。事態を飲み込めない男に、女は言った。

「あなたがウチの者から借りたお金です。これを回収できなくて、その人、親分さんから酷い目に遭わされたんですよ。だから私、同じことしてやるうかつて思ったんですけど…」

借用証が、音を立てて裂けた。二枚が四枚、四枚が八枚、見る間に粉々になる。

「やめました。あなた見てたら馬鹿馬鹿しいから。さっきの一発で許してあげます」

さっと立ち上がり、尻餅をついたままの男にっこりと笑いかけた。

「体に気をつけて下さいね。人生嘗めてんじゃねえぞ、糞餓鬼が」

全員が目を瞬いた。

再び目を丸くした時には、女は穏やかな笑顔に戻っている。そのまま、爽やかなること風の如く屋上から去っていつてしまった。

奇妙に静まりかえった中、男がぼつりと、

「……………イイ……………」

呟いたという。

その後、彼女を追いかけると聞かなかった男を取り押さえるのに、病院スタッフはひとしきり苦労した。なにせ振り回された左腕の骨折が随分悪化してしまっていたもので、彼はさらなる入院を余儀なくされたのである。

二カ月してようやく退院した彼がどこに行ったか、誰も知らない。それとは別に、ある関東系ヤクザの愛娘のボディガードが一人増えたことが、一部では少しだけ噂になったという。

43. prove (後書き)

「 \vdash だとわかる」、
「 \vdash を証明する」。

ふわふわと、淡い木漏れ日が揺れる。新緑の枝葉を透かして、透明な風が微笑する。

こっち。こっちだよ。

浅黄色の浴衣が、栗鼠のように跳ねて前に行く。待ってよ、と掛けた声は、空気を揺らさずに届いた。

あははっ。早く早く。

本当に、溶けるような、森の色だ。葉の囁き、虫の笑い声、獣達の息遣い。溶けて混ざりあって、却って静かな、眩い静寂だ。

ほら、こっちこっち。

駆けながら、なんだかうつとりとする。怖いような、けれど遠くへ、もっともっと、どこかわからない所へ。

ここだよ。

ほう、と、誰が浮かんでいる。三つ、四つ、沢山いる。嬉しそうに、満ち足りたように、皆一緒になって手をつないでいる。

ほら。

その子が笑って手を伸ばす。

来て。一緒に よう。

光がとろけて、蜜になる。蜜があたりを浸している。甘い、甘い蜜。ふらりと手を伸ばした。

「…はる…!!…貞治!」

突然、殴られたような気分で目を覚ました。顔の真ん前に、兄の切羽詰まった顔があり、それがほっと緩む。

「…ああ、よかった…!」

「どうしたの、兄様?」

すると今度は烈火の如く怒り出した。

「馬鹿！独りで二つ谷の森に入るなど言っただろう！もう少しでお前、妖怪に攫われちまうとこだったんだぞ！」

その話を聞いてもしばらくは怖さなど感じなかった。ふうん、と思っただきりで、それも面白かったかな、と言おうとしたけれど、怒られそうをやめた。

今ではまるで夢のような、昔の出来事だ。しかし、現在も時々、眠っている間に彼らが会いに来ることがある。向こうはちっとも変わっていないから、なんだか寂しい心持ちになる。

最近では、枕元に蜂蜜をおいて寝ている。彼らの一番の好物だ。

44・join(後書き)

「」に参加する「、」
「」に加わる「、」
「」をつなぐ「」。

「お嬢さん、どうしたの？待ち合わせ？こんな時間に独りじゃ、お店追い出されちゃうよ」

親切顔に声を掛けてきた女性を、少女は思いきり睨んで席の隅へ縮こまった。女性が苦笑する。

「やだなあ、誘拐とかじゃないって。ずっと一人だから気になっただけ。ねえ、お父さんとかお母さんは？」

長い沈黙の後、やっと聞き取れるような微かな声が呟いた。

「……お母さん、トイレからすぐ戻るの……約束したもん」

「お母さん、いつおトイレ行ったの？」

「お昼御飯のあと……。でもお母さんは食べてない」

「そっか」

女性はにつこり笑うと、少女の向かいに腰を下ろした。少女が警戒の色を濃くしてますます睨んだが、一向に怯まない。

「ねえ、友達にならない？私が店員さんと話して置いてもらって、あなたはここでお母さんを待つ。大丈夫、私ご飯おごるし、夜はこのソファで寝ればいいじゃない。毛布なら持つてるし。どう？」

一日二日は、少女は口もきかなかった。女性がいつの間にか注文し、運ばれてくる料理を恐る恐る口にしてはいたが、その間も警戒心は剥き出しだった。それが一週間も経つと次第にほぐれてきて、自分から話すようになり、笑顔も少しだが見せるようになっていた。そのうち店員にも可愛がられるようになり、すべては問題なく進んでいた。

ただ一つ、母親がいつまで待っても現れないことを除いては。

「もう、いいんじゃない……？一旦お家に帰って待つとかさ」

何度か女性がそういつて促したが、少女は頑として首を縦に振ら

なかった。

ひと月経ち、ふた月が経ち、半年経っても母親は来ない。少女は待ち続け、女性は見守り続け、そうして一年が経った頃、一人の男性が少女の前に現れた。

「今まで、悪かった。待たせてしまったね。言えた義理じゃないが、俺は君の父さんだ」

女性が無言で席を立つ。

「どこ行くの？」

少女が問うた。

「お手洗い。…大丈夫だよ」

女性が振り向き、笑顔で答える。男性が少女の視線を追い、不思議そうな顔をした。

「…一体、誰と話してるんだい？」

少女は驚いて男性を見、また女性を見直した…と思ったが、彼女の姿は既にない。消えてしまったのだ、まるで煙のように。

先程まで女性が立っていた場所には、大量のレシートが山と積み上げられていた。

それから月日は流れ、少女はいつしか大人になった。大学を卒業し、この春、就職することも決まっている。

「新しいスーツ買って、お父さんがくれたの。これ、お小遣い」
いつかのファミレスで、少女は一人、誰もいない場所に話し掛ける。もちろん彼女にも、何も見えてはいない。

注文した料理が運ばれてきた。少女が対面の席を示すと、店員が不思議そうに、見えない客の前に皿を並べる。

「沢山食べてね。今日は私のおごりだから」

少し寂しげに、少女が笑った。

45・treat(後書き)

「」をあつかう、「」
「」を手当てる、「」
「」楽しみ、「」
「」喜び、「」
「」おじり。

どんな矮小な存在でも、結集すれば強大な存在に対抗する力になりうる。傲慢で一方的な権力の行使に黙ってばかりではないのだ。

彼らはあるひとつの目的に向かって、一致団結した。隙無く目を配り、油断を発見したならすぐさま行動に出た。結果、自分たちを迫害していた連中に対し、組織的にダメージを与えた例は数え切れない。勿論、失敗も多い。グループ立ち上げの前に、基盤となる土壌が消えてしまったり、安易に機会に飛びついて仲間が犠牲になるなどとはもはや日常茶飯事であった。

だが、諦めることだけは、彼らはしなかった。そしてこの先もそうだろう。生き物が存在する限り、たとえ形を変えようとも彼らは滅びはしないのだ。

「お母さん、またカレー腐ってるよお」

46. establish (後書き)

「
」を確立する、
「
」を設立する、
「
」を確定する、
「
」を立証する。

彼は、三千円分のJR切符を落としてしまったことに、改札口で気付いた。予定の便まであと何分もない。買い直すのも、懐具合からいって厳しかった。

「そんなわけなんですよ駅員さん。ここはネ、ちょっと見逃してくれませんか」

「いえ、お客様。買い直して頂けませんと」

「切符を持ってたのは本当なんですよ！」

「駅員さん。彼の言ってることは本当ですよ、僕らも一緒に買ったし」

駅員の目が鋭く光った。

フン、どこの誰か知らないが…作戦を誤ったな。犯人と仲間であると打ち明けた時点で証言の確実性は失われたも同然！そして仮に、赤の他人の親切だったとしても…

男が眼鏡の奥の三白眼を細めた。

余計な真似…！ますます俺が切符を持っていたことへの信憑性はなくなる…庇いたくなる俺の人柄というプラス要素は、全く無意味…結局は言い訳に嘘を被せた形…印象は悪化する。ならば…

ならばどうする？友人の前で友情を裏切るか？「彼らとは浅い付き合いで、自分のことを庇う理由はない。従って彼らの言葉は本当だ」とでも言うことで。だが、甘いな…。

ああそうさ。あんたはこう言うだろうよ、駅員。「好きでもない相手なら尚更、トラブルに巻き込まれる事を避けて庇いにくるはず。三千円分という距離を同行しようというのだ、お前を見捨てていくわけにはいかない事情があるに違いない」と。

両者の思惑が交錯し、一瞬の火花を散らした。この間、実に二秒。後ろの「友人達」はきよとんととして眺めている。

つまり、ここで俺が取るべき手は…

犯人が用いてくる手段は…
彼はくるり、と振り向いた。

「ごめん、金貸して！」

顔を見合わせる親切な「友人達」。彼は実際は顔を合わせたこと
もない人間から、敢えて駅員の前で金を借り、堂々と切符を買い直
した。

「急ごうぜ」と改札を抜け、駅員からの死角に入った所で彼が超
ダッシュしたことは言うまでもない。

これにて、一件落着である。

47・relate(後書き)

「関係がある」「
」を関係づける」「
」を述べる」「
」を話す」。

車内は静かだった。夕方の高速道路を疾走するエンジンと風の音だけが、細波のように空気を満たしていた。

家族仲が悪いというのではない。気まづくなる要因があるわけでもない。ただ、それぞれが胸中に言葉を抱えていて、それを口に出せないだけだった。それに、久し振りに集まったせいもある。

原因は、二人で暮らしていた夫婦のところに突然飛び込んだ知らせだった。

下の娘が、死んだかもしれない、という。

確定でないのは向かう先が身元確認だからだ。なんでも建物丸ごと焼けた火事に、巻き込まれた可能性があるという。

知らせを受けたとき、父親は握り締めた拳を畳に叩きつけた。

「…馬鹿娘が…！」

母親は何も言わず、すぐさま、都心にある上の娘の職場に連絡を取った。

そうして、久方ぶりに家族三人、揃って車に乗っている。全員が黙り込んだまま。

母親が、何度目だろうか、鞆から下の娘の写真を取り出して眺めた。上の娘は視線だけをちらと動かし、また車窓から外を眺める。

『姉さんには言ってもわかんないし』

妹が家を出るときの、最後の台詞が繰り返し蘇った。

真面目で成績のいい、素直な姉。何を考えているか分からない、じゃじゃ馬の妹。周囲はもちろん両親も、正反対の彼女らを事あるごとに比較した。

お姉ちゃんはいいい子なのに。

姉さんみたいなのがうまく生きていけるのに。

無理もなかった。妹の破天荒ぶりといったら、全く常軌を逸して

いたと言つてもいい。やたらと大人に逆らうのはまだ序の口、危ない人に着いていたりやくざな火遊びを覚えてきたり、まるで我が身も家族も省みない非常識な娘だった。中学を出ると、いつの間に算段していたのか、遠くの専門学校に通うといつて身一つで飛び出してしまい、それきりだ。便りの一つも寄越さず、消息不明となった。

妹の去り際、理解できない、どうしてだ、と姉は責めた。妹は一瞥すると、何とも言えない笑みを浮かべて、捨て台詞を吐いて、あっさりとう去つていった。

理解できなかったと言うのは、半分嘘だ。本当は少し、妹が羨ましかった。だがそんな感傷を認めることを、自分自身が許さなかったのだ。

風が湿っている。火元は昼頃からの雨ですっかり消えたようだ。今はただ、真つ黒に焦げた四階建てのビルが、悄然と雨晒しになっていた。

「……」

姉は、左の手首をきつく握った。聞けば、妹が火事に遭ったのは建物の三階で、雀荘になつていたという。博打好きだった妹のことだ、大方火の手に気付くのが遅れて逃げそびれたのだろう。

唇を噛んだ。

それ見ろ、馬鹿野郎。

そう罵つてやりたかったが、唇が震えて開けなかった。

「警察の方は……」

母親が呟く。見回してみても、昨日の今日だと言うのに制服巡査などは見当たらない。

「いや、署の方に行けばいいんじゃないか？」

父親も、どこかぼんやりした様子で呟いた。遺体を確認することなど、さして必要ではないという口振りだ。三人が三人とも、どこかで確信していたのだった。ああ、あの娘はここで……と。

と、そのとき、建物を見上げる三人に声が掛けられた。

「あのう、すみません」

父親に電話してきた声だった。振り向くと、粗末なスーツを着た男と、その後ろに帽子を目深に被った女が立っている。

「あつ…警察の方ですか…？」

一拍遅れて、はつとして姉が問う。その目は未だ、虚ろな光を湛えている。

男の後ろの女が、肩を小さく揺らした。

「……ぷつ。く…くくくつ」

その声は初めは小さく喉を鳴らすように、やがて段々大きくなり、ついには女は腹を抱えて笑い出した。

三人が呆然としていると、女は被っていた帽子を無造作に投げ捨てる。

「もーっ、頼むわ面白すぎ。騙されんなよお」

「…あ」

一瞬の沈黙の後。

「あああああッ！」

異口同音に、大声が上がった。

「な…な…な…」

「お前っ」

「まーまー怒らないの」女は両手をひらつかせて鎮める身振りをする。「大体さあ、よく考えたらわかることでしょ。長いこと連絡つかなかった私が黒コゲで見つかって、警察がそっちに電話できると思う？ フツー無縁仏だって。それにホラ、この建物、周りキレイっしょ。野次馬もいないし。だって火事あったの一週間前だもん。ニュース見てないの？」

ぺらぺらと話し続ける女の前で、開いた口が塞がらない三人。やがて、姉が辛うじて口を開いた。

「あん…あんっ」

「何、エロい声出して」

「あんだねえっ！ ふざけないでよ、いつもいつも…何で素直に連絡とれないの？ 馬鹿じゃないの？ こっちがどれだけ…」

「そっか、心配してくれたんだ。ありがとう」

思いのほか、無邪気な笑顔だった。毒気を抜かれて言葉に詰まる。「姉さんは、優しいし真面目だし、責任感もあるし。ほんと私に足りないもの全部持つてて、凄いと思うんだけどさ」

「…何よ」

「んー…もうちょっと頭、柔らかくしてもいいんじゃない？ って思う」

雨は止んでいた。姉はゆっくりと傘を閉じ、柄を握りしめる。思い切り振り回すと水滴が散って、妹はそれを身軽に避けた。

「何よ…！ あんだなんか何が分かるのよ！ 化粧もしないで、そんな貧乏臭い男連れて！ 大体何なの、なんで今更こんな真似するわけっ？」

妹はきよとんととして、それからあっさりと答えた。

「いや、久々に会いたくなってさ。あと彼氏じゃないよ、ただの雀友」

「…そ…」

そんな理由で、とか何とか反論しようとしたが、力が抜けてしまつて口を開くのも億劫になってしまった。後ろの両親もどうやら同じらしい。妹だけが、ただひたすら自由でいるように見えた。

馬鹿馬鹿しい。

何が、というでもなく、そう思う。妹が笑った。

「さて、折角だしさ。みんな雀荘でも行こうか！」

48・compare(後書き)

「
」を比較する「
」
」をたとえる「
」
」匹敵する「
」
」比べられる「。

一匹の獾が居た。

夢を喰うことに飽きたその獾は、知識を喰うことにした。人間の中の覗き、そいつの知っている文字列だの感情だの「もの」を全部喰ってしまう。これを繰り返すと、夢とは比べものにならないくらい膨大な、体系立った物事を知ることが出来た。

時たま、喰われたものを丸ごと失って人形みたいになってしまう人間もいたが、知ったことではない。獾は、なんだか頭の中がスッキリハッキリしていくので、楽しくなつてどんどん知識を喰った。人間だけでなく、そのうち犬だの虫だの、本だのからも喰うようになる、見える世界が何十にも色を変えた。

喰うに従つて、獾は考える時間が多くなつた。脳味噌がいつも高速回転して、すると不思議に体が軽く、けれど大きくなつて辺りを覆うような気分になつていく。広がった体で、獾はますます早くなりますます多く、あらゆるものを喰らつた。

とつとつ獾は世界中の知識を喰らい、あらゆることがわかるようになった。まるで星をすっぽりくるんでいるかのように、何もかもが手に取るようにわかる。水の流れを見るごとくに、未来のことまでも大体わかる。それこそ、一匹の蟻の死から国家戦争の行方まで神様というのはこんな気分ではないか、と獾は思った。

しばらく神の視点を楽しんでいた獾だが、そのうち妙な気分になった。

はて、俺は誰だつたかな？

あまりに突飛な感覚だつたので、獾は驚き慌てて、いつもの知識更新作業に入ろうとした。ところが、それすらも今や何の苦勞も無しに出来るようになっていた。久々に人間の夢でも喰おうと思つたが、目新しいものは何もない。困り果てた獾は、地球の外へ手を伸ばした。尤も、月や、火星や、太陽のことは殆ど見てきたようにわ

かっている。もっと遠く、もっともっと遠くへ。

こうして一匹の獾は、その姿を完全に消してしまった。

49・spread(後書き)

「
」を広げる、
「
」を広がる。

俺の彼女は理屈屋だ。彼女みたいな美人と俺が付き合えるのも、男どもがその性格故に彼女を敬遠していたからだろう。何しろ彼女と来たら、付き合うことを「相互に暗黙の条件付けをする契約関係」、デートに遅れて言い訳すると、「遅延の原因解決よりも遅延により生じる損害への考察が現時点では優先されるべき」ところなのだ。最初の内は勿論戸惑い、腹も立てた。堅物の、扱いにくい、鉄面皮女だと思った。同じ日本人なのに、言葉の壁に阻まれて本心が分からなかったのだ。

ところが長く付き合う内に、理屈っぽさは誠実さ、淡々とした饒舌はある種の照れ隠しではないかと思うようになった。事実そうだったのだし、その頃には俺も、彼女に合わせて理論的に順序だてて話すことが苦でなくなっていた。今ではすっかり慣れて、半ば言葉遊びのように彼女との会話を楽しんでいる。話せば話すほど、理論武装した彼女の内面が見えて来るようで面白いし、何より愛しさが増していくようだった。

ある日、俺は思い切って彼女に提案した。

「あのさ…俺たち二人の契約関係に法的規制を加えて、公文書化したいと思うんだけど…どうかな。問題点や手続きの詳細については、こちらの文書を参照してくれたらいい。その上で、意見を聞かせてくれ」

言いながら、思わず姿勢が畏まった。何のことはない、俺も遠回しで理屈っぽい言い回しの方が楽だったのだ。結婚してくれないか。その一言があまりに照れくさかった。

が、ひとつだけ。これだけ理屈抜きで言いたいことがある。

「幸せになりたいんだ。お前と二人で」

彼女は、いつも端正で崩れない面を少し俯けた。

「…その、問題への言及を、私は長期間…っ」

耳まで真っ赤になっていた。

50・refer(後書き)

「 - t o A) 「 A を指示する、

「 A に言及する、

「 A を参照する」。

「お、支給帰り？」

「ええ」

「どうしたの、テンション低いね」

「いやあ、何ですかね。文句言う筋合いじゃないんですが、最近味とか質とか落ちてるんで…」

「あー、そうだねえ。容器も安物だし。保存状態は確かに悪化してるかなあ」

「でしょ？ 正直、まあ慣れましたけど、なんか今食事がちっとも楽しみじゃなくなってる」

「やっぱアレだね、自給自足時代が一番良かったねえ」

「ホントですよ。食い物の良し悪しを自分で選べますし、何より新鮮ですからね。あの頃はホント、食事の度にウキウキしたもんです」
「ま、仕方ないんじゃない。乱獲しちゃだめだって言うんだからさ。大体このご時世、好き勝手取って食ったら向こうから文句出るですよ」

「隠れてやつてもすぐ見つかるでしょうしね…。おまけに変人変態、犯罪者扱いでしょ」

「まあ、向こうにしてみたら無闇な『殺し』に見えるんだろうから」
「そこは、だって、食物連鎖って奴ですよ。ていうか連中が傲慢なんですよ、自分たちが正義みたいな顔しちゃって。…あー、腹減った」

じゅるるる…。

「あーあ、不味いなあ。健康な食事がしたい」

「いやあ、俺はもうキツパリ諦めてるけどね」

「えっ、何ですか？」

「だってホラ、最近の人間ってめったに処女いないから」

51・supply(後書き)

「
」を供給する「
」を支給する「。

働くことが人生だった。沢山の仲間達と、毎日毎日利益をかき集めて、トップを始め自分たちの巢を肥やし、組織を次代へ繋ぐためにひたすら邁進した。休む時間などある筈がない。勿体なくてそんなものは採れない。自分たちの代が終われば、組織に尽くした一生に満足しながら死んでいくだろう。築いた財産が、自らの人生とまだ見ぬ息子等の未来を豊かにしてくれる。

それでよかった。

*

着のみのままがスタイルで、ポリシーだ。生来、どこかに落ち着くということが出来ない性分で、あちらこちらを気ままに飛び回っている。荷物はいつも鞆ひとつで、生活に必要なものが少々と楽器がひとつ入っている。立ち寄った先で奏でると、そこらを歩いているひとが足を止めて笑顔になってくれる。時々ご馳走になれることもある。が、大抵一度きりの出会いだ。要するにふらふらしているだけなのだが、自分じゃ自由人のつもりでいる。死にかけることもあるが、毎日楽しくやっている。

しかし本当に、ものを生まなかったし持たなかったなあ。

*

「俺の番、みたいだわ…じゃあな。女王万歳…！」

「あつ、ああ…」

「うう寒い、俺は死ぬのか？俺は…うう」

「あは、天使様だ…お迎えが来た…」

「嫌だっ！俺はまだ生きるっ！助け…て…」

「さようなら…」

「組織に栄光あれ…」

「あああ、みんな死んでいく…何だよ。何なんだ、この気分は？

うつ…目が霞む…い、嫌だ。俺は何も、何もしてない。まだ何もしてない！こんな所で…寂しい、苦しい…助けてくれえっ」

「どうしたんだい、黒いの。騒がしいな」

「あ…？」

「静かにしてくれ。歌が聞こえない」

「何だてめえ、爺…最近こころで弾き語りなんかしてた迷惑野郎じやねえか…へっ、とうとうクタバるのか。ざまあ…うつっ」

「おや。アンタも死ぬのか」

「ぐ…黙れっ！お前なんか何がわかる！社会不適合の、非生産の、何も持たない屑に何がわかる…。俺はなあ、うつ。俺はな、働いて働いて、稼いで貯め込んで…なのに何で今、全部捨てなきゃならん？死ななきゃならんのだ!？」

「………」

「無一文のお前にはわからんかも知れんがな！俺は…い、嫌だ。まだ、死にたくないんだっ…」

「………往生際が悪い兄さんだ。ちよいと黙りなよ」

「……？」

「ほら、歌だ」

「…聞こえねえよ、そんなもん。てめえの幻覚だ」

「まあ、なんでもいいさ。アンタにや聞こえないだろうっしな…」

「賑やかな歌だ…いっぱいのが歌ってるんだ」

「…なあ。俺…お、俺を、助けてくれよ…」

「アンタは何も持つっちゃいない。死ぬときは誰も、何も持ってないもんだ。独りで、裸一貫…そうだろ」

「…!」

「だけど、まあいいさ。…掌がな、なんだか温ったかいんだ。俺は
幸せだよ」

「……………」

「……ああ、いい歌だ……」

「……蟋蟀さん」

「なんだい、蟻さん」

「…手…握ってても、いいかな」

「…いいとも。ほら」

「…ありがとう。」

52・gain(後書き)

「」を得る「」、

「」をもつける「」、

「」を増す「」、

「利益」「

増加」。

小学生の時なんですが。母の時計に、石を落として割ってしまったんです。癩癩の強い母が、その時は黙って悲しそうにしててね……今でもハッキリ覚えてますよ。

家かなあ。いや、俺は解体業者だからさ。でも嫌なのが、バラす時にさ、長年住んでた年寄りなんかグイグイと見てるわけよ。まあ、こっちは頼まれ仕事だからね。仕方ないんだよホントに。

ガツコの窓とか？ 更衣室の屋根？ 塀ンとこにこう付いてる、入れないようにするヤツ？ あーとーはー……あ、ババアの眼鏡とか糞壊しまくってるけど。何、あんたの眼鏡も壊したげよつか。

うーむ、一口には言えませんが。人間生きてれば、何かしら壊すでしょう。印象的なものと言われたら……婆さんかな。儂のために死んだようなもんでね、悪いことをした……。

変な質問だな。何を調べてるんです？……まあいいか。俺はね、少し前に人の命を壊してきましたよ。何、合意の上だったんだから、外野にとやかく言われる筋合いはないんだ。

おや。久し振りじゃないか、元気でやってたかい？ 何だつて？ ハハハ、心理学でもやってるのかい？ そうさな……俺か。俺がやっちまったのはな、お前だよ。お前はもう壊れちまってんだ。随分昔にな。何、昨日一緒に遊びにいった？……そこから先をよ。思い出したら……いや、何でもない。

どうしたの、そんな顔して。え、僕？ 僕はそんな悪いことし

ないもん。クラスの健ちゃんはいっつも怒られてるけど、僕は上手く気をつけてるんだ。…嘘じゃないもん！ ふん、僕おじさんのこと嫌いだな！

あらまあ、やっと来る気になったのかい。で？ 何か言いたいことがあるんだろう。……はい、よくできました。さ、母さんと一緒に帰ろうね。ほら、泣かないの。ほんとに弱虫なんだから。

53. destroy (後書き)

「」を破壊する「、

」を殺す「、

」を滅ぼす「。

「柔らかな頬、透き通る髪、細く美しい声。それからこの靴が履ける足」

これが、青年が出した条件だった。

女達はたちまち、髪を染めボイストレーニングをして、青年の元へ押し寄せた。我先にとプロポーズする女達を、しかし青年は軽くあしらひ、次から次へと追い返した。肌が荒れている。髪色が違う。靴が入らない。理由は幾らでもあった。証拠写真を取られた女達は、舌打ちしながらすくすくこと引き返した。一世一代の玉の輿を逃した、と。

アプローチしてくる女の列は引きも切らなかつたが、その勢いも、幾月がすると下火になった。というのは噂で、青年は結婚する気などなく、ただ女達をからかっているのだ、と囁かれ始めたからだ。日一日と青年への訪問と連絡が減って行くなか、ひとりの審査役がある事に気付いた。

列の中に、何度も訪問を繰り返す女がいる。写真チェックをしているためピーターが混ざるはずはないのだが、確かに同一人物だった。まさかと思い指紋鑑定もしたため間違いはない。ただ、その都度容姿が激変していたため、気付かなかつたのである。要するに痩せ、肌が若返っていく。次第にはなく、劇的に美しくなっている。

詐欺ではなかつた。何故なら彼女は、常に同じ姓名を名乗っていたからだ。あまりの変化ぶりと、訪問者の多さが災いした。

審査役はすぐさま追いつ返そうとしたが、青年がそれを押し止めた。

「面白いじゃないか。審査しよう」

女は輝く面を毅然と上げ、靴を試した。が、入らない。女の足はモデル顔負けだったが、それでもその靴には窮屈だった。

艶のある溜息を吐き、去ろうとする女の背に、青年は声を掛けた。
「そこまで変わるのには辛かったろう。そんなにまでして、僕と結婚したいのかい」

女は振り向いた。

「あなたに愛されるためなら」

燃え上がるような、澄んだ瞳だった。青年は少し面食らったような顔を見せ、それから、何とも言えない笑みを浮かべた。

それから一月が経った。例の女は、どういう訳かさっぱり顔を見せなくなっていた。

今では青年を訪ねる女も、一日に十人程だ。審査役は、退屈げに大きな欠伸をした。と、玄関の方からやってくる女の影が見え、慌てて居住まいを正す。

「いらつしやいませ」

挨拶をし、瞥見して、審査役はぎょつとした。陶器のように青白い肌、触れば落ちそうな繊細な髪。幽鬼のような凄惨な美しさを湛えた女が、針の山を歩くようによろめきながら、ふらふらと近づいてくるのだ。

審査役はすぐに青年を呼び、女に会わせた。青年も驚いたらしく、無言で女を見つめている。長い沈黙が流れ、その間、二人はただ黙って見つめ合った。

やがて青年は、おもむろに屈み込むと、女の足下に靴を差し出した。女は、どうやら片足立ちが出来ないらしく、近くの椅子に腰掛けて裸足を高く上げる。

その足の裏には、五本の指がきつく曲げられ、折り畳まれていた。女は痛みを堪えるように唇を噛みながら、差し出された靴に足を通す。細いというより痩せこけた足は、ロングブーツの中にすっぽりと収まった。もう片方も通すと、まるで人形に履かせたように、白い肌によく映える。

「見事だ」

青年が呟き、間を置いて、

「…ありがとう」
と言った。

「君みたいな女性に会えたのは…これで二度目だ。初めての人は、もうこの世にいない。…君。僕の側に、ずっと居てくれるね？」

女は白い顔を綻ばせ、そっと頷いた。

「そう…よかった」

青年も応えて微笑み、ブーツに手を伸ばす。そしてその横紐を、思い切り引き上げた。

がしゃん、と妙な音がする。一瞬惚けていた女が、直後、弱々しい金切り声を上げた。ブーツの隙間から金具が覗き、その間から、みるみる赤い血が流れ出す。

「会いたかった…本当に、君に会いたかったよ」

青年は、愛しげに笑っている。

54・apply(後書き)

「あてはまる」、「
」を当てはめる」、「
」を応用する」、「
申し込む」。

「まだ見つかりませんか」

そう尋ねると、男は決まって黙ったまま頷いた。そして振り向きもせず、本棚の本をひとつひとつ確かめる作業を再開するのだ。

男はもう半世紀も、一冊の本を探し続けていた。まだ若い頃、巨大図書館で働いていた時分に、ある青年に頼まれた本だ。青年が言うには、それは彼が幼い頃に読んだ本で、タイトルも内容も殆ど覚えていない。しかし思い出の中に大きな位置を占める、とても大切な本なのだ、ということだった。

本探しは難航した。青年の言う漠然とした特徴を元に様々な既刊本を示したが、青年はどれもこれも違うと言った。既に絶版になっっているものかも知れない。増刷されなかったか、大量生産されなかったタイプの本かも。作業は膨大なものになった。十年、二十年が経ち、青年が中年になっても男は探し続けた。

もう結構です。諦めます。

家内に叱られました、迷惑を掛けるなど。

最近体調が悪くて…。

お仕事、引退されたんですね。もう本当にいいですから。

もう、やめて下さい。私も歳をとりました。

来週から、入院するんです。

まだ探してるんですか、ありがとうございます。でも、もう終わりですね。

私の方が若いのに、ままならないものですね。

最期に…あなたに言わなきゃいけないことが…。

耳打ちされたのは、つい先日思い出したという、その本のタイトルだった。

壮年の死を見届けた後、男は黙って去り、街から姿を消した。代わりに本屋仲間の間で、密かな噂が囁かれるようになる。本の気を喰う老人の話。気配は人間離れし、質素な衣服を纏いながらも汚れ

を感じさせない。ふらりとやってきて本棚を、吟味し尽くし、時々立ち止まり、去っていく。

ある時、本屋の主人が話しかけたことから彼の目的が判明した。話を聞いた関係者は、密かにその本について調べたが、目録にも古い文献にもそんな本は見当たらない。似たものを見つけると、どこからか現れた彼が、

「それか…」

緩やかにかぶりを振るのだった。

男は本を、補充本も店の奥にあるものも、全て手にとって確かめた。どこまで来たのかわからない。海を渡りもし、砂漠を越えもしたが、まだ本は見つからないのだった。

歩き続け、探し続けて、男はとうとう倒れた。まだなんだ、そう呟いて起き上がる。細い綱を渡るように歩き出そうとする男を、声が引き止めた。

「見つかりましたよ！」

男は振り向いた。立っていたのは、あの壮年の娘だった。

「この本でしょう？」

半世紀ではきかない年月を感じさせる、分厚いハードカバー。背表紙には長年探し続けたタイトルが、金箔で押されている。

「間違い、ないですよ。先日父の古い友人が、家の倉庫から見つけたそうです」

男は食い入るようにその本を見つめ、手に取って丁寧に眺め、それから、ゆっくりとかぶりを振った。

「…返しが違う。こんな作り方は、あの頃以前にはない。よく出来た偽物だ」

本を娘に返すと、男は悲しげに微笑した。

「頑張つて作つたんだね。だけど、本物でないと…」
「どうしてですか」

娘は声を震わせた。

「こんなものを作るくらい……わざわざ協力してくれるくらいの方が、あなたのことを思ってるんですよ！ もういいじゃないですか。第一、父が諦めていいって言ってるのに……」

「あれはもう、私の探したい本になってしまったんだよ。その偽物は彼の墓に供えてやってくれ。きつと喜ぶ」

じゃあ、と言って、男は背を向けた。娘は、引き止めなかった。

男がどうなったのだから、知る者はいない。噂だけは細々と生き続けていて、本の仙人になったのだと言う者もいれば、見つけた本を読み終えて死んだのだと言う者もいるが、真実は定かでない。

今でも街の片隅の本屋では、ほんの時たま、古書のおいを纏った客が現れることがあるそうだ。

55・search(後書き)

(・for A)「Aを捜す」、

(・A)「Aを探る」。

一匹の雄ネズミが、自分は雌だと言い張ってきかなかった。仲間達は、何とか彼 いや彼女か を説得しようとしたが、雌ネズミとの交尾はおろか、アプローチさえ嫌だと言う。困った仲間達は、ボスに「彼女」のことを相談した。ボスはカンカンに怒り、「そんな恥知らずは、全身の毛を抜いて赤裸にしてしまえ！ 己の姿を見直せば反省して、もう馬鹿も言わなくなるだろう」と早口に言った。仲間達はそこまで乱暴したくはなかったが、恥を掻かせるのはいい作戦だと思ったので、早速「彼女」に対する作戦を展開した。

まず、彼女の主張を認めてやった。「よろしい、君は雌だ」。そしてこうも言った。「君は見た目が雄だから、雌なら雌らしくしないとイケない。しかも普通の身だしなみじゃ足りないんだ。そこで、人間の女の変身を見習おう」。

彼女は賛成した。

「ようし」

仲間達は言った。

「まずは白粉だ。肌を白く見せるのが女っぽいんだ」

「それから柄。一色だけの毛並みじゃ地味だろ」

「目は丸いのがいいらしい」

「ちよつと太ってる方が男好きがするって聞いたぜ」

「顔が骨張ってるのはよくないな。食べ物を詰め込んで丸くしようこうして、すっかり見た目の変わった彼女を、仲間達は水溜まりに連れて行った。水に映った自分を見て、彼女は震えだした。

作戦成功だ！ そう思った時だ。

「なんて素敵なの！ まるでネズミじゃないみたい！ みんな、ありがとう。これからは別の生き物の雌として生きるわね」

振り向いた彼女は、後ろも見ずに去っていった。

こうして、ハムスターが生まれたのである。

56・claim(後書き)

「
」と主張する、
「
」と言い張る、
「
」を要求する。

ある星に、才能を引き出す生物がいた。

この生物はちょうど臍の辺りに紐のようなものを持っていて、それを引っっこ抜くことで、文字通り才能が引き出されるとい生物だった。紐のしくみはよく分かっていないが、個体の特性を制御しているか、あるいは引き出すことで何らかの刺激物質が分泌されるのではないかと考えられている。紐を引き抜くのは並大抵の作業ではなく、ひどい痛みを伴うし、体の中に固く食い込んでいる。そのため、才能を引き出すことは、体力・精神力とも一人前になったという証拠と見なされていた。

さて、この生物の住む街の一角に、一人の少年がいた。少年といってもとつくに成人しているべき年齢だったのだが、まだ才能を引き出せていないため、大人と見なされていないのである。

「ああ、僕みたいな落ちこぼれはどこにもいない。いつそ死んでしまいたい」

そんなふう悩みながら、少年は毎日を漫然と過ごしていた。時々才能を引っ張ってもみるのだが、あまりの痛みと、微動だにしない紐の付け根に嫌になって、いつも途中でやめてしまう。痛みをくぐり抜けて大人になった周りの連中が堂々としているのを見ると、憧れと憎悪で気が狂いそうになった。

知り合いの中には少年に親身になつてくれる者もいて、

「このままじゃ駄目だ。痛いのは一瞬だから頑張れ」
だとか

「開き直って自棄になつたらおしまいだ。悩みがある内に決断しろ」
だとか忠告したが、少年のほうではすっかり劣等感に塗り込められていて、励まされるとますます内に籠もるのだった。

ある夜、少年が人目を避けるように街をふらついていた時だった。
「おい兄ちゃん、ちょっと顔貸せや」

柄の悪い男たちに囲まれ、路地裏に連れ込まれた。少年が恐怖に縮こまつていると、金を出せと言う。

「ありません」

男たちは不機嫌な顔を更に歪ませた。そして、ひとりの「脱がせて調べちまえ」という言葉で、少年の服を強引に引き剥がした。

すると、男たちは突然笑い出した。

「見るよこいつ、腹になんかついてるぜ」

「まだとれてねえのかよ。お子ちゃまだな、俺なんか五歳で抜いたんだぜ」

「お前の才能って恐喝だろ」

「うるせーな」

笑いながら、男たちはやがてこう言い出した。

「俺らが抜くの手伝ってやろう」

それを聞くと、少年は必死にかぶりを振り、腹を庇った。本来、本人でなければ無事には抜けないものだ。が、男たちは有無を言わず少年を蹴り転がすと、腹を踏んで体重をかけ、紐を引っ張り始める。

少年は激痛に泣き叫んだ。ひとりの男が、少年の口にシャツの切れ端を突っ込んだ。紐を引く力は緩められることはなく、痛みのみならず涙を流して暴れたが、力でかなう筈もない。男たちは少年の狂態を見下ろしてげらげらと笑った。

気が遠くなりかけた時、ぶつん、と妙な音がした。瞬間、視界の端に宙に舞う紐が映り、体の中心を衝撃が貫き、少年は詰め込まれた布の間から有らん限りの金切り声を絞り出していた。

耳鳴りがする。

笑い声が遠ざかる。

ぼやけた景色の中、男たちの誰かのシャツからはみ出た、紐状のものを見る。

少年は、しばらくぐったりと横たわっていた。腹が熱を持っている。全身が激しく脈打っている。途端、訳も分からず少年は立ち上

がった。腹から流れる血を掌いっぱいを受け止め、そのまま壁に叩きつける。何回も何回も、繰り返し、壁いっぱい血を塗りたくっている。

やがて息があがり、足元がふらつき、腹を探っても血が流れなくなる。少年はぺたりとその場に座り込んだ。壁を見上げ、微笑む。

「これかあ…なんか…しょうもないや」

そして、枯れ木のようにゆっくりと倒れ込む。意識を失い目を閉じた表情は、とても嬉しそうに見えた。

翌朝、赤黒い巨大な絵画作品の前で、彼は発見された。病院に担ぎ込まれ、一命を取り留めた彼は、後に絵筆片手にこう語ったという。

「いや、あれが産みの苦しみて奴だよね（笑）」

57. draw (後書き)

「」を引っぱる、「」、

「」を引き出す、「」、

「」を描く。「」。

「どうしてもやる気が出ない、何をやってもうまく行かない。そんな時は、自分を見つめ直してみるのはいかがでしょう」

友達が紹介してくれた相談役は、こんなことを言った。

「やりたいことがあるのに、なぜか踏み出せない。無性に苛々してしまう。原因は何か？ 大多数の人は、自信がないために進めない自分に。未来に。しかしこれは悪いことではありません。自信がないというのは、他者と自己の比較の上で、あるラインまでの目標を持っている証拠だからです。しかし比べすぎることは、足を止めることに繋がる。そこで、変化のためにまず、新しい生活を導入するのです。」

いつも他人の目を気にしていませんか？ 一人でじっくり考えられる時間がありますか？ 家にいるとき、誰にも気兼ねせずいられますか？ もしそうでないなら、思い切って行動に出てみましょう。何も見た目に分かることでなくとも結構です。誰にも知られずとも、むしろ自分さえ分かる変化なら、世界は自ら違って見えるでしょう」

これを聞いて、私は納得し、その案を採用することにした。その日家に帰って、早速実行した。私は一人の時間を手に入れ、間もなく、他者の目でなく自らの理性で自らを御する事が出来るようになった。

後日、相談役に礼を述べに行った。他人に素直に感謝できるのも、アドバイスのおかげだ。

「どのように工夫したのか」と尋ねられたので、正直に、同居する人間に消えて貰ったと答えると、相談役は詳細を聞きながら、最後にはとても真剣な顔で何度も小さく頷いた。

それから相談役は席を外し、今、隣の部屋で電話を掛けている。

早口の低い声だ。きっと何人も客を持っているだろうから、中には深刻な話もあるのだろう。

私のケースは、解決法が単純で本当によかったと思う。

58: introduce (後書き)

「」を紹介する「」、
「」を導入する「」、
「」を採用する「」。

正直をポリシーにしている男が、勤務している会社の社長に気に入られた。社長令嬢とも親しくなり、そのうち結婚の話が持ち上がった。男は喜んで受け、令嬢と改めて一席設けることになった。

同僚は彼を羨み、

「明日は重役出勤か」

冷やかしながら送り出した。

ところが、翌日いつも通りの時間に出勤した男は何故か浮かない顔だった。聞くと、結婚の話は断ったのだという。同僚は驚き、わけを尋ねた。

男は順を追って話し始めた。

「食事が終わってデザートを食べるときに、社長が俺一人だけを呼んだんだ」

「ほう、男同士の話か」

「うん。それで、『正直に言ってくれ。何が目当ての結婚かね？』と聞くんだった」

「そ、それで」

「『資金と権力です』と答えたよ」

「…で、破談か」

「いや、社長は喜んでくれた。地位にふさわしい男だと思ってくれたらしい」

「じゃ、何がまずかったんだ」

「社長が娘さんの事を話したんだが…」

「何か気に入らなかつたのか」

「『ウチの娘は器量は良くないが、賢いし我慢強い』」

「おお」

「『話の分かる娘だから、窮屈な思いをしなくて済むだろう』」

「ふむ」

「『今まで家族以外の男は知らん』」

「ほう。いいじゃないか」

「ところが、食事の後に娘さんと話をしていると、どうもそうじゃないんだ。体を許した男はいるらしい」

「彼女、よくそんなこと話したな…。しかしまさか、それで社長が嘘つきだとも言うつもりか？ 知らなかっただけかも知れない」

「そうじゃないんだ。二人は正直だったんだが、僕が無理だったんだ」

「…つまり？」

「彼女はこう言った。『前の彼は、あなたの親しい同僚の方です』」
同僚はさつと青ざめた。

「正直に言うよ。君のような嘘つきと、穴兄弟にはなりたくない」

59・refuse(後書き)

「」を断る「、」

「」を辞退する「。」

どこぞの世界で、人間族と魔族が対立し、大戦争を繰り広げていた時のこと。

両勢力の中ではしょっちゅうメディアによるプロパガンタが行われていたのだが、その内魔族の側の一国で、大作映画の企画が行われた。人間のある組織が、ボスと四天王を中心に、魔族を虐殺しており、それを退治しに魔族の勇者が立ち上がる、といった物語だ。

スタッフ達は筋を決めると、キャラクターデザインに取り掛かった。

「悪の組織は、以前少人数で攻め込んできた連中を参考にしよう。勇者一行とか名乗ってた奴らだ」

「妥当ですね。しかし、全く勝手な奴らだった。えーと、ボスは…赤マントに額当て、それから若干小柄で…」

「あと、白い大剣だな。とことん憎々しい容姿にしたいから、そうだな…顔に…」

「あつ、駄目ですよ」

「何だ」

「最近はどうもさいますから。悪イコール身体的欠陥はマズいです。製作前だって、誰か聞いてただけでも問題になりますよ」

「ははは、ここに盗聴器でもあるってか。…まあ、注意に越したことはないか」

それから数時間の話し合いで、四天王や主人公サイドのデザインが詳しく決まった。

「うーん…なんか物足りないよな…インパクトが無い」

「そこはエフェクトと演出でカバーできますよ」

「うむ…しかし、俳優はどうしよう」

「そうなんですよね…捕虜を使わせてもらうわけにもいきませんし

…だからといって人間役なんか誰もやりたがりませんよ」

「だよなあ…それにさ、」

「言っちゃ駄目ですってば」

「あ、スマン。つまり特殊メイクがさ…」

「…ええ…」

二人は顔を見合わせて、溜息を吐いた。いくら身体的欠陥の描写に注意しろといっても、こればかりはどうしようもない。

なぜなら人間は、指は五本、腕は二本、おまけに目が二つという醜悪さなのだ。差別的表現でも仕方ないよな…？ そんな意味をこめて、監督は肩をすくめた。

60・Mention(後書き)

「」について述べる、「

」に言及する) = refer to)。「。

でかい木だった。

広葉樹で、五抱えくらいある太い幹で、堂々としていて。例えるならばト　ロの住んでるアレ。

それはもう町の風景の一つになっていて、夏には木陰で散歩中の人涼んだり、冬になったら毎年おじさんが雪下ろししてやったりして、要するに愛されてる木だったんだ。

僕は辛いことがあると、アイツ　その木のことだけど　の所に行つて、枝に抱かれながら愚痴を言ったり謝つてみたりした。なんか僕は生まれたときから損な役回りらしく、周りの人は僕のせいでツイたりツカなかつたり死んだり生きたりする。アイツは何も言わないから、そんなどーしようもない僕の話だつて優しく聞いてくれるんだ。

でも可笑しいよ、実際。スーパーで買い物終えて玄関から出てきたら、通路塞いでたお兄さんが癩な顔して道を空けるとする。そして、それからぶらぶら歩いてたお兄さんに四トントラックが激突するんだ。当然即死。それで夕方テレビ見てたら、一家三人殺して逃げた犯人が交通事故で死亡とかいってんの。コレ、何だよ、って話さ。僕はそんなお兄さん、顔も知らないってのに。

とにかくそうらしいんだ。僕のせいなんだ、大体。「風が吹けば桶屋」だつて思われそうな話だけど、違うんだよな。だつて、多分僕の中には何か居るんだ。得体の知れないなんか。エクソシストが聞いたら神だか悪魔だかつて言うんじゃないかな。ほんと、気持ち悪いよ。えぐり出してやりたい。

だからアイツだけが、僕の友達で、親で、全てみたいなものだった。

昨日、アイツに報告したんだ。嫌な話を聞いたつて。アイツが切られるつて話だった。観光にも役に立ってないし、もう年寄りでガ

夕が来てるから、倒れたりして大変な事になる前に「処置」するんだってさ。町内会のみんなで決めたらしい。

可笑いよな。なんでなんだろうね。

ともかく昨日、僕はアイツにお別れをしてきた。もうあの場所には戻らない。結末を見たくない。町と、アイツと、どちらが消えるにしても。

それともアレかな…僕が消えたらいいのかな。

61. judge (後書き)

「」を判断する「」、
「」を裁判する「」。

兆候が現れたのは、茂が小学生になってしばらくした頃だった。最初は新しい環境が楽しいのか嬉々として通っていたのが、次第に憂鬱そうな顔をするようになったのだ。

「授業がつまらない」

と言う。懸念が当たってしまった、と私は思った。英才教育を施しすぎたのだ。読み書きや計算、歴史、言語教育。スポンジのように知識を吸収する茂が、天才児に見えた。この子はとんでもない大物になるのではないか。だから、茂の言葉を聞いたときは後悔した。どうして私立の優秀な学校に入れてやれなかったのかと。だが、今更学校に掛け合って特別扱いをしてもらうことも出来ない。イジメだのモンスターペアレンツだの、真つ平ごめんだ。

考えた末、茂にはこう伝えた。

「授業内容だけが勉強ではない。様々な人と触れ合って、相手を理解し、自分のあり方を考えるのも大切だ」

茂はきよとんとしていたが、どうやら彼なりにそれを解釈し、実行し始めたようだった。小学校中学年になった頃には、校内の人気者になれたようだった。

「お母さん、人間って面白いね」

この頃から、茂は社会学や心理学に関わる本を読み漁るようになった。一日十冊は軽く読んでしまう茂だから、他にも歴史学、数学、応用物理学などにも手を出して、もうアメリカに飛んだ方がいいんじゃないか、などと私は考え始める始末だった。

が、わが家にはそんな余裕はなかったのだ。それでも幸い、茂は自ら成長してくれていたから、将来には十分な期待が出来た。もしかしたら何か、いわば真理に到達できるような人間になれるんじゃないか。そう思えた。

中学生になった茂は、私の目から見ればほとんど完璧だった。頭

が良く、運動が出来、話術に優れ、人の心を掴む。これが中学生か、と思うほどだった。

だからだろうか。時々、ぞっとする瞬間があった。この子は私の息子なのか、と。

今思えば、茂は完璧などではなかったのかも知れない。なぜなら、中学生を「演じている」ことが私にだけはバレていたのだから。私には、子供らしさを演出する顔の奥に覗く、成熟を通り越してなにやら得体の知れないもの。遠くて触れられない何かが見えた。見えるだけだった。その、茂の「本質」をどう扱って良いものか、私には分からなかった。

だからだろうか、あの夜、ふと後ろに立っただけの茂に、言い知れぬ恐怖を感じて　気がつけば、茂は死人のようになってそこに横たわっていた。

恐らく茂は、私のその行為をも、解釈し、理解したのだろう。茂の感情はなんと言っただろうか。私を憎んだらうか。それとも、案外……。いずれにせよ、今では知りようがない。入院後、目を覚ました彼は記憶を失っていたという。なのに、医療費はすっかり全額払って、医者的心配をよそに退院した、と。それから先は消息不明だそうだ。

私は安心した。

もう彼と出会うことはないだろう。会ってもきつと、つまらなそうに一瞥されて終わりだ。

私では遠すぎた。遠ざけてしまった。今はただ、彼が自由に生きてゆけることを願っている。あの怪物をさらけ出し、ありのままに鉄格子の向こうに、青空が見えた。

6 2 . a p p r o a c h (後書き)

「」に接近する「」、
「」に取り組む「」、
「方法」、
「取り組み方」、
「接近」。

近所のコンビニでバイトを初めてから一ヶ月になるが、このころ妙な事が起きている。

「店長：またですよ」

「またア？ 近藤君、ちゃんと客見てるの？ 最近よく来る女とかいないの」

「いや、そんな筈は」

かぶりを振ると、店長は低く唸った。

事と言うのは、客の使うトイレでの迷惑行為だ。ここ一週間ほど、客のいない時に掃除に行くと、必ずと言っていいほど便器の中が真っ赤になっているのだ。最初は、客の誰かが痔か月のモノの最中なんだろう、と思っただけでも通りに掃除した。が、俺が確認できる限り誰もトイレを借りていない時でさえ、便器は必ず汚れているのだ。それが一週間、毎日……。腹に据えかねてレジか監視カメラに張り付いて見たが、駄目だった。何人かトイレに行く客はいるが、固定の犯人の特定には至らない。

だが、特定できたとしてどうしようと言うのか。コンビニで出禁などは難しいし、通報も避けたい。第一まだ、偶然である可能性は捨てられないのだ。結局、犯人が飽きるのを待つしかなかった。

店長と俺は、揃って溜息を吐いた。

が、数日後。

事件が起こった。

若い男が入っていったトイレを、さりげなく気に掛けているときだ。凄まじい叫び声が、個室から響いてきた。

「……ど、どうしました!？」

客達が固まる中トイレに駆け寄ると、ドアが跳ね開けられ、血塗れの男が転がり出てきた。見ると、臀部に深々と刃物のようなものが突き立っている。

「え……」

男は青ざめ、ふらふらと俺の方に倒れ込んだ。

「てっ店长、救急車！ 救急車呼んで下さい、早く！」

連絡の後、俺は男を大騒ぎの店内から裏口の方に運んだ。横になった男は、息も絶え絶えにこう呟いた。

「便……器……」

「べんき……？ 便器がどうしたんですか、何があつたんですか」

気がつくと、相手の重傷ぶりも構わず、俺は男を問いつめていた。どうやら男は、真っ赤だった便器の水を気に掛けず、そのまま用を足そうとしたらしい。が、座った途端、何故か尻を刺されていた。

救急隊員が駆けつけたときには、男は意識を失っていた。その後事件は新聞の片隅に載り、コンビニは客足不調と責任問題で閉店。結局訳が分からないまま、俺は次のバイトを探す羽目になった。

あの便器の血は、もしかしたら水回りの故障で逆流してきていたのかも知れない。男の尻を刺したのは、刃物ではなく便器のパーツで……

「……って、な訳あるかよ」

血はともかく、俺が見た刃物は確かに、柄がついた銀色の歴としたナイフだった。個室で、誰も近づいた様子がなく、これと違って侵入の形跡もない。そんな場所で起こった事件だ。何らかの怪異の存在を認めざるを得ない。男の自傷の可能性も考えたが、ケツにナイフぶつ刺して「便器にやられました」なんて、いくらなんでもこんな滅茶苦茶な行動はない。

俺は、新しいバイトを続けながら、便器や個室の構造について調べ始めた。どうやら俺が働いていた店のようなタイプのトイレには、漫画の主人公でもなければ完璧な侵入は難しいらしい。

次に、俺はコンビニバイトの経験がある友人から情報集めを始めた。すると意外なことに、同じような迷惑行為があちこちで起きていることが分かったのだ。

「困るんだよ、コンビニの客とか注意されにくいだろ。いつやられてんのかわかんねーし、便器汚れてたら次の客が帰ったり苦情言ったりよ。え？ それでも黙って用足してく客？ いや、珍しいだろそんな奴。少なくとも先に流すって」

不信がる友人に、絶対に汚れたままの便器に座らないよう言っておいて、更に調べを進めた。どうやら密室トイレから尻を刺された客が出る事件は、ほんの時たまではあるが起きているらしい。

「やっぱ…確かめるしかないか…」

奇妙な好奇心と義務感に突き動かされ、とうとう俺は自ら便器に赴くことにした。現在血の出る便器を持つ店の一つを選び、トイレを借りる。個室の鍵を掛け、便器の蓋を開けると、案の定、いかにも流し忘れた風の赤い水がたゆたっていた。

俺は一気にGパンと下着を引き下ろし、便器に腰掛けた。嫌な臭いと気配に下半身から怖気が上る。下の水が、じゃぼつと音を立てた。

「！」

その瞬間。

尻の下から、カン、と鋭い金属音がした。下から、どうやら本当に飛び出したらしい刃物。だがその一瞬前に、俺が鞆に入れて持参した金属板が尻を守ったのだ。

「…フ。フフフ…残念だったな。俺は知ってるんだよ…ただ無防備に、汚い便器に座るわけがない…！」

俺は勝利の笑みを浮かべ、勢い良く体を翻した。

「さあ、見せて貰おうか、貴様の正体を！ 花子さんでも太郎君でも構わな…」

『つぶぶ』

陶器の便座に、ナイフが落ちて跳ね返った。それを離したのは、白い、細指だ。手首からやがて肘、二の腕、肩……そしてずるりと、女の頭が姿を表した。

『待ってた。あなたを待ってたのよ。ずっと』

「何っ…」

『入れてあげる。さあ、おいで』

白い腕は俺の頭を抱え込むと、凄まじい力で便器へと引き寄せた。
白い便座、赤い水溜まり、そして真っ暗な穴。

「や…やめっ…」

『ふふ。うふふ』

「やっ、あ…アッ…」

そして、個室には誰もいなくなった。

63・admit(後書き)

(自分に不利、不快なこと)「」を認める、「」の
「」の入場(入学)を許可する「」。

ある晴れた日、ある寂れた公園のベンチに、くたびれたサラリーマン風の男が座り込んでいた。片手に缶コーヒーをぶら下げ、足下に鞆を転がし、ぼんやりと風景を眺めている。

と、そこに、

「おじさん、何してるの？ 無職なの？」

小さな女の子が話しかけた。男は初め驚いたようだったが、やがて微笑を浮かべた。

「そうなんだ。お嬢ちゃんは、おじさんみたいになっちゃ駄目だよ。一人でお散歩？」

「ううん、おじさんに会いに来たの。おじさん、生まれ変わりたくない？」

そう言うと、少女は背中から大きな鏡を取り出した。男は首を傾げたが、少女が鏡を突き出すので、そろそろと覗いてみた。

「おや…？ これ、鏡じゃないのかい」

男がそう尋ねたのは、鏡の中に、自分の顔ではなくどこかの少年の全身像が浮かんでいたからだだった。

「鏡だよ。これ、おじさんの過去を映す鏡なの」

「え？…あつ」

鏡の中で少年は、自転車を壊してしまい、父親に殴られている。やがて場面が切り替わり、少年が次第に青年へ、大人へと成長していった。

鏡を覗き込む男の表情が、驚愕を交えながら、次第に暗くなる。

「…ね？ ろくでもない人生でしょ？」

やがて映像は現在の男の歳を通り過ぎた。家庭の不和、病気、事故、屈辱、惨めさ、老い、そして死。

「……」

「わかった？ この先、いいことなんてないんだよ。ねえおじさん、

生まれ変わらせてあげる。お金持ちになれるよ」

「…お嬢ちゃんは、一体誰なんだ」

「さあ？ 神様かな。それより返事ちょうだい。返事次第じゃ、今すぐやり直せるんだから。どうする？」

男は少女の笑顔を見つめ、しばらくすると、両の掌で顔を覆った。日が傾いてゆく。下校する生徒達の賑やかな笑い声が通り過ぎる。少女はちょこんと、男の正面に座り込んだ。

「ね、おじさん…」

その時、男の手の間から、微かな笑い声が漏れた。両手を離し、少女に優しい視線を落とす。

男の返事は、ノーだった。

「…どうして？ あんな、酷い人生なんだよ。見たでしょ？」

「お嬢ちゃん。ありがとう」

「えっ？」

「…ほつとしたよ。なんだ、思ったほど酷くない。普通に色々あって、普通に死ねるんだ」

少女は啞然として、それから食ってかかった。

「おかしいよ！ あんな不幸な人生のどこがいいって言うの？ 一発当てたくないの、幸せになりたくないのっ」

「なりたいたさ。だから、このままでいいんだ。それに、鏡に映った人生なら、逆さまにできるかもしれないだろ？」

言った後、男は照れ隠しのように勢い良く立ち上がった。少女は慌てて転びかけ、

「なっ、何よっ！ この馬鹿っ」

涙目で罵声を叩き付ける。男は鞆を拾い上げ、大きく伸びをした。「…な、お嬢ちゃん。あんまり人のことを不幸だとか言っちゃ駄目だ。俺は俺なんだから。…何だかね、そういうことが久々に分かったよ。ありがとうね」

男の笑顔に、少女は拗ねたように背を向けた。男がベンチに缶コーヒーを置く。

「これ、冷めちゃったけどあげるね。まあ、まだ飲めないかな」
少女がきつと振り向くと、男はもう公園を出て行くところだった。
妙に若々しい背中を見て、少女は思い切り唇を尖らす。コーヒートの
缶が、パン、と弾けた。

64・reflect(後書き)

「」を反映する「、

」を反射する「、

)・on A(「Aについてよく考える」。

老人は目を閉じている。瞼はひくひくと動き、その下の眼球も落ち着きなく転がっている。鼻孔の奥から掠れた呼吸音が漏れ、胡麻塩髭の下の唇は半開きで苦しげに空気を出し入れする。

老人が寝返りを打ち、背を丸める。低く短い呻きが漏れる。しかし、暫くすると仰向けに戻り、目を開ける。視線を宙にさまよわせ、足元を見て、目が止まる。瞼を大きく開き、目線を動かさないまま、骨ばった両手をベッドに立て、上半身を引き上げる。支える両肘が震えている。掛け布団から抜け出た、着物のほだけた胸元には、右の鎖骨のやや下辺りに古い弾痕が刻まれている。

ベッドの背に体を持たせ掛けた老人は、口を開いて顎を震わせている。目線は足下より向こうに留めたままだ。痩せこけた頬、骸骨のような輪郭。額の後退した白髪は伸ばしっぱなしで不揃い、垢と埃に汚れている。痩せた顔面から飛び出した眼球に映るのは、白いベッド、昼の日が射し込む大きな窓が三つ、反対の壁にある本棚と模型と武器のコレクション、箆笥に置かれた若い軍人の写る写真。そして、老人の濁った白目、灰色の虹彩に囲まれた眼球の中央で、リズムカルな動きを見せる人物。

次第に老人の強張った目元・口元の筋肉がほぐれ、顎でなく唇が震え出す。瞬きの回数が多くなり、眼球が潤ってゆく。やがて土気色の頬が血色を取り戻し、目に映る人物の動きを追うように頭が微かに揺れ始める。瞼の隙間が少しずつ狭まる。眼球の人物の動きが次第に激しくなっていく。

人物の影が揺れた。目の中に映る風景が全て、揺れ、歪んでいく。同時にその景色が急速に狭まってゆき、老人が瞼を閉じると、両目に溢れていた涙が外に押し出され、老人の顔面に刻まれた細かな皺に引っ掛かりながら、顎の先端まで垂れ落ちた。

老人の固くなつた頬の筋肉が、皺を寄せながら唇を引き上げる。

微笑した唇を開き、嘎れ声で、二言三言喋った。

呼吸音が消える。上半身を支えていた背や首の筋肉が弛緩している。両手は投げ出され、瞼は目の上に、微動だにせず幕を落として
いる。

口元だけは、笑い皺の名残を留めていた。

65・perform(後書き)

「」をを行う、
「」を遂行する) = carry out(「、
「」を演じる、
「」を演奏する

久々に実家に帰ったので、部屋の荷物を整理していると、引き出しの奥から色褪せた紙箱が出てきた。見覚えがあるな、と思って開けてみると、ぼろぼろになった玩具が無造作に詰め込まれている。

ひとつひとつ手に取って眺めている内に、次第に懐かしさが沸いてきた。思い出した。この箱は、私の宝箱だったのだ。物心ついた頃から小学生頃まで一緒に遊んでいたもの。けん玉、おはじき、人形、ゴムボール……。ゆっくりと回想しながら触れていると、つい顔がにやけてしまう。

それにしても、玩具達はどれもこれも酷い有様だった。ボールは所々破けたり焼けたりしているし、けん玉の紐は何度も付け替えたり結び直した跡がある。金髪の人形に至っては、不格好に髪を切られ、体のあちこちに傷を付けられて、まるでリンチの後だ。

無理もない。子供の頃は、新しい遊びを考え出しては玩具を無茶に扱って、自分共々泥だらけで帰ってきたりもした。そして、そんな遊びにもやがては飽き、埃まみれの玩具を段ボールの隅に押しやっただのだ。

人形の髪を、そつと撫でてみる。覚えのある感触。大きな青い目に、滑らかなポリ製の肌。

この子ともよく、一人遊びをしたものだった。お喋りするときは、必ずこの子が先に口を開く決まりだった。

「…こんにちは。お久しぶりね」

そう、ちょうどこんな風に。それから私が答える。

「うん。長いこと押し込めて、ごめ」

「お前の顔は見飽きたんだよ、カス」

思わず人形を取り落とす。

けたけたけた。
沢山の笑い声が、部屋に満ちた。

66・bore(後書き)

「くをうんざりさせる、」
「退屈なもの(人)」。

ある時代、ある場所で、二人の男が喧嘩をしていた。十年來の長い喧嘩だ。原因などより、互いの意地で突っ張りあっている、そんな喧嘩だった。

ところがある日、そんな喧嘩を中断させる出来事が起きた。地球に巨大隕石が降ってくる、と言うのだ。世界は大騒ぎになり、パニック、犯罪、戦争、あらゆる災いの予兆を見せた。

男、タカシは言った。

「ちっ。これじゃ決着の前につまらんことに巻き込まれて死にかねん。続きはまた今度だ。ただし、お前が生きてたらな」

もう一方の男、マサルが言った。

「何を？ 貴様ならいざ知らず、俺がこの程度の騒ぎで死ぬはずがない。少なくとも貴様が先にくたばるはずだ」

タカシがぴくりと眉を上げた。

「ほー。だったらどっちが生き残れるか勝負しようじゃないか。このドタバタだけでなく、生涯賭けてな」

「面白い！ 並では決着はつかんと思っていたんだ。見ている、貴様の屍を拜んで笑ってやる」

こうして二人は別れ、それぞれ自らの命へ飛び込んで行った。

そして、八十年が経った。

災害と長い混乱期を経てようやく安定を取り戻した世界の片隅、忘れ去られたシェルターで、一つの機械が作動していた。冷凍睡眠装置である。

装置は設定された期間を終え、維持機能をいましも解除しようとしていた。中に眠る男が、八十年前のまま目を覚ます。

「う……うーむ……」

蓋が開き、男、マサルは苦しげに起き上がった。と、そこに、いつの間にか背後に立っていた老人が声を掛ける。

「ようやくお目覚めか。ところで、知っているかね？ 長期間の冷凍睡眠を行った者は、平均寿命が常人より十年短いのだ」

「…？ 何を言ってる…誰だ、貴様…」

目覚めたての体で、ぎこちなく振り返ったマサルの視線が凍りついた。老人の鼻には、昔自分との喧嘩でついた傷跡が残っていたのだ。

「…貴様、タカシ…か？」

杖を突き、しわくちゃになった猫背の老人。対して自分は、まだ若い体である。

老人はニヤリと笑ったかと思うと、直後激しく咳き込み、床に膝をついた。見ると、掌には血痰が吐き出されている。

「馬鹿な…」

マサルは愕然とした。

「ち、血迷ったか、貴様！ 俺との勝負を忘れたとは言わさんぞ。

どちらが長く生きるかという勝負だ！ あの災禍の中、コールドスリープしないだと？ 俺は貴様なら…貴様も当然っ…！」

「ふ…だから、今言っただろう。お前の寿命は、縮んだんだよ」

「何を…何を言っている。たかが十年縮んでも」

「そつとも」

言葉を遮って、タカシは再び咳き込んだ。

「わしは、もう死ぬ。だから見せびらかしに来たのさ。お前に、勝利をな」

タカシは杖を床に突き立て、震える手で体を起こした。そして、混乱して眉を寄せるマサルに、ずいと迫る。装置の縁に手を掛ける。「見る。わしの生涯を」

言葉を無くすマサルの眼前、上着の前を剥いでみせる。老いた肌には、弾痕、病痕、火傷、シミや皺、これまでの長い壮絶な年月の証が刻まれていた。

「見る！　これがわしの人生だ。わしの戦争、わしの歓喜、わしの苦痛、わしの財産だ…！」

襟元に掛けた節くれ立った指からも、懐からも、見事な宝石の輝きが零れている。

「わしは生きたぞ、あの時代を。お前の何倍も長く、何倍も濃い人生をな。お前はその間、呑気に眠っていただけ…そしてこの先、わしに負けたまま生き、わしより十年か二十年早く死ぬ。…くく。ふふふ」

タカシは背を屈め、頭を掻き回した。噎れた哄笑がシエルターに響き渡る。マサルは呆然と、目の前の老人を凝視していた。

その時、笑いすぎたのか、タカシの喉がごぼりと音を立て、大量の血を吐き出した。咄嗟に腰を浮かせたマサルだったが、その襟首を掴まれ引きずり下ろされる。

唇から血を滴らせ、見開いた眼で睨み上げて、タカシは呻いた。

「俺の、勝ちだ」

それを最後に、タカシは事切れた。

シャツを掴んだ指から力が抜け、ずるり、と前のめりに崩れ落ちる。枯れ木のような老人を膝に抱え、マサルは、奥歯を噛みしめた。顔が歪む。手が震える。タカシの頭を嫌に軽く感じていた。

「…馬鹿野郎…！」

指から抜けた宝石が、床に落ちて細い音を響かせた。

67・survive(後書き)

「生き残る」、

「(人)より長生きする」、

「(危機など)を越えて生き延びる」。

年の暮れ。朝、昼、夕、夜、それぞれの代表者が集まって、定例会談を開くことになった。

まず朝の代表、「朝焼け」が来た。涼しげな黄金色で部屋の空気を爽やかにした。

次に昼の代表、「中天の太陽」が来た。さんさんと光を降り注ぎ、活発な生命力で部屋を満たした。

三番目に夕の代表、「黄昏」が来た。憂いを帯びた落ち着きで、部屋に情緒を漂わせた。

最後に来るのは夜の代表の筈だ。三者は、神秘と眠りを誘う「闇」が来るのを、今か今かと待った。しかし、いつまでたっても闇は来ない。

「おかしいですね。彼が来ないだなんて、白夜病にでもなったのでしょうか」

「あたし、知らないよ！ 大晦日以外会ったことないもん。黄昏、仲良いんですよ。知らない？」

「……分からない……僕には、何も……」

朝昼夕はそれぞれ心配したが、やはり夜は来なかった。それでも黙って待っていたが、しばらくすると、昼が言った。

「ねえ、さっきからチカチカ騒がしいの誰？」

朝と夕は首を傾げた。確かに、しばらく前から部屋に浮ついたざわめきが轟めいているのだ。

「あれ、てっきりあなたかと思いましたが」

「あたしじゃないよ、こんな下品な騒ぎ」

昼が強く否定した直後、どこからかケラケラと声がした。

「なんだア、俺下品かよ。初顔だからって随分じゃん」

三者が驚いて見ると、そこには確かに、光と色の集合体が座っていた。

「やっぱ太陽さんがいると、俺って地味？ あはは」

「……君、何故……」

「あ、今回ね夜会議で代表俺になったの。ほら、言っちゃナンだけど闇のオッサンも落ち目じゃん？」

軽率そつな笑顔を見て、三者は一樣に溜息をついた。確かにこの若者は、近頃すっかり夜を好き勝手に照らしているのだ。

「ままま、先輩方。飲みましょうや」

そつ言つて、「ネオン」はまた笑った。

68・represent(後書き)

「」を表示「、」
「」を示す「、」
「」を代表する「」。

最近ずっと友達と会ってなくてさ。遊びの誘いとかも来ないし、まあみんなそれぞれ用事があるんだろうけどね。

がちや、パタン。

かちやかちや、もぐもぐ。

「お嬢様、ご用事がありでないのであれば、これで…」

でも聞いて、こないだ同じ講義の子に相談のメール送ったらさ、全然返信ないんだよ。二日連続で送ったのに。その子には会ってないから確かめようがないけど、私嫌われてるんじゃないかな。

ボタン。ブロロロ…

「若奥様、お庭の手入れは小姓に任せてよろしいのですね」

大体私の友達って層が偏ってるんだよね。いわゆる普通の、街で買い物したり恋愛談義するような女の子って、なんだか離れて行ってちやうの。

ヒュルルルル…

ドー…ン、ドー…ン

「奥様、ここは危険です」

結局私って変人なのかもね。うまく普通の暮らしができないんだよ。結局この先、人生に希望なんか持てないんじゃないかな。そもそも、問題をひた隠しにして殻に閉じこもるやな性格なんだ、私って。

ひゅうつつ…

ガタガタ…ガタ…

「ご主人様、一足先に去るご無礼をお許し下さい。願わくば…天国で」

その癖寂しがり屋でさ。他人を使つて、自分の惨めさを慰めようとしてるんだよね。そんなんじゃないお互いに理解も思いやりも程遠いのに。ホント、最低。実際、私つて友達一人もいないのかも。

ウィーガシャン、ウィーガシャン。

ねえ、どうしたらいいのかなあ。こんな気持ちのまま、曖昧に笑顔浮かべて世間を漂ってればいいの？ けどそれじゃ、頭の霧が一生晴れないまま死んじゃうよ。こんな私でも、それは嫌なんだよ。

ウィー…ガシャン、ウィー…、ガ、シャン。

「なあ、あの屋敷跡知ってるか？」

そう、やっぱり、今までと違った心持ちで人と会わなきゃ。…
そう言えば、最近ずっと友達に会ってなくてさ…。

ガ……………シャン…

「ああ、婆が住んでるって噂の」

「そう。あれマジなんだぜ。部屋の辺りに近づくと、婆がガラクタ相手にずーっと喋ってたよ。ひっきりなしだぜ」

「ぶっん。よっほど悩みでもあんのかね」

69 . argue (後書き)

「、と主張する」 + that
「、を議論する」
「。論争する」。

バイトを終え、駅を降りたら帰りの足がなくなっていた。まだ買って一年の丈夫なものだったのに。悔しさと苛立ちのせいで、一日の疲労が一気に吹き出した。理不尽だ。ならば俺だって盗んで帰ってやる、そう思い、駐輪場を見渡した。

「…これでいいか」

自分のものと似た格好の、ツーロックされていないものに目を付けた。

「ふざけやがって」

この歳でまともに就職も出来ず、バイトの上司には毎日イヤミを言われ、彼女もいなければ愚痴に付き合ってくれる友人もない。

なぜ俺がこんな目に遭うのだろう。どうしてこんなことになってしまったのだろう。

「くそつ、引つかかてる」

大学時代は想像もなかった。輝かしい未来なんか期待していなかったが、何となく上手くいくんじゃないかと思っていた。毎日、サークルの先輩と趣味の映画に没頭して、夜中まで好きな監督の話をしたりして。俺も友人達も皆、映画馬鹿だった。

「あーもう、うぜつ。邪魔！」

社会人になったら、仕事の合間を縫ってショートフィルムでも撮って、OB会で見せ合おう、などと言ったこともあった。が、それも遠い昔の話だ。サークルには卒業以来顔を出していない。

「合わねえ、くそがつ」

今の自分を撮ったら、ちょっとした社会風刺ものくらいにはなるだろうか。行き詰まって肝の小さな犯罪を働く就職浪人。

「お」

「あのう、すみません。それ私の…」

鍵が開くと同時に、背後から声がかかった。持ち主らしい。俺は

慌てて飛び乗り、背中を向けて思い切りペダルを踏んだ。もう、知ったこつちゃない。

背後で持ち主が叫んだ。

「自転車泥棒と言えばーっ？」

思わずブレーキを掛けた。慎重に振り向く。

持ち主は、８ミリビデオを構えてこちらを覗いていた。暗い中でも見覚えのある背格好、聞き慣れた声。間違いない。サークルの友人の一人だった。

『自転車泥棒』と言えは、ヴィットリオ・デ・シーカ監督だ。

相変わらず、映画馬鹿なんだな。約束は叶えたのかな。

俺は歯を食いしばり、再び友人に背を向けた。口の中で謝罪を呟く。引き止める声を背に、一目散に漕ぎ去った。

70 . grant (後書き)

「
」を認める
「
」を与える
「
」を叶えてやる。

母が死んだらしい。家で葬式が行われた。

だが私は信じていない。大掛かりでベタな仕掛けが好きな母だ、おそらくこれも悪戯に違いない。私は葬式の間中、至る所に目を光らせた。

メッセージはすぐに見つかった。遺書の暗号、親戚に渡されたハンカチ、遺影の裏に落ちていた指貫。おそらく脱出ゲーム等に見られる盥回し型の仕掛けだ。

母の設問は全くベタだった。ひとつのヒントから次のヒントへ数珠繋ぎになっている問題は、どうやら会心の一品らしく母の手口を熟知する私をして手を焼かしめたが、それでも解けなくはない。が、如何せん何重にも張り巡らされた問いは、一朝一夕には解決できそうになかった。

予想では、最終問題の回答が母自身に繋がっているはずだ。身を隠した理由は、第二の人生とか私の自立とか魔族の後とかそんなところだろう。ともかく母は、お気楽で嘘つきで自分勝手なのだ。行動力だけは人一倍あって、男にも負けない剛胆な人だったが……。

二年が過ぎた。

最終問題には未だ辿り着けない。だが、ゲームのルールだけは破らないのが母だ。私は解き続けた。

しかしこの頃になると、別方向のベタも疑わしくなっていた。即ち、母は既に死んでいて、私を試し、私だけに真実を伝えるためにこの方法を採用している、という筋書きだ。

とうとう最終問題を解いたとき、胸が痛いほど絞り上げられた。嫌な予感がしたのだ。見たくない、答え合わせをしたくない、と。

だが、こんなに長いこと追ってきたのだ。

(……ええい！)

踏ん切りをつけ、示された場所へ、私は足を踏み入れた。

そこは、教会の墓地だった。母の墓がある筈の場所ではなく、遠く離れた地の、小さな墓地だ。

(……ベタすぎるよ、本当に)

私は墓地の入り口で立ち止まっていた。もういい。母の用意した結末は、もう見えてしまっている。この中に恐らく小さな墓石があり、そこに私へのメッセージ。本当の最期の問題が刻まれているのだろう。

見たくなかった。だが、見なくてはならない。

すぐに見つかった墓石の前にしゃがみこみ、埃を払う。そうする間にも涙がこぼれそうになった。

(馬鹿。馬鹿じゃないか)

元はと言えば、私が幼い頃に母になぞなぞをせがんだのが悪かったのかも知れないけれど。それにしだって。

(……)

墓石の文字が露わになった。

『最愛の我が子へ。あなたの後ろを見よ』

嗚咽しながら、私は俯いていた。これが、本当に最後だ。振り向けば終わってしまう。私と母の二十年間のゲームが、全て。

座り込んだまま、私は長い間動けなかった。

と、その時、突然背後から声がした。

「なんだ、後ろ見ないの？」

反射的に振り向いた。母の喋り方、母の目、母の愛用する眼鏡。

だが、そこにいたのは

「お……とう、さん？」

「いやいやいや」

中年ダンディが、顔の前で手を振る。

「まあお父さんだけだね、今は。ホラなんとなく分かるでしょ。あなたの元お母さんです」

頭が真っ白になった。これまでの出来事が、走馬灯のように記憶

の裏側を駆け巡る。

葬式。

捨てられた指貫。

二年間の失踪。

消えた口座預金。

「まさか……」

馬鹿な。しかし、だとしたら、余りに　　ベタすぎる。

「……『女』の『お母さん』は死んだ、ってこと？」

「ご名答！」

へなへなと崩れた私に、「父」はコングラッチュレーションとばかりに親指を立てて見せたのだった。

71: indicate (後書き)

「」を指し示す「、」

「」を表す) = show(「」。

ふとテレビをつけると、またあの子が映っていた。反射的にチャンネルを変える。

「お母さん、どうしたの？」

六歳になる娘は無神経な母親とは真逆にそだったようで、敏感に私を心配した。

「なんでもないよ。そうだ、ちびまる子ちゃんが始まっちゃうわ」「まる子ちゃん！」

娘は奪うようにリモコンを手に取ると、隣の椅子に飛び乗った。無邪気な笑顔だ。私には、勿体なくらいの。

あの頃、私はあの子を親友だと思っていた。

行き帰りが一緒だったからすぐに仲良くなつて、しょっちゅう話をしていた。

似た者同士、という訳ではない。むしろ性格は真逆で、私は落ち着きのないお喋り。あの子は沈着冷静な聞き役だった。けれど大人しいばかりではなく、時には驚くほど鋭いツツコミをする。今考えると、私の何倍も賢い人間だったのだろう。周囲からは、私がまるで落ち目の道化のように見えたとに違いない。

そして、私たちの関係はあっさり終わりを告げた。

その日、いつものように私は一方的に話をしていた。内容は失恋話。告ってきた男が、たった三日で今度は別れを告げてきた、という愚痴だった。中身のないならならした嘆きを、あの子は辛抱強く聞いて慰めたり忠告したりしてくれていた。私はそれに対し、男の「理不尽な仕打ち」をひたすら呪っただけだった。

「大体さ、人の気持ちを分かれとか何様？って感じじゃね？三日で何か分かれて方が無茶でしょ。私は告られた側なんだからさ、相手見れてないし。あんたとは違うんです的なね？そこは妥協し

て欲しいじゃん」

「…まあ、彼的には『それ以前の何か』が欲しかったのかもね。見込み違いっていうか、本当には見えてなかったんじゃない。なっちゃんのこと」

「やっぱ？ だよー！ 全然相手のこと見てないよね。マジKY」
そう言った途端、あの子は僅かに空気を固くした。私が返事がないことに違和感を抱き、振り向いたときには、もう遅かった。

「…ごめん。力になれないみたい。ちょっと、先、帰るね」
言うが早いか、走り出した背中がみるみる遠ざかり、それを最後に、あの子と私が言葉を交わすことはなかった。

今なら分かる。私がいかに独り善がりだったかが。私は、他人の気持ちまで自分のものにできるつもりでいたのだ。親友も彼氏も、最初から裏切っていたのは私の方だった。

あの子とは一度も目も合わせないまま卒業し、次に見たのは、テレビの中から眩しい笑顔を見せるタレントとしての姿だった。所属しているという芸能事務所は私でも知っているくらい的高手で、もう雲の上の人なんだ、とどこかで納得した。

だから私は、私の出来ることを、せめて同じ後悔をしないように続けていく。そう、決めたはずなのだけれど。

「お母さん、テレビ」

「ん？……」

気づくと、チャンネルがまた元に戻っていた。カメラの方を振り向きながら歩くあの子。心臓の奥に、重い痛みが差し込んでくる。駄目だ。やはり、まともに見ていられない。

「ごめんね、チャンネル……」

「お母さん！ キリンの公園！」

娘の訴えるような声に顔を上げる。テレビの背景に映り込んでいたのは、見慣れた近所の公園だった。

「え……」

心臓が、大きく膨らんだ気がした。

「ねえ、うちの方来てるよ」

娘がはしゃいでいる。あの子は相変わらず笑顔のまま、確かに私達の住むマンションの方に近づいてきていた。

耳の奥で鼓動が聞こえる。記憶が脈打って、あの声が、会話が、恐ろしく鮮明に蘇る。

「テレビの人が来るよ、ねえ、見に行こう、早くう」

娘は懸命に私の袖を引き、動かないと分かると焦れてひとりで駆け出そうとした。

「だ…駄目っ」

腕を捕まえる。娘は不機嫌にむずかった。

体が強張る。唇が震える。あの子が手の届く範囲にいるというだけで、私は壊れてしまっそうだった。

『この辺なんですよねー。緊張してきました…』

やっぱり近づいている。が、近づいているというだけだ。関係ない。私には関係ない筈だ。

『あっ、この建物！』

「……」

このマンションだ。

「……え」

「お母さんお母さん、ほら、こっち来るよ」

「来ないわよ！」

思わず強い口調になった。娘が目を丸くし、次いで泣き出しそうになって、スカートを握って堪えている。

「…来るはず、ない」

あの子が階段を上っている。私は頭が真っ白になって、娘に謝ることも、テレビの音声をまともに聞くこともできなかつた。

『わ、ホントにドキドキする。…喧嘩別れしたんですよ！。会ってくれるかな』

冷や汗が背中をじっとりと湿らせた。体が熱い。頭の芯が震えて

いる。呪文のように来るな来るなと念じながら、膝に手ついて何とか自分を支えていた。

『…じゃ、行きまーす』

呼び鈴が、鳴った。

「はい」

我ながら、どうしてそんなことができたのか。私は訪問セールスでも迎えるように、答えて立ち上がった。頭の中は依然、思考が止まっている。

覗き窓から外を確かめ　しかしまともには見えず、ドアを開ける。

「あつ、奈津子さん、ですか？」

『…ですか？』

背後のテレビから、ほぼ同時に山彦がかかる。私は無表情だったのか、それともアホ面だったのか。知らず知らず、声が漏れていた。

「…亜美ちゃん」

あの子が満面の笑顔になる。

「覚えててくれたんだ！　わあつ、嬉しい。急にごめんね。実はこれテレビの企画で…」

「ああ、知ってる。今見てた」

私の淡々とした対応に、後ろのカメラマンが困惑する気配を見せる。私とは言えば、混乱と緊張を通り越してもはや考えることを放棄していた。

と、その時だ。

あの子がふいに微笑した。今までの屈託のない笑顔ではなく、妙に悪戯っぽいような、切ないような表情で。

「…やつぱ？　だよー」

止まっていた心臓が、再び大きく音を立てた。

あの時の私だ。

「見ててくれると思った。私もなつちゃんのこと、忘れてなかったし。いきなり腹立てたりして、ずっと後悔してました。だから…」

「よく、ないよ、ね」

手が震えた。胸の中で訳の分からないものが渦巻いて、力を抜くと嘔き出してしまいそうだ。

「『やっぱ』…とか、『だよね』…とか、人を、決めつけるみたいで…よく、ないんだよね」

言いながら顔にかつと血が昇って、俯いた。どうして私は素直になれないのだろう。どうして、たった一言。

「…そうだね」

あの子が言った。恐る恐る顔を上げる。

「ごめんね」

あの子は、亜美は、そう言って笑った。その瞬間、感情はいとも簡単に堰を切って溢れ出していた。

カメラマンが驚きを見せ、しかしすぐさま私と亜美にレンズを向ける。亜美は、私の頭を抱いてくれている。

私は何も言えず、亜美の肩の中でただかぶりを振った。ごめんなさいもありがとも、私が言うべき言葉なのに。

折角の高そうな服が、私の涙で汚れていってしまう。流し終えたら、弁償しなくちゃ。そうして今度こそ、ちゃんと頭を下げて謝るんだ。

でも、この分じゃしばらく後になるだろうな。

72・belong(後書き)

「所属している」
「所有物である」。

クラス一の美女、氏子が言った。

「あんたが私と？ 嫌よ、小六男子なんて。私の彼氏ならせめて高校生じゃなきや」

晴隆は衝撃を受けた。

(き…君だって同級生じゃないかあゝゝッ)
勿論、口に出せるはずもなかったが。

「そんなわけで、俺は修行をする」

「は？」

「高校生より強くならなければならぬからだ」

十年來の友人、章は心底呆れ顔をした。大きな溜息を吐き、

「…悪いこと言わねえ。やめとけ」

「なんでだ？」

「あれは間違いなく悪女だからさ。お前、立ち直れなくなるぜ」

「ふーん…」

晴隆の目は挑発的だった。

「なら、それで構わないさ。見てろよ。きっとデカくなってみせる」
「！」

晴隆の修行は過酷だった。毎食後と入浴後、就寝前にも500mの牛乳を飲み、登下校時には十人分のランドセルいっぱいそのピンを詰めて背負う。常に両手足に磁石という名の重しをつけて行動し、休日には街に出て、路上やゲーセンで高校生たちの能力値を観察した。

過酷な日々、晴隆の体は傷つきながらも確実に逞しくなっていた。ストイックさすら漂うその瞳に、心を奪われた女子も少なくはない。

だが、ただ一人。学校のアイドル・氏子だけは、晴隆の努力を歯牙にもかけていなかった。

ある時、無理が祟って保健室に運ばれた晴隆の前に現れ、彼女は言ったのだ。

「無駄な努力ご苦労様」

途端、付き添いに来ていた友人・章が血相を変えて立ち上がった。

「氏子、貴様っ……」

「いいんだ！……さっさと行ってくれ、氏子。こいつが怒ると何をするかかわらんぜ」

「フン……！ 全く下品なガキね。言われなくても出て行くわよ。……」

……このバカ」

保健室の扉がピシヤリと閉じる。足音が遠ざかると、章は浮かせていた腰を再び椅子に下ろした。

「くそっ、あの女！」

「落ち着けよ」

「……お前、悔しくねえのかよ！ 振り回されて、ボロクソ言われて、拳げ句この様だぜ。なんでここまでする？ やめちまえよ。あんな女、こつちから捨てちまえ。……落ちやしねえ、高校生好きの女なんか」

言い切って晴隆を睨みつけてから、章は意外そうに顎を上げた。いつもなら強気に反論してくるだろう男が、黙りこくっていたからだ。

「晴隆……」

「……そうさ。俺だって本当は自信がない。……子供だもんな、どんなに鍛えてみたって、高校生にはなれないさ。けど」

厚い掌を、ぐっと握り締めた。

「俺は諦めない。後悔したくないからな……！」

小さな驚きを浮かべていた章が、悟ったように微笑した。

「フ……お前らしいな。いいだろう。その思い、俺が届かせてやる！」

その日から、二人は寝る間も惜しんで修行に励んだ。大自然の中に身を起き、全力で拳を闘わせた。荒れ狂う海での特訓はまさに、東のオーブニングのごとく岩場に打ち寄せ砕け散る波頭とのぶつかり合いであった。

「どうした、お前の思いはそんなものか！」

「なんの……まだまだアア」

飛び散る汗。

躍動する肉体。

眩く儂い青春の輝き。

木陰から見守る大和撫子。

そして　とうとう、その日はやってきたのである。

SE：ザッ…

「我が校よ…私は帰ってきた」

圧倒的肉体。そして内に秘めたる秘め切れていない闘志。ランドセルの背負い帯は弾け飛び、幾千の戦跡が刻まれたその体はもはや小学生のそれではない。

「晴隆よ…よくやった。俺は友として、お前を誇りに思うぞ」

「…礼を言う」

「何、当然のことをしたまで。さあ、行ってこい。お前の戦場へ！」
無精髭の下で、厚い唇が微笑む。

美しい肉体を夕日が照らし、彫像の如きシルエットを作り出した。校舎からは終礼の鐘が鳴り響き、玄関を割って幾つもの若々しい影が踊り出す。

その中に、一際洗練された色を放つ者。彼女の姿を、晴隆は瞬時に見分けた。

「久しぶったぞ…氏子」

女は立ちほだかる影を見上げ、目を細めた。

「ま…まさか…」

「私だよ。はるた、」

「先生えええつ！ 不審者です、警察呼んで下さああい！」

その叫び声は、とても冷静で。それ故に酷く、残酷だった。女子高の制服を優雅に翻し颯爽と脇をすり抜けた氏子を、晴隆も、そして章も、止めることは出来なかった。

地響きを立てて、膝が落ちる。

「そんな…遅すぎたのか…」

(……)

「……」

(……)

「……今、ちょっとルパンの気持ちわかった」

(……正直、このオチ見えてたっぽくね……?)

長い影を延ばし、軽い足取りで校門を跨いで、彼女は少し振り向いた。教師たちに取り押さえられる巨漢たちを見て、ちろりと舌を出す。

「ごめんね？ 私、五歳上じゃないと受け付けないの〜」

73・acquire(後書き)

「
」を習得する
「
」を獲得する。

この屋敷に迷い込んだ人間に、私はいつも声を掛ける。そして二つの選択肢を提示する。

「ただど大抵の奴は、ビビったり逆ギレしてくるから、答えなんかほとんど聞いたことがない。ま、どっちを選んだって一緒なんだしね。」

でも、最近は滅多にそういう奴が来なくなった。たまに来るのは、馬鹿みたいにプライドが高くて友達の手前引つ込みがつかなくなつたガキ。それから、古い建物が好きな奴。訳知り顔で「廃墟の美」とか失礼なこと言ってくれちゃうから嫌い。あとは、寝泊まり場所を探すおっさんとかかな。あいつらにはなんか近づきたくないから構わないでいる。どうせみんな、私の言ってることなんかまともに聞きやしないんだから。

でも、もう、そんなのもめつきり来なくなつて、何年も経つた。そして今日、突然すごくやかましい奴が無作法に踏み込んできた。ブルドーザーとかいう名前らしい。

最後の客だな、ってなんとなくわかった。おまけにコイツ、喰えそうにないじゃん。

最悪。

私は深呼吸して、やけくそで桶を抱えた。いつもの台詞を唱い上げる。

「小豆とぎましょか、人穫つて食いましょか……」

渾身のビビらせ声は、すぐに騒音に掻き消された。

74・reply(後書き)

「返事をする、」

「〜と答える」+to(「」。

朝。

私の部屋に、息を白くしてお父さんが入ってくる。厳しいけれど優しい目で私を見つめ、無言で頷く。そして奥の方へ向かい、私の食事をとってくる。

私の言葉は、お父さんには届かない。いつも鼻をくつつけたり、見詰めたり、そんなことで気持ちを伝えるしかない。けど、それで充分だった。

去年、お母さんが死んだ。お父さんはしばらくふさぎこんで、私と目も合わせなくなつた。けれど不思議と一緒にいる時間だけは増えて、そんな時は、黙って私に背中を向けて座っていた。

私は何もせずに、その背を見守った。どうであれ、彼がお父さんであることに変わりはない。

秋頃になると、お父さんは次第に元気を取り戻した。お父さんにはひとり、ちゃんとした娘がいる。その子が家の仕事をしたり、私の世話もしたりして頑張つたのだ。あの子の笑顔には、お父さんだけではなく私も元気を貰つた。

当たり前のことだが、暮らしは元通りにはならなかった。稼ぎ頭だったお母さんがいなくなつて仕事は大変になつたし、お父さんは前よりもつと質素になつた。それでも、毎朝決まった時間に私のところに来て、前と変わらない食事をさせてくれる。

大切だ、と思う。言葉には出来ない、体いっぱい気持ちなのだ。私に出来ることならいつでもと、常に感じているのだ。

食事を終わると、寢床でぼんやりとそんな考えに耽る。お父さんはもう戻ってしまつてここにはいない。次に会えるのは、だいたい昼に差し掛かつた頃だ。

「……とう」

うとうとしかけた時、ふと声が聞こえた。

「お父。本当にやってしまっただけか？」

あの子だ。

「ああ」

お父さんが短く答えている。

「かわいいそうさ」

「仕方がない。今ぐらいが丁度いいさ。お前もちゃんと手伝え」

「うん…」

気乗りしない風にあの子が答えた。急に背中の筋を逆撫でされるような気がして、足が竦んだ。

足音が近づく。姿を見せたお父さんは、大きな刃物と縄を持っていた。唐突に、ああ、私は死ぬのか、と理解できた。

「ね、全部食べるの？」

「馬鹿いうな、近所のオバアやオジイにも分けるさ」

お父さんは、いつも通りに歩み寄ってくる。穏やかで厳しい目も、重く落ち着いた足取りも見慣れたものだ。

私に食事をくれるときの。

私を撫でてくれるときの。

私を。

暴れる私を手慣れた風に押さえつけて、お父さんが部屋の外に出る。太陽が眩しい。雪も、淡い晴れ空も、とても鮮やかだった。

75・feed(後書き)

「」にエサをやる、

「」を養つ、

「エサを食つ」。

制服を着た青年が、愛想笑いを浮かべながら、微動だにせず壁に張り付いている。多くの人が彼を無視し、或いは瞥見しながら、門の中へと吸い込まれてゆく。

同じように足を向けようとして、しかし、私の中で重苦しい躊躇いが振り子のように揺れ、心をその場に留め置こうとするのだ。

私は、何度となくこの重みに従ってきた。人生の選択の場面で、或いは転機となり得る出会いに置いて、振り子に揺すられるがまま歩いてきたのだ。そうすることで足元は、少なくとも平地に思えた。振り子は私を喰い、削っていく。削り屑は、運動を止めた脳の中に溜まってゆき、頭を重くする。考えることを、私は次第に諦めていった。

だが、ふと振り向いたとき見てしまったのだ。私がこれまで歩んだ道、その真実を。

平地などともない。ぐずぐずに崩れた柔らかい地面が不規則な曲線を描き、周囲には至る所に穴が開いている。少しでもふらついて、足を滑らせれば奈落が歓迎していたのだ。

私は戦慄し、穴を覗き込んだ。奥の方に、ちらほらと光が瞬く。底の底、水面に映った星のような光だ。はっと見上げると、遙か上空には無数の道が伸びていた。歩む人々が懸命に踏み固め、積み重ねて作った道だ。気が付けば、奈落にいたのは私の方だった。

怖れ、焦り、ふらふらと手を伸ばす。何かにぶつかった。眼前に、両側に、人々の道が断崖となってそそり立っていることに初めて気づく。

私は絶望した。もはや自分は取り残された人間なのだ、そう思い、座り込んで苦しみ悶えた。振り子が私に囁きかける。

忘れてしまえ。

目を閉じる。

大丈夫、適当やってもなんとかなるさ。

だが、一度見てしまったものを忘れることなど不可能だった。いよいよ苦しくなり、聳える崖を殴る。凸凹の壁面から破片が剥がれ落ちる。拳に鮮烈な痛みが走り、血が流れた。

そうだ。

踏み固めなければ。積まなければいけない。たとえ追いつけないとしても、たとえ醜い姿を晒すことになっても。

そのために、ここに来たのだ。

私は、力を込めて一步を踏み出した。振り子は次第に黙り込んだ。表情を変えない制服青年を示し、同じ制服の女性が柔らかく微笑む。

「はい、ジェットコースターに乗れるのはこの子より背が高い子だけですよー」

76・escape(後書き)

「逃げる」

「免れる」+from

「〜を避ける」。

「ここはどこだ。私は誰だ」

暗闇の中でむっくりと起き上がり、男は自分の体を確かめた。汚れた髪、伸びた髭。安物のくたびれた寝間着。

と、どこからか声が降ってきた。

「忘れたのかい。君は君が寝泊まりしている四畳半から、ここに来たんだよ。魂だけでね。まあ、まだ思考や記憶は」

「そうだ、思い出した」

男は手を打った。

「そうだったそうだった。私は貧乏暮らしで、うんざりして神様にお祈りしたんだったな。『私を王様にしてくれ』と。あなたは誰だ？ 神様か？ 私の願いを叶えてくれるのか？」

『切り換えの早い男だな…』

声の主は呆れた。

『うん、まあ、王様にはしてやるよ。だけど色々話もあるんだ。まず、クーリングオフは一ヶ月まで。それから…』

「いい、いい。ややこしい話はごめんだ。何だか分からないが今すぐ王様にならなきゃいけない、そんな気がする」

『…しかしこっちとしては…』

「いいから早くしてくれ」

『……。分かったよ、そこまで言うなら説明はナシだ。後で文句言っな』

男が肩をすくめる。直後、男の魂は再び眠りへと落ちていった。

目を覚ますと、男は確かに王様だった。が、その生活は、男が思っていたようなものではなかった。国は荒れ、家臣達の賄賂や裏切りが横行し、血縁者からは常に命を狙われる。城には連日、争いを

逃れた民が押し寄せて食糧だの何だのを乞うた。

が、男は状況を甘んじて受けた。

折しも隣国との戦争は末期に突入しており、人の心は荒れる一方だった。その内、王妃は目前に迫る滅びに絶望して自殺し、王子の一人が事故を装って殺された。

男は、誰も磨く者が不在玉座に、一人座り続けた。

国はひと月経たず、隣国と手を結んだ奸臣による政権奪取という形で、滅びを迎えた。男も王ではなくなり、嘗て味方だった兵士達に引つ立てられて、新しい王に額づいた。

「…うんざりだ」

結局、王様になれたのはたったひと月だった。だが、そのひと月の間に見たものは、人間に、世界に絶望するには充分過ぎた。

「もう結構だ。そうだ、思い出したぞ。クーリングオフが使えるんだ。元々。ああ、腰抜けでも何でも構うもんか。もう戻してくれ。」

ぶつぶつと呟きながら、男は薄いシートで体をくるんだ。

『やれやれ、だから話を聞けと言ったのに。じゃあ戻すけど、今度は苦情は受け付けられないからね』

「うー…ん」

寝返りを打ち、すぐに気が付いて男は起き上がった。自分の身を確認する。

粗末な服、粗末なベッド。伸ばし放題の髭。窓の鉄格子。外からかんぬきの掛かった扉を見張る番人。

数日前、弟に国を乗っ取られた、元国王の自分。

「…あれ？」

まだ戻っていないのか。

『いや、戻したよ』

どこからか、あの声が出た。

『手違いはない。これが元の君だ』

「馬鹿な……」

言いかけて、男ははつとする。何かの頭の中を駆け巡った。

『話を聞けと、何度も言ったろう。あの日、王様になりたいと願った君は、自分の素性もロクに思い出さないうままそれを実現させた。

こっちは人が変化を望む念に対処するだけだからね。とはいえ現実をねじ曲げるのは無理だから、現在進行形で王様やつてる奴と君を入れ替えたんだ』

ペラペラとよく喋る声を聞き流しながら、男は漸く自分のミスに気が付いた。

どこの誰とも知れない王様なんぞになりたかったのではない。弟から王位を取り戻したかったのだ。その思いだけが、やたらと急ぎすぎた。

『まあ、こっちとしては別に困らないし、元の時間に戻してあげたから文句もないだろう？ ほら、確か今日は、君の処刑日だしさ』

声に促されて耳を澄ますと、遠くの広場から人々のどよめきが聞こえてくる。それとは別に、ひたひたと石畳を踏んで近付いてくる足音が、鼓膜にはつきりと響いた。

『じゃね。いい人生を。と言っても、あと二時間くらいか』

それきり、声は消えた。

男は、一人俯いていた。長いことじつと冷たい床を見つめていた。

やがて、拳を握り締めて立ち上がる。

「なあ」

話し掛けられ、番人は敏感に振り返った。

「煙草、ないか」

番人は複雑な表情になり、逡巡していたが、やがて殊更わざとらしく表情を引き締めて懐に手をやった。

「一本だけです」

顔に似合わぬ声色で、微かに囁く。男は微笑を返し、番人の差し出す煙草の吸い口をくわえる。

番人の目には憐憫が浮かんでおり、おかげで、元国王が自分の腰に素早く伸ばした右手には、未だ気付いていなかった。

77・replace(後書き)

「」に取って代わる「」、

「」を取り替える「」、

「」を元の場所に戻す「」。

間違いない、とKは思った。こいつは、三年前の強盗殺人犯だ。マンシヨンの一室に押し入り、一家四人の内二人を殺害。金品を奪って逃走し、現在まで足取りも掴めなかった男だ。まさかこんな映画館で出会うとは。

休暇で、しかもデート中だが関係ない。映画が終わったら即刻逮捕だ。……まあ、列の中央にいるこの状況ならすぐ逃げられもすまいし、彼女の不興も買いたくない。出来れば、気付かれずに本人確認をしたいものだが。

そうだ、確か被害者の話では、足首に傷があったとか言ってたな
ちよっと、何やってるのよ。

突然足下に身を屈めた彼氏を見て、Bは眉を顰めた。紙の音やらがしたから、どうやらフライドポテトでも落としたらしい。仕事中はピリピリしてそのない彼だが、こういう時はとことん間抜けで空気が読めないのだ。

足下の食べ物なんて、ほっとけばいい。感動のシーンだったのにぶち壊し。おまけに、隣の人の足の方なんか覗き込んで、ほら、迷惑顔されてるじゃない。

ああもうやだ。

Bは彼氏を無視してスクリーンに目を据えた。

なんだこいつ。

何だつて俺の足をじろじろ見やがるんだ。あ？ てめえのポテトはその後ろだよ、そこじゃねえ。ったく、意地キタねえな。

まさか、刑事じゃねえだろうな。俺の足を……まさか傷を？ 馬鹿な。傷は綺麗に隠した筈だ。大丈夫、バレやしない。頼む、バレないでくれ。糞っ、触るな気持ち悪い。……だが、おかしいな。話しかけもせず、捕まえるでもない。ひよっとして映画が終わるまで待つつもりか？ なら……そうか……チャンスはある！

Sは堪えていた。脂汗を流し、スクリーンを睨みつけ、ひたすら堪えていた。

大丈夫だと思ったのだ。中盤までは映画の筋を追っていた。が、後半に差し掛かる頃、突然下腹部を嫌な鈍痛が襲ったのだ。何が悪かったのか？ 途中で食べてきたソフトクリームか、喉が渴いて一気飲みしたコーラか、エアコンの効いた館内か。

左右を見渡した。左隣には、前の席にもたれ掛かって爆睡する如何にも筋者なオジサマ。右隣には、ついさっきフライドポテトを落としてからずっと屈み込んでいる男。しかもなぜか、自分と男の間にいる人物の足にむしゃぶりついている。なんなんだ？ そっこの趣味か？

足を鳴らしてみた。咳払いもしてみた。両隣の邪魔者は、うつすらと反応を返したきり無視を決め込んだ。

なんて勝手な連中だ！ 日本人の美德は思いやりじゃなかったのか！

膝を握り締め、唇を噛み、括約筋を最大限に締め上げる。もう少し、後少し、終わったらすぐ立ち上がって急ぐ様子を見せればきつと。……限界は、すぐそこまで来ていた。

ラスト15分、最大の見せ場。会場から声が上がリ、すすり泣きが聞こえ、内何人もがハンカチを取り出す。

と、中央あたりで、観客の一人が突然立ち上がり、一目散に走り出そうとした。そしてその時、

Kは頭を犯人の爪先に置いていた。

BはKを見ていなかった。

Sは精神を統一すべく何にも触れず硬直していた。

小さな悲劇の、一幕である。

78・reveal(後書き)

「」を明らかにする、「、

」を知らせる「、

」を示す「。

目を閉じる。夜の静寂が次第に遠ざかり、時たま聞こえる高速道路の走行音も意識の中から消えていく。

やがて頭が浮かび上がり、目蓋の外に光を感じる。風にざわめく木々、虫の鳴き声。歩く私は、衣服に付いた草の種を払って歩く。だんだん森は深く、強い日差しは枝葉を通して細く鋭く、人の聞き取れない言葉が奔めく場所へと私は潜り込んでゆく。

座り込む。無防備に寝転ぶ。人であることをやめたいと願いながら、息を嚙めて、森の呼吸に耳を澄ませる。押し包むようなざわめき。

次第に、光が翳り、闇が目蓋の奥へと

「かおりちゃん？」

男の声に目を覚ます。起き上がると、疲労した皮膚がぱきぱき悲鳴を上げるのがわかった。

「あ、起きた」

「…ええ。おはよう」

溜息も舌打ちも堪えて、最低限の布を身に纏う。おずおずと帰宅を告げた男を、笑顔で玄関まで送り出してやった。

ドアを閉めると、のしかかる疲労感と倦怠感に倒れそうになる。

鏡は……見ないことにした。今日は何も予定がない。生姜湯でも飲んで、ひとりで休もうと決める。

やかんを火にかけて、椅子に沈み込んだ。外からは、車や人や建物が喧騒をぶつけ合うのが聞こえてくる。

人は、ひとりだ。

何かと一体になどなれはしないし、自分をやめることも出来やしない。だから、つまり、私はロマンチストだったんだろう。

目を閉じる。

押し包むような、ざわめき。灰色の森へ、溶けていく。

79・surround(後書き)

「」を取り囲む」。

「ねえ、どう？ 似合う？」

「あー、似合う似合う」

「……ちよつと、こつち見なさいよ。どこがどう似合うとか、ちやんと言ってるってば。コーディネートに口出ししてくれてもいいからっていつも言ってるでしょ」

マネキンのようにピシツとポーズを取ってみせる彼女に、俺は溜息を吐いた。彼女ときたら、一時が万事この調子だ。同じ部屋に住み始めた時も、カーテンと壁紙のバランスがどうの、家具がどうのと散々拘り倒したせいで落ち着くのに一週間も掛かった。何せカツプーフ、ネクタイピン一本に到るまで部屋や自分や俺とバランスが取れていないと気が済まないのだ。

自分の好きなようにすればいい、と言ったこともあったが、「客観的な目がないと駄目なの」とえらい剣幕で力説されたので、以降諦めた。

「ほら、レギンスのラインとカーディガンの…が…で、何とかの何とかが…」

全く面倒だ。こういう時は適当に部分的に褒めるとうまく収まる。これでも付き合いは長いから、コツは掴めているのだ。

「そうだな……」

と、適当に喋ろうとして、ふとやめる。

思い付いたことがあった。

「……うん。大体いいと思うけど、インナーは微妙かな……バッグと合ってるないし、仕事に行くならもっと淡い色でもいいと思うよ」

案の定、彼女は目を丸くした。

「なんか……珍しいわね、そんなアドバイスくれるなんて」

言いながら隣の部屋に引っ込む。衣装箆笥を引っ掻き回しているらしい。俺はゆっくりと彼女を待った。

やがて再び現れた彼女は、やや緊張の面持ちで、目の前に立った。「ど、どう？ 今度は大丈夫？」

俺のアドバイス通りの服装。得たりとばかりに俺は言った。

「うん、完璧！」

彼女は、人一倍人目を気にする質だ。そして世間の代表として、俺の目を信頼している。こちらの指摘は素直に受け入れるということだ。現に彼女は何の疑問も持たず、全体のバランスが崩れてしまった服装を喜んでいる。

なんだ、こんな可愛い子だったんだ。

俺は、彼女と俺自身の新たな一面を発見した気分だった。

「じゃ、行ってくる」

「行つてらっしゃーい」

素肌にエプロンを纏って、妻が笑う。艶やかな、それでいて素直で朗らかな笑顔を見ていると、よしよしと頭を撫でてやりたくなる。「夕方には帰るよ」

「あ、待って」

振り向くと、妻がエプロンの裾を摘んで上目遣いに俺を見ていた。

「これ……似合ってる？」

俺は吟味するフリをしてから、にこりとしてやる。

「うん、配色もいいしスタイルとのバランスが取れてる。今日も素敵だよ」

満面の笑みを浮かべた妻に送り出され、駅へと向かった。

80・suit (後書き)

「
」に命令、

「
」に適する、

「
」に命令。

ある金持ちの屋敷では、夜中になると地下で彼のコレクションが騒ぎ出す。

「あゝ…あ、今日も疲れたあ。コキコキするう」

「ぶはあ。黙って気取ってるのも楽じゃありませんね」

「今何時？」

「大丈夫だよ、上の奴らはみんな寝てる」

主人の目が届かない時間、それらは思い思いに羽を伸ばすのだ。何しろ、昼間は美しげな顔をして、主人や客や召使いのいいように大人しく振る舞わなければならないのだから、肩も凝るといったものだった。

「そういえば、今日は新入りがいるんじゃないかな？」

ふと、誰かが言い出した。皆が興味津々に探しだすと、入り口の方から控え目な声があった。

「わ、私です……」

見ると、小さく縮こまったのが確かにいる。コレクションのひとりが呆れて言った。

「随分控えめなんだねえ。あんた、生まれてどのくらいなの？」

「は、はあ…確か、推定で千八百とか…」

「へええ！」

皆が一斉に声を上げた。

「随分古いんだ。じゃうちで二番目の古株かな？ ご主人のお気に入りに決定だね」

「あの方は骨董がお好きですからねえ。けどあなた、まだ綺麗にして貰っていないんですか？ 何だか触ったら崩れそう」

「え、ええ、そうなんです…今日こっちにきたばかりで、まだ専門の人がいないとかで」

「ふうん」

コレクションたちは新入りを囲んで、時間を忘れてお喋りした。時が過ぎ、やがて夜明け前になると、廊下を近づいてくる足音が聞こえる。

「しっ！ 召使いだ、早く元の場所に」

誰かが言つと、皆素早く自分の展示台の上ですまし返る。すぐに召使いが入ってきて、部屋をぐるりと見渡し、それから端から順に見回りだした。時折立ち止まっては、コレクションを眺めて陰気な笑顔を浮かべたりする。

（ちっ、気持ち悪い。自分のものにならないからって変な目で見ないでよね）

微動だにしないまま、コレクションたちは内心悪態を吐いた。

午後になると、主人が客を連れてやって来る。

ほほう、見事なものですな

いやいや、これだけ集めるには苦労しましたよ。発掘や運搬の段階で駄目になったのも多くてね

復元の方もご自身で？

ええ、これでも遺伝学と芸術学は一通り修めましたからね。実際の作業は業者ですが……どうです、この一体など。私のお気に入りだね、ポンペイの遺跡から出たんだが……

ほう、美しい。現世の女など比べ物になりませんな。しかし、なぜわざわざ死体からお作りに？ 貴公なら世界中の美女を妻にも出来ましょくに、独身でいらっしやるし

いや、やはり仰るように現実の女は詰まらなくてね。まあこれは、私の趣味というか、性癖というか……考古学的価値のある肉体を愛で、陵辱するというのが、なんとも破戒的だね。好きなんですよ。古ければ古いほどいい

ははは。良い趣味をお持ちですな

ふふ、貴殿程では

おや、こちらのミイラは？

ああそれは、昨日着いたばかりでしょ。復元前です。このま

までは私には価値がないんでね……どうですか、一体触ってみては宜しいので？

ええ、どうぞ

では……ほう……これは……

「あッ」

一体のコレクションを吟味する客を、新入りは怯えた目で伺っていた。そして、先ほど言われた言葉の意味を考える。

（私には価値がない……ミイラだから？ 綺麗になったら価値がある？ でも、私は古くないのに。千八百年なんてウソよ、裏山に埋まっただけだもの。私、何だったのかしら……頭が痛い。ご主人は何を……？）

そして夜中になると、コレクションたちは騒ぎ出す。

「疲れたー」

「ね、ね、あのお客どうだった？」

「なかなか上手な方でしたよ。ご主人顔負け」

「うっそお」

皆が笑い合う中、一体が、黙りこくっている新入りに話しかけた。

「ねえ、落ち込まないで。ご主人、今日は良くあなたの方見てたし、きつとすぐ綺麗にして貰えるわよ」

「……そう、でしょうか」

新入りは縮こまって不安げに呟いた。

「なんだか私は、して貰えない気がします」

落ち込んだ様子の新入りを、何体かがのぞき込んで慰めた。

「大丈夫だよ」

「あの方にも都合があるのでしょうか」

「焦っちゃ駄目！」

「ね、気長に待とう」

『……殺シテヤル』

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

新入りの小さな声に、皆が一瞬言葉を失った。当の新入りは、はつと顔を上げ、一番驚いた目をする。

「私、何か……？」

焦って口元まで持ち上げた左手の、薬指に金色の指輪が光っていた。

8 1 . e s t i m a t e (後書き)

「 λ 」を推定する「 λ 」、
「 λ 」を評価する「 λ 」。

「だりい……」

空っぽの胃がしくしくと痛み、僕はその場に座り込んだ。こんな田舎じゃ夜中まで営業してる店なんかないし、そもそも財布の中身はわずかな小銭ばかり。現実的に考えれば、こんな無計画な逃亡が成功するはずはなかった。

家出なんかするんじゃないかな……

ふと弱気がよぎり、慌てて頭を振る。そうじゃない。決意したじゃないか、今度こそ逃げるんだって。あの狭苦しい家から、息苦しい母親から。

母の口癖は、「東大エリート」だ。僕が物心つくかつかないかの頃から、ことあるごとにそのフレーズを繰り返した。

小学校に入る前から、勉強に関係ない遊びをした覚えがない。なぞなぞは数学の公式で、読まされる本は古典の名作やら近代の文豪アニメを見るなら「まんが日本の歴史」だ。

それでも僕の頭はさほど良くはならなかった。きつと生来の馬鹿なんだろう。母親に似て。

そんな体たらくだから、僕が勉強をサボるようになったのは必然だった。全力でやった結果に傷つくのはウンザリだった。でもそれ以上に、母親に傷つけられるのも嫌だったから、目の届く範囲では真面目に振る舞った。僕は頭は悪かったが、母親の慈悲を引き出すコツは学び尽くしていたので、無難に良さ目の点数を取り続けた。

だが、そういう僕の小賢しいマネが今日、とうとうバレてしまったのだ。後は僕の想像通り。激怒した母がヒステリックに喚き、凄まじい勢いで襲いかかってきて、僕はその場から逃げ出したというわけだ。

僕は臆病者で考え無しで子供だろうか？ なら、そう育てた母が悪いのだ。あの女と来たら、スパルタ式なんてもんじゃない。

馬鹿の癖にエリート志向で、世間体ばかり気にして、神経質で、勉強勉強と一日百回も言っつて、無慈悲で、勝手に、想像力がなくて、頭が固くて、八方美人で、短気で、……とにかく、狂気じみている。「……ことお……まこと、どこののおー……」

あの女の声が近づいてきて、僕は自分の足を奮い立たせた。子供のことなんか分かつちやいない癖に、嗅覚だけは人並み以上だ。勉強狂いのケダモノめ、と腹の中で罵り、一目散に駆け出す。

仮にも親に、こんな言葉を向ける自分が嫌になる。そうしてまた、その原因を母の教育に探そうとする自分がいて、負の連鎖に板挟みになって、心がねじ切れそうになる。僕はただ、色んな束縛から自由になりたいだけなのに。

後ろから足音が追ってくる。僕はひた走る。ここが無人の荒野なら喚き散らしたい所だ。纏わりつくものを振り払うように、めっちゃくちゃに手足を振った。

「待って！ 待ちなさい、まこと！」

誰が待つか。僕はまだ死にたくない。

足の速い母が、腕を振り上げて追ってくる。その手に握られた包丁の気配が、僕の背中を泡立てた。

誰か教えてくれ。狂ってるのは、何だ？

82・aim(後書き)

- () - a t A () 「Aをねらう」、
- 「Aをめざす」、
- () - A a t B () 「AをBに向ける」。

「あんまり無理するなよ」

彼がそう言つて、いつものとろけそうな笑みを浮かべる。彼と関わった数多の女が、一度はオチかけたに違いない笑みだ。

何言つてやがる、馬鹿野郎

内心口汚く罵つて、私は曖昧に苦笑して見せた。

彼にプロポーズされたのは、社会人三年目の時。大学の同窓会で再会して、しょっちゅう会うようになって、半年ぐらい過ぎた頃だ。色恋沙汰に慣れていなかった私は大層動揺して、混乱しながら必死に考えて、決死の覚悟で返事をした。

その時も、彼には余裕があるように見えた。いつもそつだ。驚いたり喜んだり嘆いたりしながら、いつもケロッツとして笑っている。恋に無知な私に、手酷く別れた昔の女の話をしたりして、明るく爽やかに笑う。

私には、その笑みの奥にあるものがさっぱり見えなかった。今でもそつだ。彼の話によく共感できなくて、そのたびに自分がひどく惨めに思えた。

彼には追いつけない。彼と同じ顔ができない。

私はひたすら働いた。自分から仕事を探したり、空いた時間を使って資格を取るために勉強もした。疲れ切つて帰宅して、溜め息を吐いたら、同じように仕事で疲れているはずの彼がホットココアを作ってくれたりする。優しい笑みに、思わずほっとした。そうやっていつか子供も出来た。

十年。

疲れていた。嫌で嫌で仕方ない。いつまでこんなことが続くのかだが、終わりは案外あっさりと訪れた。

「あれ」

洗濯物を分けながら思わず漏らした私に、彼が振り返った。

「ん、何？」

「……何でもない」

「何だよー」

笑いながら、彼は食器を運ぶ。シャツの襟の後ろに付いた口紅には、どうやら気付いていないようだった。

「……」

来るべき時が来た、と思った。そんな気はしていたのだ、ここ最近はいや、本当は出会ったときから予感していたのかも知れない。彼が、彼ほどの男が、私如きに縛られているはずはないのだ。浮気相手の一人や二人、いやむしろ本命の一人くらいいて当然だった。

「おーい、テレビ見ないのー？」

「お父さん、お母さん怒ってるよ」

「えっ。俺何もしてないぞ。シンヤ、服汚したんだろ」

「違うし！」

「ははは」

そうだ、無駄だったのだ。ここまで私のやってきたことは、全て無意味だった。そもそも、何のためにやっていたんだっけ？ 私は

…

「………………。…………？」

分からなくなっていました。十年間なんて、夫婦の仲が冷めるには十分な時間だ。だが、私は変わったたのだろうか。ひたすら働いて稼いで貯め込んで、何か忘れたような気もするがそれが何かすら忘れてしまった。

もう、疲れた。どうでもいい。

「あ、今日休み？」

出勤日だと知っている癖に、彼はそんなことを言う。私は返事をしなかった。寝起きで機嫌が悪いフリをして、布団を深く被る。

「じゃ行つてきまーす。あ、そうだ、今週の日曜時間空けられない？ ちょっと行きたいところあるから。考えといてねヨロシク！」

早口に言つて出て行く彼を、初めて無視した。

行きたい場所とは、彼の相手と関係があるのか。彼は真面目なところがあから、私に話しておこうと考えたのか。そんなことを考えて、思わず自嘲の笑みが浮かんだ。

一週間丸々、仕事を休んだ。会社にはインフルエンザだと言った。診断書がないと分かったら首になるだろうか？ 構うもんか。

彼は私を気遣つて、さりげない昔話や笑い話を繰り返したが、困惑していることが伝わってきた。困惑？ 何に？ どうせ私が隠してきたものは、彼には見えているだろうに。

「……………」

振りかけられる笑顔から庇うように、頭を枕に埋めた。

日曜日。

彼が表に停めた車に乗り込む。息子のシンヤも、妙にそわそわと助手席に座った。シンヤを連れて行くということは、どうやら終了宣言は免れたのか。

高速道路をしばらく行くと、雑談を続けていた彼がふと口調を変えた。

「文恵。俺、ちょっと謝らなきゃいけないんだけどさ」

…………… ああ。そうか、ここまでか。

「うん、何？」

「今まで、なんかずっと頑張ってくれてたよな。遊ぶ時間とかなかったし。おかげで貯金も出来たし、すげー助かった。感謝してるよ、マジで。ありがとう」

こつという男だ。器用で、優しくて、残酷なんだ。

「今更何だけどき。結婚して良かったと思う。生活が楽になったのもあるけど、ホラ、文恵ってあんまり必死で働くタイプみたいなイメージなくてね、ごめん。新しい面見れたっつーか、なんか、俺の影響かなとか妄想したりとかしてただけだ」

窓の外の景色が変わり始めた。ビルや住宅街が消え、高い木々の間から海の青が覗く。何だか見覚えがあるような気もする。

「で、俺も頑張ろうってなって。帰ったら文恵がいて、やっぱりそれでやる気出たと思うし、出世できたのも文恵のおかげだと思う」

インターチェンジを抜けてしばらく走ると、海に囲まれた高台が見えた。思い出した　学生頃、よく皆で来ていた港沿いの公園だ。

「ここ、覚えてる？」

「……うん、懐かしい」

彼は車を止め、後部座席の私を連れ出した。潮風が髪をなぶり、頬にまとわりつかせる。助手席から飛び降りたシンヤが、浜辺の方に飛び出したそうにしながら、彼の後ろで大人しく指をくわえた。相変わらず、ゴミが多い。足元に転がってきた紙屑を軽く蹴飛ばした。

「ごめん、文恵」

「いいよ。わかってる」

「……ごめん。気付いてただけで、なんか言えなくて」

真面目で、静かだけれど重い声。初めて聞いたかも知れない。

全部おしまいだ。私の年月が、泡になって消える。目を瞑って、海鳥の声を聞いた。

「……最近、疲れてたよね。ずっと無理してたんしょ？　働き過ぎなんだよ」

またか。もういい。優しくするな。私は唇を噛んだ。惨めさがどんどん、肺の中の空気を食い尽くして広がっていく。

「嬉しかったし、凄いと思った。尊敬した。だけどちょっと悲しか

ったんだよな。あんまり目合わせてくれなくなったから。だからもう、頑張らなくていいよ」

それが理由か。いや、きつときっかけに過ぎない。私には無理だった、それだけだ。

「文恵」

なんでそんな、真剣な声で。私はもう、

「文恵。俺の顔見てよ」 突然、両頬を挟まれた。息の掛かりそうな距離に、彼の顔があった。

「……」

「ありがとう。ごめんね。それから、誕生日おめでとう」

微笑んだ。

久し振りに近くで見る彼の目は、潤いを湛えていた。本当に綺麗な目で、私はこの目をずっと向けられていながら、たった一度でも真正面から見据えたことがなかったなんて今更気付かされた。

確信した。確信できてしまった。彼は私を

「大好き」

条件なんて必要ない。経験なんて関係ない。二人になったんだから、二人でやっていけば良かった。ただそれだけだ。本当に欲しかったものは、とっくに手に入れていたのに。

「ホントごめん。嬉しくてさ。気持ちに水差したくなくて。でももう無理すんな」

「お母さん、おめでとう！」

シンヤが、小さな背中から包みを取り出して差し出した。受け取ると、しっかりとした重みが掌に伝わる。

「これ……」

「後で開けて」

彼は頭を掻いた。

「あり、がとう……」

「いいって。つかさ、俺の貯金今ちょっとピンチでさ。……しばらく文恵からお小遣い貰いたいんだよね……だから、プレゼント兼

お詫び。ほんとつまらんもんだから」

「……へへ、」

うまく笑えなかった。

「それよりほんとに、あんまり無理すんなよ」

照れ笑い。これも初めて見た気がする。私はいくつの笑顔を見逃してきたのだろう。彼に追いつけないとか、本心が分からないとか、

何言ってやがる、馬鹿野郎

内心口汚く罵って、辛うじて、苦笑を浮かべた。

83・earn(後書き)

「」をもつける「、

」をかせぐ「、

」を得る「。

重厚なデザインのドアを三度ノックする。「入りたまえ」と、いつもの厳めしい声がしたが、その声色はどこか機嫌が良さそうだった。

「失礼します」

入室して一礼すると、社長はひとつ頷いてから人の良さそうな笑みを浮かべた。

「おめでとう、鬼頭君。君にいい話が来たんだ。出世だぞ。転勤先は天国のような所だそうだ」

「天国、ですか？」

僕は首を傾げた。この地の底のブラック会社の系列に、なぜ天国があるんだ。

「いや、先方からどうしても言うもんだからね。君、噂になってるんだよ。人柄が良くて、お客にも新人にも親切だってね。正直ウチにいてもらうのが申し訳ないぐらいの人材だと、私は思ってる。そんなわけだからね、先方たつての願いだから。転勤の手配はこちらで済ませるから、すぐに身辺整理したまえ」

社長はにこにここと笑っている。嫌な予感がした。

「あのう、」

「私もね！ 君はウチには向いてないんじゃないかって思ってたんだ。聞けば同僚ともうまくいってないそうじゃないか？ オマケに君だから言うんだが、ウチはこの不況で青息吐息だ。こんな環境じゃ仕事にも差し支えがあるだろう」

やはりだ。そういうことか。

「辞退させていただきませう」

何っ、と、社長と秘書が顔色を変えた。

「ありがたいお話なのですが、私は先方様のような環境では働きません」

「な、何故だね？ 向こうは明るいぞ！ 建物も社員も、客だってだ。『幸せを提供する企業』とまで言われてるのに」

「ほら、そうじゃないですか」

「何がだ？」

「天国なんだろう、転勤先は」

社長の目に動揺が走った。

「い、いや……だから、天国にも等しい、快適なんだな……」

「そんな職場にこの社から行けるわけがない。これは体のいい厄介払いだ！……そうじゃないですか？」

社長は笑みを消し、恐ろしい形相を浮かべた。

「……だったらなんだね。辞退など許すはずがないだろう。いいか、君のような勤務態度では困るのだよ。周りを見てみる、あのキビキビした厳しい態度を。慈悲なんぞ反吐が出る！ ここをどこだと思っっているんだ？」

ニヤリと。社長は片頬を上げ、邪悪な笑みを浮かべた。途端、社長に仕える悪魔が僕を羽交い締めにする。

「や、やめる！ 死にたくない！」

社長が低い笑い声を上げた。

「君は、地獄にはふさわしくない。天国で身も心も洗ってもらうがいい。まあ、清らかな部分など我々には無いのだがね」

高笑いを背中に聞きながら、僕は目の前に出現した天国への扉に吸い込まれていった。

84. decline (後書き)

「衰退する」

「低下する」

「を辞退する」。

そんなもの貰えせんよ。

私の人生で、最も多く聞いてきた台詞だ。若い頃は聞く度に、柔らかな慈悲の光が心いっぱいに広がったものだった。

「いいんですよ。僕はまだ余裕があるから」

そう言っただけな物を、押しつけるようにして恵んできた。相手の礼が終わるのも待たず、背中を向け立ち去るときの清々しい快さ！ 私はまるでマザー・テレサにでもなったような気がしていた。

だが、年を経るに連れ、その台詞が私に施しを要求するように響いてきた。私はひねくれた自尊心で、「貧しい」者達の本心や、過去の自分の志すら疑った。顔に皺が増える頃になって、やっと、自らがどのような支配構造を作り出してきたか分かったのだ。

だが、私の返答は常に、同じ優しい声音で繰り返された。誰でもない、自分自身が自らにそれを要求し続けたのだ。

私には余裕があった。あり続けた。死の間際である今になってすら、使いきれなかった余裕があちこちにこびりついている。私の顔を覗き込む親族達の目にも、それがどんよりと映し出されていた。使い切ってしまうれば良かったのだ。血反吐を吐くような使い方をして、空っぽになって死にたかった。今はただ、手足が腐った泥のように重い。なのに、私の口は、私の表情は、何万回と繰り返した笑顔を作るのだった。

「皆さんに……私の、財産を分配する。よく、聞きなさい……家の金とは別に、隠し金がある」

皆が色めき立ったのが分かった。勿論ざわついたりはしないものの、気配が明らかに変わった。

もはや、誰も、口先だけの遠慮すら口に出さない。

諦めて、一度目を閉じた。何人かが「お父さん！」などと焦って呼ぶ。心配せずとも、私は今日、初めて無一文になれるのだ。それ

までは喋り続けなくてはならない。

ゆっくりと目を開けた。

「……？」

意外にも、最も近くに座っていたのは、先程までいた長男ではなく隅に控えていたはずの姪だった。彼女は醒めた目をして、こう言った。

「そんなもの、貰えせんわ」

遠慮でもない。

媚びでもない。

その言葉は、心底からの、軽蔑だった。まだ十七の筈の彼女は、既に私の本質を見抜いていたのだ。

体が一気に軽くなり、顔面から力が抜けるのが分かった。私は初めて、心をそのまま言葉に乗せた。力強い声が出た。

「よろしい。坂巻歩美、君に私の隠し財産をすべてやろう。好きに使え、燃やしても構わん」

あっけにとられた他の連中の顔を見て、私は天井を突き抜けながら腹を抱えて笑っていた。

85・afford(後書き)

「」をする余裕がある「、

」を与える。」。

気がつくとは私は、彼女と二人きりだった。周りには何もない。広いとも狭いともわからない。ただ、二人が顔を付き合わせているだけだった。

「ここはどこ？」

私は尋ねた。

「さあ」

彼女は答えた。互いの声は、一片の曇りもなく良く聞こえた。他に聞こえる音がないからだ。

しばらく、自分を見たり彼女を見たりして過ごした。長い時間が過ぎたが、その間私達は一言も喋らなかった。

「ねえ、私のこと好き？」

ふいに尋ねられ、私は彼女を凝視した。

「不思議だ」

私は言った。ずっと喋っていなかったせいで、喉が張り付いた。

「君がとても綺麗に見える」

「そう」

くすくすくす、と彼女は笑った。私は彼女を見つめ続けた。彼女に触れようと思ったが、出来なかった。

「こっちに来てよ」

私は頼んだ。彼女は動かさず、ただ私を見て言った。

「どうして？ 寂しくなんかないわ。私はあなただもの」

それきり、また私たちは黙って見つめあった。私は自分の体を確かめるのを忘れた。彼女は始終微笑を浮かべていた。吸い込まれそうな微笑を。

いつしか、体を動かす方法も忘れていた。

彼女は私の全てになった。彼女を見つめ続けることで、私は私を確かめた。けれど、私の顔はどんなだったろう？ どんな鼻で、どんな髪で、どんな目で、どんな肌だったろう？ 私は、何だったろう？

「……………」

なんだ、なにも不安がる事はなかった。こんなところに鏡があるじゃないか。

けれど、この物体は何だろう？ 縦長の胴体に、下から二本、脇から二本、棒切れが生えている。上には丸いようなのがちょこんと乗って、全体と違う色の細いものの束がてっぺんからふさふさと生えている。

あの赤いのは？

あの穴は何だ？

穴、とは何だ？

色、とは？

「？」は何だ？

形が……

妙な感じだ。これはなんだ。わたしはなんだ。なにがなんだかわからない。どうやらとけている。とけていく。きえていく。

なんだかひどくいいきもちだ。もうなんでもいいや。

そして、誰もいなくなった。

86・confuse(後書き)

「」を当惑させる、

「」を混乱させる、

「」を混同する。

今日、ぼくはおじいちゃんといっしょに同そう会をやりました。

同そう会というのは、おじいちゃんが子どもだったころに、友だちも子どもだったので、同じ学校にかよっていたのです。おじいちゃんになると、ひさしぶりに会うのでうれしいと言いました。おじいちゃんは、学校がと中やめになったので、そつぎよう式をしていない。それでうれしいそうです。

びょういんは大ぜいの人がいるので、しずかにしてねとたのみました。おじいさんやおばあさんが大ぜい来たので、びょう室が一ぱいになってしまいました。みんな、おみやげとかりょうりをたくさん持ってきていたので、それを、見たり食べたりしてさわいだので、ちよつとうるさかった。

でもすこしたのしかったです。いつもはおじいちゃんがお見まいに来ますが、2人ではなしますが、おじいちゃんのむかしはなしは、あまりおもしろくないからです。それと、おじいちゃんがかえると1人になるからです。同そう会は大ぜいだったので、色んなはなしがして、ずっと大ぜいでいました。

ぼくは食べものがほしいと思いましたが、おい者さんがだめだと言います。それで、ぼくのうでにちゅうしゃして、えいようをとると言います。でも、口から食べないのでわかりません。ぼくはへんなのかな、と思います。おじいちゃんはへんじゃないと言っているのでいいのです。

おじいちゃんは大ぜいの人とはなして、わらったり、ないたり、していました。これも、ぼくのうれしかった一つです。おじいちゃん

んは、びょういんの人にむしされるからです。うけつけのかんごふさんが、返じをしないのに、きれいな人なので、おじいちゃんはおちこみました。それでぼくに、「れいかん」とかがないと言ってもんくを言いました。同そう生の人たちは、「れいかん」がある。おじいちゃんとはなしたからです。ぼくは「れいかん」がなにかわかわらないのです。ぼくもあるのか？ わかりません。

十じくらいになって、

「そろそろおひらきだ」

とおじいちゃんが言いました。みんなかえりそうなので、かなしいと思いました。ぼくはあるけないので、みんなといっしょにかえれないからです。

でもほんとうは、あるいてかえるのではなかったので、ぼくはびつくりしました。おじいちゃんたちの体がぼんやりして、むこうのかべが見えました。ぼくはとても心ぱいしましたが、みんなはわらっていたので、大じょうぶだったのです。

「今まで長かった。しよくん、そつぎようおめでとつ」

と、おじいちゃんが言いました。

「おめでとつ」

と、みんなも言いました。それから、おじいちゃんがぼくを見ました。

「ありがとうな。おまえがみんなをよんでくれたんだよ」

ぼくは、ぼくなにもしてないよ、と心の中で思いました。おじいちゃんとはなすのは、心の中で思うのがはやいです。それで、思うと、おじいちゃんはいっこり笑いました。

「いや、してくれたよ。ほんとうにありがとう。おつかれさま」

それから、ぼくのほうに手をだしました。

「やっとなんで行ける。いっしょに来るか？」

おじいちゃんにきかれて、うん、と思いましたが、ぼくは体がうごかないのでだめだと思いました。そしたら、おじいちゃんが手にぎってくれて、きゅうに体がうごきます。ベッドのよこに立ちました。ぼくはとてもうれしくなったので、ぴよんぴよんとびました。「ぼつやもいっしょにそつきょうするのね」と、やさしそつなおばあさんが言ったので、わかりませんでした。ぼくはうん、と言いました。それから、おじいちゃんたちについて行きました。

そつきょうは、とてもたのしかったです。

87 . g g r a d u a t e (後書き)

「 . f r o m A (A を卒業する) 」。

俺はひとつの所に留まるのが嫌いだ。というより、大昔からそう、人間が地面を掘って光り物を探し始めたころから、俺の運命は決まっていたのかも知れない。

俺はいつでも世界中を飛び回ってる。ある時は飛行機で、ある時は船で、またある時は繁華街を根城にする女の懐の中で。

この女つてのが曲者だ。いつだって俺を欲しがるとし、いつまでだつて持っていたがる。俺はそんなのはゴメンなんだ。その内六十億人の俺に憧れる馬鹿面をコンプリートするのが夢なんだからよ。

無謀な夢か？ そうでもないさ。現に俺の力を欲しがるとし、女に限らずどこにでも居る。政治家、技術屋、石油王からスラムの住人まで、大体は俺を利用して利益を得ようつて奴ばかりだ。俺はそいつらの必要に応じ、様々に姿を変えてきた。ある時は袋詰めで運ばれて取引の道具になり、ある時は成金野郎の指をくわえ、ある時は女の耳元に声を届ける。

俺自身、そんな生活を楽しんでもいた。自在な自分を、自分に向けられる馬鹿な連中の欲丸出しの目を。世界広しと言えど、俺の他にこんなに人の本性に近づいた奴はいないだろう。

なぜなら、俺は「金」だからだ。コイン、延べ棒、指輪、金箔、携帯電話の部品までなんでもあり。人間の歴史がいかに長かろうが興味はないが、俺に刺激をくれたことには感謝してもいい。おかげで随分と経験も積めたし、演技の術も身についた。スレた、などは思わない。連中の求めに応じてくるくる表情を変えるのが好きで、楽しいからだ。

なのに。

ここ七十年ほど、俺はひとつ所に留まっている。七光り坊主が、偏屈な富豪爺になる程の時間だ。爺は俺を薄暗いところに閉じ込めて、ほんの時たま扉を開けちゃあ、薄汚くシミの浮いた顔を覗かせ

る。そして呟くのだ。

「金はいい。いつも純粹だ。お前は変わらないな、羨ましい」
よしてくれ。

俺がいくつの変化を潜ってきたと思ってるんだ。

腹が立って、せめてもの抵抗に俺は身を振る。そのせいで光った
体を 人間の女を象っている なでさすって、爺は臨終間近の
顔をニタつかせる。

いいぞ。

てめえが死ぬときは俺がそっちに倒れ込んでやる。血塗れになる
のも悪くないだろうさ。何せ俺は、決して、本当にマジで、純粹な
んかじゃないんだからな。

88・vary(後書き)

「変わる」、「
「を替える」。

昔々、一匹の臆病な狐がおった。狐には友達がおらず、また、大して強くも賢くもなかった。

だから狐は、せめて狡くなることにしたのだそう。

リスが落としたドングリを、こっそり拾ったり。

自分を苛める狐の奥さんにぺこぺこして調停を図ったり。

噂話に耳を澄ませて、死体があれば食いにいき、雛が孵れば太る時期まで待つてから頂いたり。

そんなことを独りでやっている、狐は、とても寂しくて惨めな気持ちになってしまった。本当は他の仲間も同じようなことをしていたのだが、狐だけは知らなかったからのう。

そんな狐の寂しさを唯一埋めてくれたのは、一匹の虎だった。

虎と言っても、毛皮の虎で生きちゃあいない。けれど狐は、寒い冬は虎にくるまり、苛めが増える夏には穴の中で二人きりになって、心と体をなぐさめておった。

ある日、その時は秋だったのだが、狐はあまり寒いので虎の毛皮を被って外に出た。すると不思議なことに、周りの動物達が自分を見ると逃げていく。最初はなんだか分からなかったが、池に映った自分を見て合点がいった。

そこに立っていたのは、どう見ても立派な雄の虎だったのじゃ。

狐は、わけが分かると急にうきうきし始めた。この惨めな自分が、皆に恐れられる！と、すっかり良い気分になってしまった。狐は秋の間中、虎の毛皮であたりを闊歩したそう。

そうするうち、やがて冬がきた。

狐はいつも通り、動物達を脅かして食べ物をせびろうと外へ出た。ところが、何だか様子がおかしい。森が、しんと静まり返っていった。

元々の臆病を少しばかり取り戻して、狐はあたりを伺いながら木

陰を歩いた。けれど、うつかりしておったことには、毛皮の獣臭で鼻が利かなくなっておったんじゃ。

ターーン！

突然銃声が響き、狐はその場に倒れ込んだ。しばらくは何がなんだかわからず、もがいておったが、やがて何人もの人間の気配が近づいてきた。

「やれやれ、本当にホワイトタイガーが居るなんてな。どこから紛れ込んだのかな」

「まあ、可哀想でしたけど、生態系を壊す前に何とか出来て良かった。ところで、毛皮を欲しがってる人がいるんですけどっけ」

「そうそう。丸ごとは無理だから、皮を剥がして持って帰ろう。…

…あれっ？」

人間のひとりが、毛皮の頭を持ち上げて驚き、それから大笑いした。

「見るよ！ 信じられない、凄いぞ、こいつは狐だ！ まさに『虎の威を借る狐』ってところだ」

「ははあ、知恵があるんですね。しかし可哀想なことをしたなあ」
狐は、胸から血を流して今にも息絶えるところだった。けれどあんまり腹が立ったので、力を振り絞って、こう言ってやった。

お前らこそ、虎の衣を狩る人間じゃないか！

そんなふうには誰かに怒鳴ったのは、生まれて初めてだったそう。狐は、すっきりと全身の力を抜いて、事切れた。

もちろん人間達には、それは獣の断末魔としか聞こえなかったそう。

89・remove(後書き)

「」を移す「」、
「」を取り去る「」、
「」を脱ぐ「」。

ある保育園で、二人の園児が喧嘩をした。たんこぶや鼻血レベルの騒動になって、それぞれの母親は急いで飛んできた。

「外で遊具の取り合いになっちゃったみたいなんですけど……お母さん方、あまりキツく叱らないようにしてあげて下さい。あの子達、最近気が立ってるみたいですから」

母親達は、もちろん、と頷いた。自分達の子供はまだ幼く、保護してやらなくてはならないのだ。

それぞれの子を連れ帰ると、彼女らはよく言って聞かせた。

「いい、もう喧嘩なんてしちゃだめよ。怪我したらみんな心配するでしょう」

子供は膨れていたが、次の日になるともうけろりとしていた。けれど、気を抜かずにちゃんと見ていてやらなくてはならない。なにしろ子供は純粹で、無知で、傷つきやすいのだ。

保育園はちょうど冬休みに入っていた。子供たちは互いに会う機会が少なくなっただが、母親同士は年末の準備のため、スーパーではったりということもよくあった。

「あら、佐藤さんの」

「まあ、鈴木さん」

「この前はうちの子がご迷惑をお掛けして、本当にすみませんでした」

「いいえ、こちらこそ。難しい年頃で、困っちゃうわ」

「本当ですよねえ。普段からうちの子、おたくのお子さんと仲悪いみたいで」

「あら。それでかしら」

「何です?」

「うちの子ったら、けんちゃんが先に乱暴したんだって言い張ってますの」

「……そうなの。その調子だと、すぐ会わせるのは良くないかしらね。うちの子もデリケートだから」

「そうねえ。私達が仲介役になってあげないと」

「ええ」

「……」

「……」

「じゃ、失礼しますわ」

「ええ、また」

二人は家につくと、早速子供に喧嘩当日のことを詳しく問いただした。決して焦らないよう、猫なで声で。

「もしもし、鈴木です」

「あら、昨日ぶり。どう？ 話は聞けた？」

「ええ、でもおかしいわ。手を出したのはりょうちゃんの方ですって」

「あーそう……」

二人の母親は、しばらく互いに困ったわね、困ったわねと言い合っつて電話を切った。「けんちゃん」の母親は、息子がスカートの裾を引っ張っているのに気付くと、しゃがんで目の高さを合わせた。

「なあに？」

「あのね、ぼくね、りょうくんのこと……」

言葉が見つからないのかもじもじと俯いた息子を、母親は抱き締めた。そう、子供にはたっぷり愛情を注ぎ、スキンシップしなければならぬのだ。

「大丈夫よ。全部うまく行く。お母さんが守ってあげるから、何も怖くないからね」

息子はなにがなんだかわからず、目を白黒させていたが、やがて母親を抱き返すことを選んだ。

次の日から、母親同士の壮絶な舌戦が始まった。両者、「息子はそっちが悪いと主張している」と言っつて譲らない。当然だ。息子が誰かを傷つけたり、傷つけられたりする事態は、何が何でも回避し

なければならぬ。

冬が終わり、春が来て、夏が過ぎ、秋になり、また冬が来た。それが何回も繰り返された。二人の子供は、母親同士の空気にあてられて互いに距離を取り、いつしか目も合わせない仲になった。息子たちがいかなる争いにも巻き込まれず大学に進んだとき、母親たちはどれだけ安心したことがか。

しかし平和は、いつの世も長くは続かない。

それは、息子の代の、成人式後の同窓会でのことだった。ひとりずつ現状報告を行っていたときに、片方の息子がこう言ったのだ。

「十何年間話したことがない佐藤と話してみたい」

居合わせた母親達は大慌てで、会の間中二人を十メートル以上近づけないように引つ張り回した。そうするうちに会が終わり、片方の親子が連れ立って先に会場を出る。もう片方の母親はほっとして、息子に待っているよう言いつけて、トイレに向かった。

それが油断だった。

戻ってみると息子はおらず、外に出てみれば、二人は喧嘩をしていたのである。大の男二人を、もうひとりの母親は止めようにも止められず、膝を折ったままおろおろしていた。

二人の喧嘩は、もちろん口論などではなかった。それどころか、掴み合いや揉み合いでさえない。

片方が殴りくればもう片方はノーガードでそれを受け、それから殴り返す。その繰り返しだった。

「いてえよバカ！」

「俺の方がいてえよ！」

「野郎！」

「てめえ！」

「無視しやがって！」

「そつちこそ！」

まばらに残っていた同窓生達は、ある者はドン引きで、またある

者は面白半分に、いつ終わるとも知れない殴り合いを見物していた。「やめて……誰か止めて！　うちの子は悪くないの！　ああ怪我してる！」

母親の必死の訴えは、誰の耳にも届いていなかった。息子たちは、拳を振りかぶる。

「保育園のつ、ゼエゼエ、悪かったのは俺だああああ！」

「いや、ハアハア、俺が悪かったああああ！」

その一発ずつを最後に、汗と血を撒き散らしながら、二人はその場に倒れ込んだ。しばらく沈黙が流れる。やがて、どちらからともなく喉を鳴らし始め、最後には揃って大笑いした。同窓生たちは呆れ果てながら、これまた笑っていた。

「なんだお前らー80年代か！」

「マジ寒いわー」

「ばーか」

「おい親倒れてんぞー」

その通り、仰向けになった二人から離れて、母親たちもまた仲良く並んで泡を吹いていた。

9 0 . i n s i s t (後書き)

「と主張する」、
「言う張る」。

91. examine

簡易説明書

step1 調査

まずは全体像を掴みましょう。特に初めての人は、キャストオフ状態での作業が望ましいでしょう。また、この第一段階での情報量次第で以降の作業効率が変わります。余り時間を掛けないように多方面からの観察を心がけましょう。

次に、各部の詳細を調べます。このとき、調査中であることはある程度隠蔽しましょう。また、本体に刺激を与えすぎると、最終段階までに正しい手順が踏めなくなる恐れがあります。慎重かつスムーズに作業してください。

調査結果はイメージ上にマッピングしておきましょう。

step2 検査

マップを元に各部の反応性と動作特徴を確認しましょう。特に強い反応が見られる箇所には、周辺・末端部から中心部へ向かう螺旋状接触が最適となります。

また、口辺部や供給ポトル先端は常時反応性が高いため、定期的な接触することで結合部の潤滑剤を供給させることができます。

尚、既使用品の場合、前ユーザーによる入力データが蓄積されています。自動的に模擬反応が行われることがあるので、それを避けたい方はリセットあるいは反応領域の拡大を行きましょう。

step3 試験

結合部の準備確認が終わったら、ジャックインを開始します。こ

の前段階で反応強化をはかることも出来ませんが、接触による口辺部の汚染には充分注意しましょう。

未使用品の場合、使用者に苦痛を伴わせるケースがあります。潤滑剤の増量、或いは追加を行いましょう。

全ての準備が整ったら、慎重かつワイルドに「ピー」「し」、「ピー」「運動によって双方の「ピー」到達をはかります。なるべく同時に「ピー」ように調整して下さい。到達後は自動処理機能を発動させるか、手動で洗浄してください。尚、親密性を上げる場合は手動をお勧めします。

よい「ピー」ライフのために

『ピーの使い方』

91・examine(後書き)

「」を調査する「」、
「」を検査する「」、
「」を試験する「」。

「はい、目を閉じてリラックスして下さい」

低く落ち着いた声が、半球状の天蓋から降ってくる。私はその言葉通り、ゆるく目を瞑った。

「深呼吸して……吐いて……吸って……吐いて……もう一度……。自分の鼓動が聞こえますか？」

天蓋に設置されているだろうカメラに向かって、私は小さく頷いた。やや早い心音が、腹の底から指先まで丁寧に巡っている。

こういうときは落ち着かないといけないのだから、私は嫌が上にも高まる期待に、頬が弛むのを抑えられなかった。

もうすぐ、全部思い出せる。

「あなたは今、二十歳です。……十九歳。十七歳。十五歳。十歳……さあ、あなたは落ちていきます。どんどん落ちる……底がない……まだ落ちる……」

まるで本当に落ちているかのような、不思議な浮遊感。恐怖と快感が脳を駆け巡る。私の中に、鮮やかな記憶の海がなだれ込み、そして突如、全てが弾け散った。

「うわちゃー、やべえ。やっちまったあ」

「所長！ やっちまったじゃないでしょ！ 早く死体回収しないと」

「あーあ、やなんだよなあ……」

モニターを見ていた二人の男は、急ぎ足に部屋を出ていった。向かう先には、断崖絶壁のスロープの底に落ちて粉々になった球体。それを支えるはずだった牽引装置はちぎれてしまっている。

「ねえ、いい加減やめませんか？ 記憶を取り戻すなんつって、ホントに走馬灯見せてんじゃ洒落にならないですよ」

「いいじゃないの、どーせ思い出に頼らなきゃ生きられない連中なんだから」

「……やれやれ」

事務室の壁にびっしり書かれた予約を思い出して、男たちは肩をすくめた。

929. r e m i n d (後書)

(A of B)「AにBのりを思はれたる」。

僕は食品会社の広報担当だ。CMの売り込みだとか、色んな仕事をしている。社内では割と若い方だがキャリアは積んできたつもりだ。自信はあるし、仕事に誇りも持っている。社の経営理念に従い、お客様に食べる楽しみと喜びを提供してきたつもりだ。

それが、どうしてこうなった？

「いいな、分かったな。あの番組の提供をやめさせるんだ」

目の前でドスの利いた声を響かせる、大柄な女。僕はと言えば、椅子に座らされ両手両足を括り付けられている。

女が言う番組とは、毎回一般公募者や芸能人から選んだ女性をメイクやコーディネートで美人に仕立てようというコンセプトで、コメディ色が強いが人気のある番組だ。何しろ選ばれるのは大抵「女を捨てた」感じのあっけらかんとした、「私はブスだ」と笑って言える類の女性ばかりだから、見る側の抵抗も少ないのだ。

と、思っていたが。

「分かったのか？ 返事をしろ返事を！」

女の主張はこうだ。

あの番組は、美人でない一般女性を不当に貶め、過剰に美の価値を上げようとするあくどい番組だ。皆の心の健康のためにも、即刻放映中止すべきである。だからスポンサーは手を引け。

「……」

包丁を突きつけられてはため息をつくのもままならない。だが、僕も下がるわけにはいかなかった。

「申し訳ありませんが、そのご提案は受け入れかねます」

「なんだと？」

女が目を吊り上げた。

「殺すぞ、お前」

「仰ることは分かりましたが、スポンサーと番組は互いに助け合っ

ているのです。大勢の人が損益を被ることになりますから、今は撤退は出来ません。それに……」

「なんだ」

「私見ですが、あれはそれほど悪い番組ではないと思いますよ。視聴者様のご意見の中には、『ブスだけど笑った』『励まされた』というものが多く含まれるようです。ですから一種の社会貢献とも「
「違う！」

女が喚いた。

「ああいう番組を作り出すメディアが、そもそもブスだの美人だのつて基準を生んでるんだ！ そのせいで女は、いやブスは、悩んだり諦めたりしなきゃいけない。そんな基準下らないんだよ！ マスコミの糞共、糞番組に金を寄付する糞共、みんな糞ばっかりだ、畜生め」

女は怒りに拳を震わせている。なんとか説得しようと、僕は必死に言葉を繋いだ。

「そうかもしれませんが、しかしメディアが減ぶことはまずないでしょうし、滅んだとしても基準作りは終わりませんよ。もし悔しく思われるのであれば、開き直るか努力なさればよろしいでしょう、整った顔立ちでいらっしやるんですから」

言ってからハツとした。女の顔が凍り付いている。まずかったか、と思ったが、逆にチャンスかもと考えなおした。

「何だったらいいいメイク屋を紹介しますよ。あなただっていじれば人並み以上に……」

「う、うるさい！ そういうのが違うって言うてんだ！ 並だの上だの決めるから誰かが惨めな思いをするっ」

「でもあなたはしない」

僕は緊張を押し殺し、笑って見せた。

「あなたは惨めにならなくていい。僕が保証します。僕が責任を持つて、あなたを飛びきりの美人にしますよ」

女は赤くなったり青くなったりと百面相を見せてから、ヒステリ

ツクに叫んだ。

「なによ、お前なんかそんな顔の癖に！」

僕は微笑を浮かべて見せた。

「あなたも持つてるじゃないですか……基準」

女は口を噤んで棒立ちになり、それからぐったりとうなだれた。

僕は内心でガッツポーズをとった。実際の所、女は肌の白いすっぴん美人でそれ故に苦労したかとも推測できる。そんな女を手の内に出来たわけだから、あの若干下品な番組も僕に貢献してくれたというわけだ。

縄を解かれながら、僕は早くもCM出演の交渉を始めていた。

93・contribute(後書き)

(-to A)「Aに貢献する、」

「Aの一因となる、」

(-A to B)「AをBに寄付する、」

「AをBに提供する、」。

厄年なのだと思った。

思い返してみれば、正月から門松で怪我をしたり決算期に細かいミスを連発したりと、不運なことがよく起こったのだ。だから、厄年なのだ、と。

「可哀想なことしたわね」

飼い猫の墓の前にしゃがんで、姉が呟いた。

「猫は気まぐれって言うけど、もう少し見ててあげたらよかった」
僕は姉の横顔を見、その目が何度か瞬かれるのを見て、墓に目を戻した。

うちで飼っている猫は、三匹だった。そのうち二匹が今年亡くなり、今は一匹しかいない。二匹とも寿命ではなく、不慮の事故だった。

「ほんとに、なんでこう急なのかな……」

姉が独り言のようにか細い声を出した。

「そうか。そりゃ気の毒だったな」

向かいに座った友人が、そう言ってコップに控え目に口をつけた。
「そうなんだ、姉さんもあの歳で独り身だからさ。直接言わないけど寂しいんじゃないかな」

「ふうん……俺が貰ってやるうか」

「よせよ、気持ち悪い」

「冗談だ」

口の端で笑った友人は、しかしふと、固い表情になって顔を寄せた。

「それにしてもさ」

と、友人が言う。

「妙だよな。この所、急死するペットが増えてるらしいんだけどさ。なんでもその殆どが、お前んとこみたいな死に方らしいんだ」

「え？」

友人は、更に声を低めた。

「つまりさ。他の野生動物に襲われて、食われたり傷が元で死ぬケースが、異常に多いんだよ」

「多い、って……」

僕は半ば呆れて、重大な秘密を語るような表情の友人を見た。

「偶然だろ。例えば気候とか、自然界のバランスが崩れたとか。気が荒くなって人里まで来ちゃったのかも知れない」

「そう、そこだよ」

我が意を得たりとばかりに友人は人差し指を立てた。

「自然界のバランスは崩れてる。なら崩したのは誰だ？ 言わずもがなだ。動物達は、人間のペットを襲うことで何かを訴えてるんじゃないかと俺は考えてる」

「何かって」

「怒りとか、警告とかさ。色々あんだろ。お前も気をつけろよ。ちやんと三匹目は見張つといた方がいい。言葉は悪いが、見せしめにやられる恐れがある」

真剣ぶつた友人の話を聞くうちに、僕はだんだん腹が立ち始めていた。どうもこの男、面白がっているようにしか思えない。

「そうか」

僕は立ち上がり、財布を取り出した。

「ご忠告ありがとう。心配は嬉しいが、うちの子はちゃんと守るから大丈夫だ。その持論は新聞にでも持ち込んだらどうか。ごちそうさま」

「ん……？ おいどうした。何怒ってんだよ。おーい！」

自分の分の料金をテーブルに置き、僕はさっさと店を後にした。

それから数週間、多少の不運を除けば何事もなく年は過ぎ、今年も残すところ十日となった。居間に座りっぱなしの炬燵には、姉と僕、それに三毛猫のマキがくつろいでいる。この冬は寒かったせい、マキもあまり外出しなかったため、ある程度安心して見ていられた。

なんだ、何もなかったな。

そう思つてふと、カフェで別れたきりの友人のことを思い出した。あの時は二匹が亡くなって気が立っていたため、言い過ぎたかも知れない。詫びようと思ひ、電話を手に取った。

『はい、T塚です』

受話器を取ったのは女性だった。初めて聞いた声だったため、若干緊張する。

「あ、M原と申しますが高志さんおられますか？ S大時代の友人なんです」

ところが、返ってきたのは予想外の言葉だった。

『主人は……亡くなりました』

「え？」

僕は間抜けに聞き返した。そんな馬鹿な。

しばらくして正気に帰ると、奥さんらしい女性を質問責めにした。答える女性のほうも、どうやらまだ気持ちの整理がついていないといった様子だったが、訥々と訳を話してくれた。

友人が亡くなったのは三日前。仕事帰りに、道路脇から飛び出してきた犬に噛み殺された。犬は近隣住民のペットで、飼い主によると、事件前日までは妙な様子はなく、それどころか普段は尻尾を丸めて黙ってばかりの大人しい犬だという。

「……ご冥福を、お祈りします」

それだけ言つて、電話を切った。言葉が出てこない。友人が面白そうに語っていた都市伝説紛いの話や、亡くした猫達の顔が代わる

代わるに頭の中を巡っている。

馬鹿な。偶然だ。

混乱と不安で、僕はしばらくその場に立ち竦んでいた。

マキがいなくなったのは、翌日の晩だった。

部屋の暖かいところに丸まっているはずの姿が、屋内のどこにも見当たらない。友人の事件を聞いたためなのか余計に焦りが募り、僕と姉は慌てて家中を駆けずり回った。

「いないわ、私外見てくる！」

「あ、じゃあ裏から行ってみる」

「お願い」

言つが早いか、姉は懐中電灯を握り締めて夜の中へ駆け込んでいった。僕もすぐ、逆方向から家を出ようとして裏口の鍵を閉め、踵を返し、

思わず、立ち止まった。

闇の中に二つ、金色の目が輝いている。じつとこちらを見据え、動かない。

「……マキ？ マキだね？ おいで、外は寒いよ」

マキらしき影は低く喉を鳴らした。じゃれている時のものではなく、明らかに警戒と威嚇を表すものだ。

「マキ……どうしたんだよ。さあ、こっちに」

恐る恐る一步踏み出すと、マキは「フーツ」と怒りを露わにし、何歩か飛び下がったようだった。

慌てて追おうとした時には遅く、既にマキは身を翻し、闇の中に溶けてしまっていた。呆然と立ち尽くす僕の耳に、何十、何百という獣の鳴き声突き刺さる。

警告。

僕は殆ど逃げるようにして、裏口のノブに取りついた。この近郊

にはないはずの森のざわめきが、刃のように背なを撫でる。やっと
のことで裏口の向こうに滑り込み、堅く扉を閉めると、僕はその場
に座り込んでしまった。

にゃあお。

94・warn(後書き)

「」に警告する。

性犯罪。

西暦20XX年現在において、最も行政が敏感に取り締まっている犯罪である。かつて、そう、21世紀初頭の頃、街は淫らさに溢れていた。書店にもコンビニエンスにも扇情的な女性の絵が堂々と立ち並び、世の人間達の悪を煽り、子供達に悪影響を与えていたのだ。

だが、現代は違う。性的なものへの連想を人々から遠ざけるために、あらゆるメディアが厳しい規制を敷いているのだ。それこそアダルトビデオから、トンボの交尾に至るまで。

この規制は文化全体に大きな変化をもたらした。ファッションから都市イメージの形成まで、その影響は計り知れない。今やこの国の暮らしは、かつて全盛期の人が夢見た「近未来」そのものだった。身体を肉体的精神的に保護する、全身をカバーする衣服。銀色に光るビル群。空のチューブを飛ぶ車。

街は清潔・健康・健全な人間達で溢れている。一般人が時たま起こる犯罪や、その取り締まりの現場に居合わせることも滅多になく、子供達は無垢なまま知識を蓄えて社会に出て行くのだ。

ところでこの社会に暮らすある平均的男性は、妻を娶り初めての性交渉を迎えたとき、感激してこう叫んだという。

「オウ！ グレイト！ これが人と繋がるってことなんだネ！ ワンダフル、ミステリアス、とっても気持ちイイです！」

そのリアクションを受けて、下になった妻は一言こう言った。

「いいからどけよ包茎野郎」

彼女は侮辱罪で訴えられ、性犯罪取締法にも抵触したとして豚箱にプチ込まれた。護送車の中で治安維持警護官に向かって親指を立て、ふてぶてしくもこう言い放ったという。

「Fuck・n無菌室ベビーの童貞ども、卵子バンクの試験管とでもFuckしてな。ママのオツパイも吸ったことない幼児は国ごと滅んじまえ」

そして女は死刑になった。

ビフォア・アフター、日本は今日も平和である。

9 5 ・ c o n n e c t (後書き)

「
」をつなぐ、
」を関係づける、
」つながる。」。

二人の女がいた。器用で神経の細かい女と、大雑把で跳ね返りの女だ。

彼女らは幼なじみで親友で、大人になっても離れたことがない。幼い頃から、器用なほうの娘は不器用なほうの娘に様々な手作りの品を贈っていた。それは今、令嬢と雇われの仕立屋という形になって続いている。

「お嬢様、新しいお召し物です。いかがですか」

「まあ素敵！ ありがとうシャロル。それと、いつも言ってるけど『お嬢様』はやめて」

「ええ、ごめんなさいマルタ。お着替えなさります？」

「もちろん！」

こんな調子で、二人は日々を楽しく過ごしていた。主従の関係とは言え彼女らの暮らしにはさほどの格差もなく、仕立屋は令嬢と服を交換したり化粧を変えたりして令嬢の家族を驚かせたこともあるくらいだった。

「よくお似合いですわ、マルタ」

「ええ。じゃあシャロルも着替えて、一緒にお茶会に行きましょう」

「でも、私は使用人ですのに」

「何言ってるの、美人のくせに。ホラ」

二人は幸せだった。

だが、二人が二十歳を迎えた頃から、突然関係に変化が生まれた。令嬢に、結婚話が持ち込まれるようになったのだ。

それを境に、令嬢は急に忙しくなった。毎日のように代わる代わる会いに来る男達、良家に嫁ぐためにと厳しくなった教育、財界のサポート役としてこなさなくてはならなくなった仕事。

そして、臍履にして貰おうと様々な商売人が出入りするようになった。中でも多かったのは、仕立屋だ。地方都市一帯を仕切る老舗

から、最新の流行や生地を持ち込む商人までが、煌びやかな着物で令嬢の部屋を埋め尽くした。

それでも令嬢は、しばらくは親友の仕立てた物しか着なかった。親友の女も努力をし、流行や質の高さについて行こうと必死になった。

だが次第に、女の手掛けた服は相手にされなくなっていく。良質な弟子を抱え、高い技術を保持する商売人たちの品物は、高品質で速く上がってくる。そして何より、社交界で箔がついた。

女は何度も服を作り直した。令嬢の姿は、次第に遠ざかっていく。部屋の中まで入っていたのが、敷居の外、廊下の向こう、夕食での上座と末席、そしてとうとう、門の外。女は門を叩き、訴え続けた。「お嬢様、お願いですから中に入れて下さい！ 一着でも、一度でもいいですから、どうかお召しを！ ほら、こんなに仕立ててきました、こんなに……マルタ。お願いよ、マルタ！」

門が開くことは、なかった。

女が見る令嬢の姿は、扉の向こうのものになった。毎日多くの人と会い、疲れているはずのその姿は、しかし以前に比べて確実に美しくなっていくた。

上品で都会的なドレス、人形のように完璧な化粧。全身から漂う、凡夫を寄せ付けない大人の気品。

「マルタ……」

一方、美しい細工のされた鉄索越しに覗く仕立女の姿は、日増しに美しさを失っていった。乱れた髪、汚れた裾、ひび割れた指。それでも、女は仕立てをやめなかった。毎日毎日、令嬢に認めて貰うための着物を縫い上げ、持って行つては門前払いされた。そんなことが何週間、何ヶ月続いただろうか。

ある日突然、門が開き、馬車に乗った令嬢が従者を連れて出てきたのだ。実はようやく嫁ぎ先が決まり、先方の屋敷へ向かうところだったのだが、仕立女がそれを知るはずもない。久々に見る親友の姿に嬉しさでいっぱいになり、駆け寄ろうとした。

だが馬車を目の前にして、思わず立ち止まってしまった。馬車も、おんなに気づいた令嬢に止められる。

「誰かと思えばシャロールじゃない。なあに、その格好」

「……」

「口が利けなくなったの？ ああロイ、私の服乱れてない？」

「完璧でございます、お嬢様」

「そう、よかった」

女は会話など耳に入らず、ただ令嬢を仰ぎ見ている。

美しかった。ドレスの裾を掴む動作も、襟元に指をやって虫けらを見るように見下す仕草も。自分が世話をしていた頃とは全く違う、財界人としての女性が、完全に調和した美しさを身に纏って佇んでいた。

この人の側にいたい。改めて強くそう思った。

「ねえ、なにぼんやり立ってるのよ」

再び声を掛けられ、女は期待と不安に満ちて頭を上げる。

令嬢の琥珀色の目は、冷え切って淡々としていた。

「それに、そのおかしな布の固まりは何？ もしかしてドレスのつ

もり？ ……落ちぶれたわね、シャロール。出して頂戴」

どぎつい色を繫いだ、奇妙な着物を抱えた土気色の女に、馬車は後輪で砂を掛けていった。

96・match(後書き)

「」に匹敵する「、」

「」に調和する「。」

彼女を見つめ続けて、どのくらいになるだろう。雨の日も、雪の日も、夕焼けの中でも、朝霧の中でも。

僕と彼女の距離はとても近い。僕はいつも、横たわって天を仰ぎ続ける彼女の上に、少し傾きがちに覆い被さっている。彼女はそれでも、僕を見ようとはしない。

仕方がない。僕の体は彼女よりずっと大きいし、透けている。彼女の視界には捉えて貰えないのも、無理はない。けれどそれは、僕にとって辛いことだった。

僕たちの存在は、誰からも気付かれる事はなかった。日向を歩く者達にとっては、ここで息を潜めている僕たちのことなんてどうでもいいはずだ。けれどそれでいい。僕のレンズは、彼女を中心に置いて彼女だけをくつきりと映している。だから、それが満足で、幸せなんだ。

だからこそ、彼女にだけは、僕の存在に気付いて欲しかったのに。降り積もる雪が、彼女の周りだけ避けていても。雨上がりに僕が七色の光を彼女の上に浴びせても。彼女は、僕にはちりりとも関心を寄せてくれなかった。だが僕は、彼女からは離れられない。打ち捨てられた、見向きもされないガラクタは、身動きなど取れないのだ。

もう、幾つの夜を数えたか分からない。冷え切った僕の体は熱いとも寒いとも感じず、ただ汚れと錆を広げていった。このまま朽ち果てるのも悪くない。少しずつだが、共にくすんでゆく彼女を見ていると、僕はそんな風にも考えるようになっていた。

だが、別れの時はすぐそばに来ていたのだ。

枯れ葉。雪。新芽。そして、あたりを覆う緑がやってきた時、一年が経ったのだと気付いた。もはや見上げることもできない空から、眩い日の光が僕の背中に降り注いだ。

彼女を見て、はっとする。

白い光線が、彼女のいる一点に浴びせられているのだ。背の高い雑草に隠されていたはずの僕たちは、いつの間にか、明るすぎる太陽に晒されていた。

ふいに、何かが焦げる臭いがした。

僕は悲鳴を上げた。彼女が、僕を通して鋭くなった光の突端に灼かれていたのだ。

僕は動けない。光も、目も、彼女から逸らせない。午後の太陽はいやにのんびりと動き、いつまでもいつまでも、彼女の身に熱を浴びせ続けている。僕に出来ることは、悲鳴を上げながら、次第に歪み縮んでいく彼女を凝視することだけだった。

そして、最後まで一言も発せず、彼女は逝った。黒くなった固まりからは、焼けたプラスチックの臭いが、かすかに漂っていた。

97・focus(後書き)

「焦点を合わせる」、「

集中する」、「

焦点」。

断るのが得意な男がいた。

男は、宗教の勧誘やセールスは言うに及ばず、知人からの頼まれ事や遊びの誘いまで、自分が望まない物は全てきっぱりと断っていた。というのも、他人の申し出を易々と受け入れるのは恥であり、己の意志を持たぬ者のすることだと思っていたからである。

男は断ることに誇りを持っていた。

断れない女がいた。

気が進まなくても、体調が悪くても、怪しいと思っても、大抵の誘いや頼みは了承してしまふ。おかげで損ばかりしていたが、自分の性格をさほど駄目だとは思っていなかった。「はい」と言いさえすれば、話を持ちかけた人は気分がいいだろうし、自分が色々経験を積むこともできる。

女は、断らないことが自分の生き方だと思っていた。

ある日、男の元に見合い話が舞い込んだ。男は断った。

「私は自分の決めた人と結婚します」

同じ日、女の元にも見合い話が来た。女は二つ返事で受けた。

「喜んでお会いします」

見合い当日。

無理矢理連れてこられた男は、見合いの席で相手と二人きりにされると、早速切り出した。

「申し訳ないが、私はあなたと結婚するつもりはない。この話はなかつたことに」

「えっ」

相手は困惑し、さつさと席を立とうとする男にわけを訊いた。

「なぜって、私は他人に押しつけられた女性と結婚する気はないからですよ。愚かだと言われようが、自分の選んだ女しか私は愛さない」

「じゃ、あたしとは絶対結婚しないと？」

「ええ」

「他の誰とでも好きになつたら結婚するけどあたしとだけはしない？」

「ええ！」

「何があつても？」

「ええ、そうです！ たとえどんな不細工だろうが、通りすがりだろうが……」

「その人とか？」

「ええこの人とか！……」

消沈しながらテーブルの脇を通っていた女の腕を掴んで、男はハツとした。見ず知らずの女が、あどけない顔に不思議な覚悟と不安を込めてこちらを見ている。

見合いの相手は、腕を組んで男と女を観察している。

「わ…私と、お付き合いして頂けませんか」

男は意地になっていた。そして女は、『いつも通りに』二つ返事で頷いた。

「はい、喜んで」

見つめ合う二人を、男の見合い相手 「断らせない女」が、得たりとばかりに笑って眺めていた。

98・reject(後書き)

「
」を断る「
」
拒絶する「
」。

……のよ。あれでよかったの。丸く収まったんだから。……納得してくれるでしょ？

*

広い講堂に、無数の鉛筆を走らせる音だけが響いている。洋子は顔を上げ、一様に前屈みになった学生達の黒い頭を見渡して、再び手元に目を落とした。

目の前の問題の解答はさっぱり思い浮かばない。頭をかきむしる代わりに、鉛筆の先で何度か解答用紙を叩いてみる。書きかけの数字がゆらゆらとさまよい、一カ所の数字を消しては書き直す作業を延々と繰り返してしまう。

(よりによって、こんな時にまで癖が出るなんて……)

洋子は、忌々しげに唇を噛んだ。いつ頃からか、テストを受けている時に妙な癖が出るようになっていた。書いた答えにさっぱり自信が持てず、解答方法ではなく正解か否かを考えて時間を無駄にしてしまう。ある時など、その葛藤だけでテストの時間が丸々潰れたことがあった。

だが、今日はそんなことは許されない。なにせ大学入試の舞台なのだ。

洋子は一度深呼吸し、次の問題に取り掛かろうと試みた。鉛筆を持ち、問題文と睨み合う。

が、筆は進まなかった。何度やっても、間違った答えを書いている気しかしない。八方塞がりになり、力の抜けた指から離れた鉛筆が、音を立てて転がった。

(……もう、駄目か)

「こちゃこちゃになった頭に、ぼんやりと諦めが浮かぶ。洋子はこ

の癖が出たとき、結局いつも諦めてばかりいたのだが、今回のそれはより絶望的だった。

(どうしてこんなことに)

同時に開き直りが胸中にむくむくと起き上がってきた。問題が解けないなら、いっそ原因でも追究してみるか。

本番で緊張しないようにと予習復習をつんでばかりいた洋子は、これまで自分についてゆっくり考える時間を持ったことがなかった。(最初は、いつだったのか?)

気がつけば出ていた癖。中学生の頃にはもう習慣のようになっており、テストの度に頭を抱えていた。

なぜ、解答を中断してしまうのか。

なぜ、不安になるのか。

なぜ、間違いと思いつくのか。

癖が出ると、不思議なことにまるで答えを書きたくないとでも言うように手が止まってしまふ。元々成績は悪くなかったのに、いつしか洋子は勉強もテストも大嫌いになっていった。

なっっていった?

ならば、いつまで好きだったのか?

「うっー……」

隣の学生が、小さくうなり声をたてた。他の学生も同じような苦しみを味わいながらここにいる。何のためにこんなことを、と自問した人間も少なくはないだろう。小さく溜息を吐いた。

(お疲れ様。アンタらは受かればいいよ。私は落ちます。頑張っ

)

頑張ってね。でも、ほどほどに。

脳裏に、突然そんな言葉が浮かび上がった。洋子は思わず顔を上げる。

ランドセルを提げた自分。威圧的な女教師。左上に「73」と書かれたくしゃくしゃのテスト用紙。そんなイメージが次々と現れ、突然、洋子は思い出した。

洋子ちゃん、優しいわね。君のためにわざと間違えたんでしょ。君ね、元気出たって。明日からちゃんと学校来るって言うってたわよ。

女教師の顔は、半分が夕日に赤く染まっている。

洋子ちゃん、本当は1番になれたのにねえ。偉いわね、友達のために我慢して。ね、そんな顔しないで。いいのよ。これで良かったの

「よかねえよ」

息だけで呟き、洋子は鉛筆を握んだ。

自分は学力に自信がなかったわけじゃない。あの時、確かに手を抜いたこと、それが誉められてしまったこと、その後から思うように点が取れなくなったこと。それらの積み重ねが引っかかり、邪魔をしていたのだ。

もういらない。

もう、自分の答えを書けばいい。

洋子は猛然と鉛筆を動かし始めた。頭の中にそそり立った確信が、フル回転でこれまで積んだものを吐き出していく。

時間切れのサイレンは、まだ鳴らない。

99・convince(後書き)

「」を納得させる。「」、
「」を確信させる。

100・associate (前書き)

やや長文です。本編には無関係ですので、煩わしくお思いの方は読み飛ばして下さい。

「ENGLISH WORDS」、お陰様で年内に百話到達出来ました。感想を下さった方、お気に入り登録して下さい、そしてアクセスして下さいの方々、本当にありがとうございました。

101・以降は、「ENGLISH WORDS 2」とタイトルを改め、別の作品として連載したいと思います。

さて、近頃沢山の方の応援にも関わらず、作品のクオリティが低下していることは、作者も自覚している所です。誠に申し訳ありません。マンネリ化、ステレオタイプの連続……力不足をひしひしと感じています。

そのため、このシリーズを今のペースで継続するか否か、現在迷っております。大変申し訳ないのですが、来年以降、あるいは長期間更新が停止するかも知れませんがそのつもりで「駄目だこいつ」と思っておいて下さると助かります。

改めて、ここまでお付き合い下さり、本当にありがとうございました。来年も皆様に楽しんでいただけるよう、下手ながら精進するつもりです。

それでは、今年最後の話をどうぞ。

よいお年を。

「レンジさん」

町中で突然そう呼ばれ、私は驚いた。そんな呼び方をする人間には、ひとりしか心当たりがなかったからだ。

「久しぶりだね。こんな所にいたんだ」

私は黙って顔を上げ、彼を見つめていた。

彼と知り合ったのは、八年前の春。私が一年前から勤めていた家電量販店に、彼が入社してきたことがきっかけだった。彼は新卒社員の中では特に優秀で、商品も社員の名前もすぐに覚え、丁寧で明るい接客で次第に成績を上げていった。

彼が言うには、人間の名前と顔を家電に関連づけて覚えるのがコツだそうだ。この人は冷凍冷蔵庫、あの人は14型ノートPC、というように。

試しに尋ねてみたら、私は「二層式電子レンジ」とのこと。申し訳なさそうに答えていた彼の顔が印象的だった。

彼と私は、売場が近いのもあってか、次第に親しくなっていた。大抵は休憩や連絡の際に彼が私に会いに来て、事務処理の合間に雑談を交わす。その程度のことだったが、忙しい中で彼は私にとって寄りかかれる存在となった。

だが彼の方は、過労のためか、ある時期から調子を悪くしていた。仕事中も元気がなくなり、商品の名前を間違えたり、ついには同僚をうつかり家電の名前で呼ぶほどに精神の均衡を失っていった。私は随分前から「レンジさん」と愛称のようにして呼ばれていたし、構わないと思っただのだが、彼や周囲の社員からすると結構なショックだったらしい。彼は上司の勧めで休みをとり、そのまま辞めてしまった。

以来、一度も連絡すら取れなかった彼が、目の前にいる。突然のことに私は動揺し、すぐには言葉が出てこなかった。

「……久しぶりね」

やっとそれだけ言うと、彼は「相変わらずで安心したよ」と笑う。八年前と変わらない笑い方、けれどそこには疲労と寂しさがにじみ出ていた。

抱きしめてしまいたい、と思ったが、ここは公共の場で私は店員だ。思わず目を逸らして逡巡し、やっと、こちらも笑顔で応じようと向き直った時。

彼が、私を抱きすくめた。

「あつ、ち、ちよつと」

「……レンジさんが、欲しい」

私の狼狽など無視して囁いた彼の声に、八年間張っていた余分な力が、ふっと抜けていくのを感じた。

*

「今日は寒いなあ。ねえ、ココアあっためてくれない」

「いいわよ。コップ貸して」

約一分。電子音が鳴ったら、あたため完了の合図だ。

「はい、どうぞ」

「ありがとう。あー、あつたまるなあ」

「よかった」

幸せそうな彼に、にっこりと微笑みかける。彼はこたつに入ってココアを飲む。向かい側には、もう一つのコップ。誰も飲まないココア。

彼が私の中に入れる冷たいものを毎日、私が温める。二人分温めたものの片方を彼が口にする。もう片方は、結局冷めて部屋に溜ま

っ
ていく。

ごめんなさいね。でも大丈夫。私、あなたの食べ物を出し入れして
るっただけで幸せいっぱいなの。

100・associate(後書き)

(- A with B) 「AをBに関連づける」

「AからBを連想する」

(- with A) 「Aとつきあう」

仲間

同僚

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3671k/>

ENGLISH WORDS

2011年2月12日07時25分発行